

平成 28 年度中部地域における
ESD 推進のための先導的拠点整備業務

報告書

平成 29 年 3 月 31 日

特定非営利活動法人ボランタリーネイバーズ

1. はじめに

2014年にESDユネスコ世界会議が開催され、国連「持続可能な開発のための10年」キャンペーンが終了した。10年間の成果を振り返るとともに、その後継プログラムとして「持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム（GAP）」が採択され、日本においては、「我が国における『持続可能な開発のための教育（ESD）に関するグローバル・アクション・プログラム』実施計画」（以下「ESD国内実施計画」）が策定されるなど、次の展開が示されている。

本事業は、こうしたESDの次なる動きが展開される中、地域に多数存在する環境教育・学習を实践する拠点・施設が「ESDを推進する拠点」として、学習取組の質を高め、多様な主体の参加による学びの拠点へと進化するために実施したものである。

今年度、その対象拠点として以下の2ヶ所で伴走支援を行った。

- **泰阜ひとねる大学(長野県下伊那郡泰阜村)**
- **揖斐川流域環境学習拠点等連携事業(三重県/岐阜県)**

「泰阜ひとねる大学」は、泰阜村そのものを大学にみたく、村の資源を活用したESDカリキュラムをつくり、都市部の大学生を対象に、大学生のニーズを探りながら、実施した。

「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」は、三重県と岐阜県を流れる揖斐川流域を拠点とし、流域にある環境学習等拠点の連携によるESD教材を開発した。

それぞれのプロセスには「物語」があり、特有のESD教材ができあがった。
本報告書は、そのプロセスと成果をまとめたものである。

目 次

1. はじめに	2
2. 業務概要	4
(1) 業務の目的	4
(2) 業務の項目	4
(3) 業務実施期間	8
(4) 実施体制	8
3. 業務内容	9
(1) 専門家委員会への出席（専門家戦略会議/ESD フューチャーミーティング）	9
(2) 地域の環境教育等拠点における「ESD 推進」の先進事例の調査	12
(3) 地域の環境教育等拠点での「ESD 推進」に向けた実践拠点支援	21
①ESD コーディネーターとの連携による支援	21
②支援拠点の選定	27
③支援内容	35
4. 総括	95
(1) 本事業全体と各業務の構成	95
(2) まとめ ～今後の提案	102
5. おわりに	104

2. 業務概要

(1) 業務の目的

「環境教育等促進法」(平成 23 年 6 月)に ESD (持続可能な開発のための教育) の理念や協働取組の必要性が明示されている。この法律に基づき、中部環境パートナーシップオフィス (以下、EPO 中部) では、中部地域における環境教育等の自発的な取組を促進するとともに、ESD の視点と手法を取り入れた環境教育等を提案し、学校教育及び社会教育現場での実践を進めてきた。その成果として、地域に環境教育、ESD の先進事例が見られるようになったが、一方でそのノウハウや情報共有が十分にされておらず、ESD 取組を担う主体の創出や育成をいかに広げていくかが現状の課題となっている。

本業務は現状の課題を鑑み、地域における環境教育の取組について、ESD の観点からより深め、広げていくこと、を目的としている。

(2) 業務の項目

本業務の目的を達成するために、中部地域で、環境学習や社会教育を実践している拠点等を対象に、EPO 中部がもつ協働のノウハウや蓄積した情報、ネットワークを活かした「ESD 取組推進のための業務」を行った。

① 専門家委員会への出席

環境省が設置する専門家委員会の会議に計 4 回 (東京) に出席した。

② 地域の環境教育等拠点における「ESD 推進」の先進事例の調査

地域の環境教育等の拠点の現状や課題、先進取組を把握するために、インタビュー調査を行った。

ア 調査対象先の選定

中部 7 県の地方公共団体 (環境部局又は教育部局/教育委員会含む) とコミュニケーションを図り、調査対象者について、中部地方環境事務所(以下、地方事務所)との協議の上で候補を作成した。環境省において、候補に基づき対象が選定された。

イ GEOC が主催する説明会への参加

インタビュー調査を行うにあたり、地球環境パートナーシッププラザ (GEOC) が主催する説明会に参加した。

ウ インタビュー調査の実施

環境省示す調査項目をベースに、選定した調査対象拠点 (7ヶ所) を対象にしたインタビュー調査を実施した。1 拠点 2 回のインタビュー調査を行ったが、1 回目は個別インタビュー、2 回目はグループインタビューを行った。インタビュー調査は録音し、必要なデータ (逐語録等) について GEOC に送付した。

③地域の環境教育等拠点での「ESD 推進」に向けた実践拠点支援

地域の環境教育等拠点で、ESD の視点や手法を取り入れた学習や取組が展開されるため、以下の支援を行った。

ア ESD コーディネーターとの連携による支援

環境省が指名する ESD 評価コーディネーター（以下、ESD コーディネーター）と連携して支援を行った。事業実施前に、ESD コーディネーターを対象に本事業と中部地域の環境教育及び ESD 取組の現状について説明をし、どのような支援策を提供するかについて意見を交わした。事業実施期間においても、進捗状況を報告し、新たな視点や手法についての意見や提案を得た。事業実施終了時には、拠点の変容及び変容に至った支援方法についての評価を得た。

»ESD コーディネーター 大鹿 聖公氏（愛知教育大学教授）

イ 支援対象拠点の選定

支援対象候補となる環境教育等拠点を複数選出し、拠点のある自治体、地方事務所の了承を得て、以下の 2 ケ所を選定した。

»泰阜ひとねる大学(長野県下伊那郡泰阜村)

»揖斐川流域環境学習拠点等連携事業(三重県/岐阜県)

ウ プラットホームの設置

支援対象拠点におけるパートナーシップの形成、研修コーディネート、プログラム作成への助言等の伴走支援を行うため、各拠点に「伴走支援プラットフォーム」（以下、プラットフォーム）を設置した。

»泰阜ひとねる大学プラットフォームメンバー

9 名 内地方自治体（長野県泰阜村）

»揖斐川流域環境学習拠点等連携事業プラットフォームメンバー

10 名 内地方自治体（岐阜県揖斐川町、岐阜県輪之内町、三重県桑名市）

工 評価会議の開催

支援対象拠点が抱える課題やニーズを共有し、どのような ESD プログラムが必要か、どのように ESD 取組を実践するか、等について検討、評価する会議として「評価会議」を支援の前後に 2 回開催した。ESD コーディネーターの参加を必須とした。

本地域では、支援拠点 2 ケ所とも、プラットフォームメンバーが評価会議メンバーとなった。具体的な運営方法や会議内容は、環境省から示された。会議内容は録音し、必要なデータ（逐語録等）について GEOC に送付した。

» 泰阜ひとねる大学

第 1 回評価会議 日 時：平成 28 年 8 月 10 日(火)13:30~15:30

場 所：泰阜村役場

第 2 回評価会議 日 時：平成 29 年 1 月 27 日(金)14:30~16:30

場 所：泰阜村役場

» 揖斐川流域環境学習拠点等連携事業

第 1 回評価会議 日 時：平成 28 年 8 月 31 日(水)14:00~16:00

場 所：輪之内町エコドーム

第 2 回評価会議 日 時：平成 29 年 2 月 13 日(月)10:00~12:00

場 所：EPO 中部

オ 伴走支援計画の作成

第 1 回評価会議の結果を踏まえ、ESD コーディネーターと連携し、対象拠点の伴走支援計画を作成した。伴走支援計画を作成するにあたり、その内容については環境省本省が設置した専門家委員会の議論等を反映させるため、ESD コーディネーターと密にコミュニケーションを図り作成した。計画には、支援対象拠点の利用者のニーズを把握するためのアンケート、ヒアリング等を組み込んだ。

カ 伴走支援計画に基づく支援業務

プラットフォームメンバーと協働して、ESD プログラムづくりや実施が行われた。多様なステークホルダーを構成員とするプラットフォーム会議では、それぞれの支援対象拠点を取り巻く環境や人材が有効に活用される地域色あふれる内容となった。

» 泰阜ひとねる大学

名古屋短期大学学生や地元住民、愛知教育大学学生の本取組に対するニーズや思い、期待を把握するヒアリングやアンケートを行った。

「泰阜ひとねる大学」がもつ魅力的なカリキュラムや、カリキュラムを体験した学生や村の住民の生の

声等を掲載したパンフレットとパネルを作成し、ESD 拠点としての本取組の価値を伝えることを支援すること、プラットホーム会議を実施した。

〈プラットホーム会議〉

泰阜村のもつ自然、歴史、文化、人々の暮らしと都市部の学生をつなぎ、泰阜村での継続的な体験を通じて、お互いに必要なものを見出し、お互いが「ひとねる」学びを享受する、その体験による生の声と、学びのプロセスを可視化するパンフレットとパネルを作成した。

[会議の実施]

- 第 1 回プラットホーム会議 平成 28 年 7 月 4 日(月)
- 第 2 回プラットホーム会議 平成 28 年 9 月 16 日(金)
- 第 3 回プラットホーム会議 平成 28 年 11 月 18 日(金)
- 第 4 回プラットホーム会議 平成 29 年 1 月 27 日(金)

〈他支援内容〉

- ・名古屋短期大学・地元住民を対象にしたヒアリング（学生 9 名 住民 1 名）
- ・愛知教育大学学生を対象にしたアンケート（学生 36 名）
- ・村長及び村民を対象とした報告会

≫**揖斐川流域環境学習拠点等連携事業**

上流、中流、下流の環境学習等を実践している拠点が共通に使える「ESD 教材」を作ることとした。各拠点をインタビュー調査をし、プラットホームメンバーと地元住民とともに、それぞれの地域の特色を共有し、揖斐川流域の持続可能性を伝える ESD 教材「紙芝居」「映像教材」「資料集」の作成を支援した。教材を作成する過程で、主に揖斐川流域にある小中学校、高校の教員、環境学習を実践している NPO の方の参加を得て、教材の活用方法を検討するための意見交換会を行った。

〈プラットホーム会議〉

揖斐川流域の環境学習拠点等が共通に活用できる「揖斐川流域から持続可能な地域づくりを考える」教材の作成を進めるプラットホーム会議を実施した。

[会議の実施]

- 第 1 回プラットホーム会議 平成 28 年 7 月 6 日(水)
- 第 2 回プラットホーム会議 平成 28 年 7 月 26 日(火)
- 第 3 回プラットホーム会議 平成 28 年 12 月 27 日(火)
- 第 4 回プラットホーム会議（ESD 教材お披露め&意見交換会）平成 29 年 1 月 30 日(金)

〈他支援内容〉

- ・教員を対象にした意見交換会での意見の抽出（教員 7 名 他 12 名）
- ・拠点利用団体（者）へのインタビュー調査（4 団体/5 名）

キ 報告書の作成

中部7県のステークホルダーを対象に実施したインタビュー調査及び選定した支援対象拠点の支援内容や方法、その成果についてまとめた。

(3) 業務実施期間

平成28年4月28日～平成29年3月31日

(4) 実施体制

中部環境パートナーシップオフィス担当 3名（新海洋子 高橋美穂 原京子）

泰阜ひとねる大学



揖斐川流域環境学習拠点等連携事業



3. 業務内容

(1) 専門家委員会への出席（専門家戦略会議/ESD フューチャーミーティング）

ESDの視点を取り入れた環境教育の実践を拡大するために、その評価手法や企業との連携、中間支援コーディネーターの役割について学びあった。

第1回は、今年度 ESD 事業についての意見交換を行い、全国で取り入れる予定の評価手法についてのセミナーを受け、ワークショップに参加した。

第2回は、地域での継続的な事業展開を考えるため、企業が地域で取り組む事例を共有し、企業との連携のあり方、中間支援コーディネーターの役割についてのワークショップを行った。

第3回は、講師を迎えて支援している取組のキャッチコピーを考え発表し、伝え方について学びあった。

第4回では、評価手法である MSC 手法の講義を受け、インタビューなど MSC 手法の演習を行い、本取組における活用方法について意見交換を行った。

【概要】

●第1回専門家委員会

日時：平成28年7月14日(木)13:30～16:30

場所：NATULUCK 飯田橋東口駅前店 202 中会議室（東京）

ゲスト：田中 博氏（参加型評価ファシリテーター）

出席：EPO 中部 1 名

〈内容〉

- ・本事業、評価会議実施方針について
- ・参加型・質的評価手法 MSC 入門セミナー

●第2回専門家委員会

日時：平成28年9月28日(水)13:30～16:30

場所：地球環境パートナーシッププラザ（東京）

ゲスト：三井物産株式会社 環境・社会貢献部 社会貢献室 次長 斎藤 整氏

株式会社資生堂 サスナビリティ戦略部 戦略グループ マネージャー 家田えり子氏

株式会社 JTБ コーポレートセールス 営業一課 中央省庁担当 マネージャー 影山葉子氏

出席：EPO 中部 1 名

〈内容〉

- ・企業の CSV の説明と事例紹介
- ・環境教育を通じた企業との「具体的な」協働のあり方を検討、意見交換

●第3回専門家委員会

日時：平成28年11月25日(金)15:00～18:00

場所：地球環境パートナーシッププラザ（東京）

ゲスト：上田 壮一氏（一般社団法人 Think the Earth 理事/プロデューサー）

出席：EPO 中部 2名

〈内容〉

・事業のキャッチコピーを考え、伝え方を学びあう

●第4回専門家委員会

日時：平成28年12月20日(火)13:30～16:30

場所：スタンダード会議室 虎ノ門アネックス2階C会議室（東京）

出席：EPO 中部 1名

ゲスト：田中 博氏（参加型評価ファシリテーター）

〈内容〉

・MSC手法の講義と演習 他

【成果】

専門家委員会では、多様なゲストを迎えて、EPO 担当者への情報やノウハウ提供、ワークショップ等を行い、得た情報やスキルを本業務活用する方策を学びあった。

第1回と第4回は、本業務の会議体として設置した「評価会議」で行う、評価手法についての講座と演習を行った。MSC（Most Significant Change）手法を実施することとし、この手法がどのようなものを講座と演習で学んだ。MSC 手法は、参加型評価であり、事業に関わった当事者とステークホルダーによって行われるものである。ステークホルダーが事業実施期間に感じた「最も重大な変化」と感じたエピソードとその理由を可視化し、ステークホルダー全員でエピソードを共有し、全員の中で「最も重大な変化」と感じたエピソードとその理由を明らかにする、という手法である。「最も」なエピソードをどう選ぶのか、意見交換の過程が重要となる。

この手法を使って、支援拠点にて第2回評価会議を行った。会議前にそれぞれステークホルダー 5～6名がエピソードを作成し、会議当日に全ステークホルダーで共有し、「最も重要な変化」と思われるセンテンスを選び、その理由を可視化した。

MSC 手法を少しアレンジして、全員で一つの「重要な変化」を選ぶことはしなかったが、それぞれの「重要な変化」とその理由を共有し、それに対して意見を出し合うプロセスにおいて、ステークホルダーの思いや考えの理解や共感性が高まり、事業に対する参加意欲が高まった。まさに、参加して評価しあう空間をつくることができた。エピソードを作成したステークホルダーも、作成しなかったステークホルダーも、MSC手法での評価（ふりかえり）に満足をしていた。

第2回は、企業のCSRやCSVの取組について学んだ。本業務で拠点の支援をする際に、企業とどう連携し、協働できるかの可能性について考えた。今年度の中中部が支援している拠点での企業の参

加はないが、今後の展開として、いかに地元企業を巻き込むかの視点が重要であることを再認識した。

「泰阜ひとねる大学」においては、企業の社員研修として「泰阜ひとねる大学」の活用、「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」においては、揖斐川流域の企業を巻き込んでの ESD 取組の展開が今後の検討課題として考えられる。

第3回は、支援している拠点を周知するための「キャッチコピー」づくりを行い、伝える、伝わることの重要性を学びあった。

中部では、「泰阜ひとねる大学」は「あったかーい村、あったかーいまち 泰阜でひとねる」、「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」は「冠山のひとしずく いびがわ あれあれ？ものがたり」をつけた。各地方 EPO、それぞれ支援している拠点到キャッチコピーをつけ、全員で投票をした。

この会議を受けて、「伝わるようにつくる」を十分に検討し、言葉やイラスト、レイアウトにこだわり、「泰阜ひとねる大学」のパンフレット、「揖斐川流域 ESD 教材」を作成した。「揖斐川流域 ESD 教材」の紙芝居のタイトルを「いびがわ あれあれ？ものがたり」に、映像教材は「揖斐川の風土と暮らし」、資料集は「もっと知りたい！ 揖斐川・揖斐川流域のこと」と題した。

専門家委員会で取り上げた、「参加型の評価手法」「企業との連携」「伝わる方法」は、ばらばらなテーマの研修のように見えるが、上述のとおり、いずれも本業務の拠点支援に活用できるものであり、実際に十分に活用することができた。

第2回専門家委員会の様子



講師から「伝わる」ことの大切さを学ぶ



各 EPO のキャッチコピー

(2) 地域の環境教育等拠点における「ESD 推進」の先進事例の調査

地域の環境教育等の拠点に対して、ESD の先進事例の収集を行うため、インタビュー調査を実施した。特に、昨年度まで実施していた「ESD 環境教育プログラム実証事業」に関わっていたステークホルダーの活動や拠点を対象に、その後の活動の展開を把握すること、及び各地域の環境教育及び ESD 取組、拠点に関する情報収集を目的として実施した。

① 調査対象先の選定

昨年度まで実施していた「ESD 環境教育プログラム実証事業」の各県のステークホルダーのその後の活動状況を含めリストアップをし、地方事務所と対象候補を検討、環境省が対象を選定した。

[候補リスト]

●先導的拠点調査の調査対象先候補			
			ブロック 中部
詳細は当日説明をしますが、この調査は、ESDの視点のうち、とりわけ他のステークホルダーと協働したことによる意識・行動変容の促進効果を評価することが目的です。以下の例を参考にしながら、暫定的なものでかまいませんので、各都道府県1例ずつ調査候補を提出してください。◎：推薦 ○：変化がある △：変化がまあまあある			
都道府県名	優先	対象となる拠点名（施設等の名称）	ESD・環境教育プログラム実証事業を通じて生まれた新たな取り組み（事業実施までなかったもの）
富山県	○	とやまユネスコ協会	富山市内の小学生を対象にESDパスポートを配布し、プログラムを実施。ESD環境教育プログラム実証事業においては「富山県のワーキンググループ」メンバーとして参加いただき、授業づくり等に関わっていただいた。さらに学校との連携を進めている。
	◎	環境教育ネットワークとやまエコひろば	行政や企業と協働して環境教育を企画実施している団体である。本事業に参加いただいたことにより、学校教育でのESDの実践、学校と地域の連携による学習の成果効果をより意識され、活動を展開されている。
	△	北陸ESD推進コンソーシアム（富山コーディネーター）	本事業に北陸ESD推進コンソーシアムのESDコーディネーターに参加いただいた。ユネスコスクールのネットワーク及び交流の拡大をすすめている。
	△	富山市立神通碧小学校	実証事業を通して子どもの思考に沿った授業づくりをすることができた。また、話し合いなど、子ども同士の気づきから学び合うなどの、子どもの育みたい力に対して組み入れる手法による効果を把握した。
石川県	△	北陸ESD推進コンソーシアム（石川コーディネーター）	本事業に北陸ESD推進コンソーシアムのESDコーディネーターに参加いただいた。ユネスコスクールのネットワーク及び交流の拡大をすすめている。
	◎	金沢エコライブラー	本事業において、団体の持つ情報やノウハウを提供し、授業づくりを行った。学校と協働するためスキルやルール等を地域に周知を進めている。
福井県	◎	NPO法人エコプランふくい	学校との連携によるESD事業を積極的に展開され、県内でESDの視点、及び手法を組み入れた地球温暖化防止に関する学習プログラムを企画実施している。
	△	北陸ESD推進コンソーシアム（福井コーディネーター）	本事業に北陸ESD推進コンソーシアムのESDコーディネーターに参加いただいた。ユネスコスクールのネットワーク及び交流の拡大をすすめている。
	△	ふくいユネスコ協会	ユネスコスクール支援、学校と地域の連携によるプログラム作りに関わっていただいた。
長野県	◎	NPO法人みどりの市民	長野県でのESD実践拡大のために多様なステークホルダーを交えてのESDフォーラムを開催した。ユネスコスクール支援、ESD普及のためのネットワークを拡大している。
	◎	中信地区環境教育ネットワーク	校に外部講師を派遣し、環境教育を実施していたが、学校と環境教育プログラムを作成した経験により、単発ではなく子どもの思考に沿った体系的な学習プログラムづくりを行うようになった。また、学校の計画するカリキュラムに外部講師をいかに効果的に活用するか、といった視点とスキルを得て環境教育の派遣を効果的に、継続的に実施している。松本市と協働したしくみづくりを行っている。
岐阜県	◎	NPO法人e-plus生涯学習研究所	学校の先生との授業づくりの際に、先生方のねらいに沿い、外部講師と先生の役割の分担するなど、より効果的な学習プログラムづくりに経験を活かしている。また、ESDの視点を提案している。
	◎	岐阜市立長森南中学校どちらか羽鳥市立正木小学校（異動されていない学校）	ESDの視点や手法を学び、授業にESDを意識して取り入れるようになった。
愛知県	◎	板山小学校	学校にある素材を活用し、地域の協力を得た1～6年生までのカリキュラムづくりをしていく中で、事業実証を行い、子どもの主体性を育む外部講師の活用について、ESDの視点により育みたい力を強化していくようなプログラムづくりの視点を獲得、展開している。
	◎	愛知教育大学	本事業において、ESDに取り組む教員や子どもの様子を把握し、今後のESD実践拡大のための支援プログラムを検討している。
三重県	○	四日市市立中部中学校	ESD授業のつくりかた、子どもの思考を促さることによる学習の効果を体感し、ESDの学びが有効であることを把握し、スキルやノウハウを活用した授業づくりを行っている。
	○	環境教育ネクストステップ研究会	四日市市版ESDカレンダー作成をし始めていたが、本事業でさらに情報及びノウハウを習得し、反映させた。四日市市内で研修などを実施。
	◎	四日市市教育委員会	四日市市版ESDカレンダーを全校配布

[決定した調査対象先リスト]

地域	対象	活動内容
富山県	環境教育ネットワークとやまエコひろば 環境教育コーディネーター 本田 恭子氏	学校教育での ESD の実践、学校と地域の連携による学習の成果効果を踏まえ、活動を展開している。
石川県	金沢エコライフクラブ 代表 青海 万里子氏	団体の持つ情報やノウハウを提供し、授業づくりを行われ、学校と協働するためスキルやルール等を地域に周知を進めている。
福井県	NPO 法人エコプランふくい 事務局長 吉川 守秋氏	学校との連携による ESD の実践を積極的に展開し、ESD の視点、及び手法を組み入れた地球温暖化防止に関する学習プログラムを企画実施している。
長野県	NPO 法人みどりの市民 理事 渡辺 隆一氏 ※信州大学教育学部特任教授	ESD 実践拡大のために多様なステークホルダーを交えての ESD フォーラムを開催するなど、ユネスコスクール支援、ESD 普及のためのネットワークを拡大している。
岐阜県	〈第 1 回〉羽島市立正木小学校 教員 大野 由里子氏	ESD の視点や手法を学び、ESD を取り入れた授業づくりをしている。
	〈第 2 回〉岐阜県ユネスコ協会 会長 平井花画氏	ESD の視点や手法を学び、ESD を取り入れた授業づくりやユネスコスクール支援を担われている。
愛知県	愛知教育大学理科教育講座 教授 大鹿 聖公氏	ESD に取り組む教員や子どもの変化や本事業の成果効果を検証するなど、今後の ESD 実践拡大のための支援プログラムを検討している。
三重県	学校法人津田学園 津田学園中学校・高等学校 校長 寺本 豊氏 ※津田学園小学校 前校長	学校長として教員の、ESD 及び地域の教材・人材を活かした授業づくりへの意識を高め、学校全体に ESD を取り入れた授業づくりや取組のブラッシュアップしている。

②GEOC 主催の説明会への参加

1 回目のインタビュー調査を受け、第 2 回目に行うインタビュー項目、内容の検討及びインタビュー内容からESD取組の促進のために重要な要素を抽出し、環境省が製作する冊子に活用される等の説明を受けた。また、第 2 回目の評価会議に向けて、MSC 手法の専門家を交えての評価方法の検討を行った。

●全国研修会

日 時：平成 28 年 8 月 18 日(木)13:30～16:30

場 所：地球環境パートナーシッププラザ（東京）

講 師：田中 博氏（参加型評価ファシリテーター）

出 席：EPO 中部 2 名

〈内 容〉1 回目のヒアリング調査のまとめの共有と 2 回目の調査方法の検討

③インタビュー調査の実施

●第 1 回調査

〈インタビュー内容〉

* 自己紹介

* 質問 1 ご自身の取り組む環境学習、ESD 実践について

* 質問 2 昨年度まで実施していた「ESD 環境教育プログラム実証事業」について

* 質問 3 自分の属する組織とは違う人達との出会いを通じて、最も大きな変化は何か 他

〈対象と実施日〉

地域	対象	実施日/場所
富山県	環境教育ネットワークとやまエコひろば /環境教育コーディネーター 本田 恭子氏	平成 28 年 6 月 10 日(金) EPO 中部
石川県	金沢エコライフクラブ /代表 青海 万里子氏	平成 28 年 7 月 7 日(火) 金沢エコライフクラブ事務所
福井県	NPO 法人エコプランふくい /事務局長 吉川 守秋氏	平成 28 年 6 月 23 日(木) 福井市 NPO 支援センター
長野県	NPO 法人みどりの市民 /理事 渡辺 隆一氏 ※信州大学教育学部特任教授	平成 28 年 7 月 12 日(火) 長野市内打合せスペース
岐阜県	羽島市立正木小学校 /教員 大野 由里子氏	平成 28 年 7 月 21 日(木) 正木小学校
愛知県	愛知教育大学 /理科教育講座 教授 大鹿 聖公氏	平成 28 年 7 月 13 日(水) EPO 中部
三重県	学校法人津田学園津田学園中学校・高等学校 /校長 寺本 豊氏 ※津田学園小学校 前校長	平成 28 年 7 月 20 日(水) 津田学園中学校

●第2回調査

第1回のインタビュー内容をさらに深めて把握するために、グループインタビューを実施した。

〈インタビュー内容〉

* 自己紹介

* 質問1 ご自身が捉えているESD、環境教育との違いについて

* 質問2 今後、取り組んでみたいESDの実践について

* 質問3 ESD実践が活性化するために必要なことについて 他

※第2回目については、「ESD活動支援センター（地方）」に対する意見、提案もお聞きした。

日 時：平成28年12月7日(水)17:30～19:30

場 所：ウインクあいち1201

〈対 象〉

富山県：環境教育ネットワークとやまエコひろば環境教育コーディネーター 本田 恭子氏

石川県：金沢エコライフクラブ 代表 青海 万里子氏

福井県：NPO法人エコプランふくい 事務局長 吉川 守秋氏

長野県：NPO法人みどりの市民 理事 渡辺 隆一氏

※信州大学教育学部特任教授

岐阜県：岐阜県ユネスコ協会 会長 平井 花画氏

愛知県：愛知教育大学理科教育講座 教授 大鹿 聖公氏

三重県：学校法人津田学園津田学園中学校・高等学校 校長 寺本 豊氏

※津田学園小学校 前校長

第1回調査（津田学園中学校・高等学校 寺本氏）



第2回調査



【第1回調査のポイント】※逐語録（電子媒体に収録）より抜粋

地域	対象	ポイント
富山県	環境教育ネットワークとやま エコひろば	<p>ESD の授業づくりをすることによって先生も変わる。それまでは、この時間はこれ、次はこれと先生が時間を積み上げてきた。ESD はそうなるとは限らない。先生が一方向的に積み上げるのではなく、やり始めてみたら子ども達の関心ももっとこうだったと少し路線の変更や、回り道をするなど出てくる。柔軟に対応しながら、最終的に、授業目的をちゃんと果たさなくてはいけない。先生の幅広さが求められてくる。先生自身も、子どもの声を聞く、相手を知る。そういう感覚で子ども達を見られるようになる。授業のつくり方が変わっていく。子ども達も受け身の授業ではなくて、能動的な授業になる。子どもも先生も一緒に変わっていく感じであった。</p> <p>授業を通して、最初と最後で、子どもたちが自信をつけ、発表することが上手になった。それだけ自分達の考えがはつきりしてきた。そんな変化を子ども達にすごく感じた。授業の中で、しっかりと捉えていくことが大事である。</p>
石川県	金沢エコライフくらぶ	<p>地域の人達は学校に何うチャンスがなく、授業をつくる場所から関わったことは、よかった。先生方は、いろいろとやってみたくてというイメージで話をされるが、異動されることもあり、地域の特有のいろんな資源、お店や川については知らないことがあって、そういうことを外から「ここってこういうところなんだよね」「こういうお店いっぱいあるよね」と情報提供することで先生の最初のアイデアがどんどん変わっていく。そこがとても面白かった。一緒につくり上げることがなかなかできなかったのよかったです。</p> <p>地域の人達が子ども達に直接教える機会を体験できたことは、その方にとってもすごく財産になる。自分が地域の子供達を育てる役割をもっていることに気づいたり、地域で子ども達を育てていく、という雰囲気作りのきっかけになった気がする。地域のいろんな方たちの知恵が学校に集結し、授業に活かされていくとしたら、すごく可能性が出てくる。</p>
福井県	NPO 法人エコプランふくい	<p>学校と連携するにはどうしたらいいのかということに関して、非常に参考になった。学校と地域と一緒に考えていくことが、これからの学校教育の中で非常に重要だということが分かった。、今年度実施する市との事業に対しても非常に参考になり、その発展形として、やっていけるのではないかと考えている。</p> <p>NPO は専門性を持っている。そういう意味で学校のお手伝いができる。地域とどうつながっていくかということに関して、ある程度の経</p>

		<p>験や実践もあり、NPOとしての役割が果たせる。</p>
長野県	NPO 法人みどりの市民	<p>環境教育とESDの違いがはっきり見えてきた。それぞれのメリットとデメリットがあって、環境教育は、「環境問題が大変だよ、だからちゃんと環境教育やろうね」という取り組み易さがある。ESD の場合には、教育自体を大きく変えていく可能性がある。今の社会の中で大きく変換していかなくてはいけない。ESD にはその可能性がある。ESD を新しい学習のような捉え方をしたら、環境教育と同じで、現場が窮屈になる。そうではなくて、今ある学校の中身に少しずつ実質的な子ども達が学び易く、効果的な教育をしていくと、いろんな課題に適応できる新しい学習の一つの大きな目になる。3年間付き合うことでESDをきちんと学ぶことができた。</p>
岐阜県	羽島市立正木小学校	<p>教員でも教員でなくても、子ども達の生きる力をなんとか持続させていきたいという強い思いは一緒だと感じた。そのためには本当にいろんな方法があり、子ども達に一番いいものは何かを考えることを本当に大事に、大前提にしていかなければいけない。そういう気持ちで、教員は日々自分の担任する子ども達と一緒に活動していかなければいけないことを痛切に感じた。日々の授業の中での手法が変わってきた。ESD の授業に関わって、教員の子ども達に向かう気持ちが少し変わった。気持ちが引き締められたと感じている。</p>
愛知県	愛知教育大学	<p>教師が変われるきっかけは、最終的には授業が上手くいったかどうかも含めて、子どもがどう変わったかを教師が感じた時である。</p> <p>立場が違う人間と話すと、物事をみる価値観や視点がすごく違うと感じる。自分自身はどうなのかという自分を見つめ直す機会にはすごくなる。ゴールに向けて活動するには、どういうゴール設定にするか、どういう方針でベストな、ベターな状況を見つけていくのかを考えるようになった。すごくよかった。</p>
三重県	学校法人津田学園津田学園中学校・高等学校	<p>もっと外の意見、考え、人をどんどん学校に呼び込まないとだめだと、教員全員が感じた。そのことによって子ども達が成長するのはもちろんだが、教師として自分も成長したいという気持ちが随分生まれてきた。外からの人たちの受け入れの塀がESDをやることで一気に下がった。</p> <p>たくさんいろんな人と会って、教師が刺激されないといけない。刺激を受けて子ども達に伝えたいという強い欲求が大切である。もちろん学習指導要領に沿った形でなければいけない。みなさんと出会って、より積極的になれた。</p>

【第2回調査のポイント】※逐語録（電子媒体に収録）より抜粋

〈ESDと環境教育との違い〉

- ・環境教育のベースは自然。地球上のすべての根本にある自然を知る、そして自然と私達の暮らしぶりのつながりを知ることだと思う。ESDは、国際理解やジェンダーなどもっと幅広い観点で進めていく必要がある。その中で共通していることは多様性を排除しないで、お互い認めあい、理解し合うということ。その多様性をESDの基幹に備えてやっていければいい。
- ・環境教育をいろいろ試行錯誤し、壁に突きあたってきた。ESDを知って、その壁を越えられるという感覚があり、今はずっとESDとして実施している。環境教育では、ごみ、温暖化や自然といった各分野を柱立てにしていくが、ESDでは、起こっている課題、問題に対して解決していこうとすると、その分野の壁を突き破って、広げていかなければならない。
- ・ESDは、単なる環境教育ではなく、人づくり、その関係性をどう捉えるかである。環境問題でいうと、個別いろいろの問題を捉えていくが、ESDは、「持続可能な社会づくりのための」である。地域の様々なESDに関わり、その地域をどのように維持、発展させていくか、そのために単に環境ではなく、地域づくりをどうしていくのかだと感じる。
- ・ESDはSD、持続可能な社会とはどんな社会なのかを考えたり、学習したりする中で現状を振り返って、それに近づくためにはどうしたらいいかと考えていく、バックキャストイング。環境教育は少し後ろ向き、ESDは前向きだ。
- ・環境だったはずが人権になり、教育問題に関わるようになった。国際問題も国際交流も全部ESD。
- ・環境教育は環境問題をどう解決していくか、その方法や知識などを学ぶ。ESDは環境に限らずいろんな問題に対してどう行動していくか、どういう力があればいいのかという資質能力、態度を大事にしている。
- ・環境教育には知識を学んでいくようなイメージで人と自然との関係しかないように思う。ESDはもっと広がりがあり、人と自然、人と人、地域と人、地域と地域というような広い範疇で物事を捉えられる。環境教育だと教えがちになるが、ESDは自分が社会のために何が出来ていて、何が出来るのかといったことを考えさせやすくなる。
- ・環境教育はどちらかという知識という意見があったが、将来どんな社会をつくっていくか、どんな地球にしていきたいかというのは、ESDと全く一緒。入口が環境という違いだけ。

〈ESDが活性化するために必要なこと〉

- ・母子手帳があって離乳食の教育があるように、親と子どもと一緒に体験できる場があることが重要。
- ・あらゆることが関連して、それが社会的課題につながっているという意識、問題を教材化できる力を付けていくような教員の育成と、意欲のある先生をバックアップすることが大事。
- ・過疎地で子どもたちに地域の誇りを持たせるような教育をやってほしいと思う地域が多く、町長さんが考え始めている。そういう中でESDという将来地域をどうするかという教育を首長に直接持ち込む。
- ・学習指導要領は、こういうものを教えましょうから、こういう子どもを育てていきましょうという教育の方向に変わりつつある。ESDを浸透させるいいチャンス。上手く進められるといい。
- ・自分達で問題を解決していく力を付けていく授業スタイルがもっと主流になれば、環境教育もESDもそれに乗っかって、有効に進めていける。
- ・環境教育やESDというお題目だけで自分の関心のないところで語られていると先生も教える気にならない、学生も学ぶ気にならない。環境教育でもESDでも地域など身近なところは何があるか、どうなのかと問うていくと、学びたいこと、どうしたいかを考える、そこを考えるようにさせる。
- ・環境でなくても、文化や歴史など地元で考えなくてはいけない地域の問題を扱うことが大切である。
- ・若い先生は、教科書の全国統一な話を地元の話にかみ砕いて話ができないところがある。そういうアレンジメントが難しいので、周りの人が支える。学校、地域、親や地元の人が支え合っていくといい。
- ・意識しないでESDをしている先生は結構多い。それをピックアップしていく。「これがESD」と認識できる機会がすごく大事で、必要になる。自分にもできるというつつきやすさを仕組んでいく必要がある。
- ・学校で学ぶことを地域の人達に出していく、相互かもしれないが、そういうことが大事。

- ・環境教育も参加を強調したり、言い過ぎると何のためにするのか捨てられてしまう。ESD にも同じ弊害が出て来る可能性がある。ESD を何のためにするのか、を理解し、実施する。
- ・地域人材を育てているが、研修を受けてもその人達がどこからも呼ばれない。コーディネートするスキル関心、地域ニーズもみた上で、その場づくりから教材づくりの手間を探してできる目処があるといい。

〈取り組んでみたい実践〉

- ・子どもには実際に体験できる教育が必要。食育とも関係させて、1年生から種まき始めて、自分の口に入るまでやろうと、つけものをつくる。やっていくと消費者教育もできる。そういうことがあるといい。
- ・市の委託事業で地球温暖化防止に関して、2時間の出前授業、家庭での実践、2時間の出前授業をし、子ども達が自分で考えて、実践した結果をどうするか自分の内発的な表現、生徒同士で勉強するという ESD 手法で実施している。この実践を深め、探究を深めるプログラムにしたい。
- ・川の上流で小水力発電を計画している。小水力による地域活性化に役場は支援してくれている。川をめぐる子ども達の体験、観光を進めようとしている。これから人口がどんどん減っていこう地域をどのように活性化させていくか、小水力という事業を通じてやりたい。
- ・北陸3県で消費者教育推進フォーラムを、消費者庁と地方の消費者団体、文科省の消費者教育フェスタと共催する仕組みがあり実施した。消費者問題の所管は県民生活課、教育委員会を動かすのが大変だったが、学校教育課と生涯学習課の課長、各市町の教育委員会、学校の先生にも参加いただき、消費者団体と学校の先生、民間、教育委員会の方が現場を知りあう機会となった。これを継続したい。消費者被害の問題だけではなく、環境、災害も含めた地域づくりを一緒に取り組みたい。
- ・学校の社会科見学は必須なので、見学する企業の環境対策をちゃんと説明してくれるというのは、一番の環境教育になると思う。そこをきちんと調査して、連携の可能性を図る。
- ・揖斐川を舟で下りたい。道路では川のつながりは分からない。舟で右左を見ながらこういうところだと、ゆっくりと下る。桑名で見る揖斐川と上流からの揖斐川はまるで違うと思う。触ったり、においをかいだり、地域と地域のつながりを感じられる実践がしたい。
- ・ESD のコーディネーターの役割を担える教員の育成。
- ・過疎になりつつある地域の学校で、地域を題材にした ESD 授業の方向性を探りたい。

〈ESD 活動支援センターに期待すること〉

- ・わかりやすい、みやすいネットワークづくり。顔を見合わせる場、つなげることはすごく大事。
- ・子どもや教員、いろんなセクターの交流会を中部圏、全国版でやるような様々な機会を設けてほしい。
- ・コーディネーター養成のプログラムづくり。
- ・学校と NPO、教員と NPO、企業が出会う場がない。音頭をとるところが ESD 支援センターではないか。
- ・ESD に関心のある教員が集まって、事例発表したり、どんな苦労があったか、こうやったらうまくいった、など話合える場が。
- ・いろんなセクターとのコラボレーションによる小さな成功事例から、こうすればつながると学べるステップをつくる。
- ・環境省と文科省がコラボレーションしているので、人材育成に関して文科省に提案できるところにしてほしい。人材育成のプログラムがきちんとしたものでないと、大学の教員もできない、教育委員会も動かせない。垣根を超えた情報をきちんと届ける、ESD をしたい人が動けるようにしてもらいたい。

【調査内容まとめ】

昨年度まで実施していた環境省の「ESD 環境教育プログラム実証事業」に関わった NPO、学校、大学を対象にした。

第 1 回目では、ESD 授業に取り組むことで何が変わったのか、何が大切なのかについて話された。

- ・ESD 授業づくりによって、教員が変わる。子どもが変わる。地域が変わる。
- ・地域が子どもを育てる環境に変わっていく。
- ・NPO の専門性を学校に生かす。
- ・ESD をきちんと理解できた。
- ・3 年間付き合うことで ESD をきちんと学ぶことができた。
- ・ESD の授業に関わって、教員の子供達に向かう気持ちが少し変わった。
- ・ESD の授業を実施した先生自身はいい顔になっている。
- ・教師として自分も成長したいという気持ちが随分生まれてきた。

これらの発言から、ESD 授業づくりや ESD 取組の実施により、関わった主体の変容は明らかである。

第 2 回目は、岐阜県以外は同じ対象者とした。この 3 年間で見出した「環境教育と ESD の違い」「取り組んでみたいこと」「ESD センターに期待すること」等についてインタビューをした。

「多様性を排除しないで、お互い認めあい、理解し合う教育が ESD」「ESD は起こっている課題、問題に対して解決していこうとすると、その分野の壁を突き破って、広げていかなければならない」「ESD は自分が社会のために何が出来ていて、何が出来るのかといったことを考えさせやすくなる」といったコメントがあり、3 年間の ESD 授業づくりを通じて、環境教育との違いの理解が進んだ。また、「自分達で問題を解決していく力を付けていく授業スタイルが主流になるとよい」「意識しないで ESD をしている先生は多く、ピックアップし、ESD と認識できる機会が必要になる」「自分にもできるというつつきやすさを仕組んでいく必要がある」など今後の ESD 推進のための重要な要素が抽出された。さらに、実施してみたいこととして、「地域を題材にした ESD 授業の方向性を探りたい」、次年度開設される予定の ESD 活動推進センター（地方）については、「子どもや教員、いろんなセクターの交流会を中部圏、全国版でやるような様々な機会を設けてほしい」「コーディネーター養成のプログラムづくり」といった意見があった。

上記、3 年間の経験を通して見出した ESD の必要性と ESD 推進のための方策等を、2 ケ所の支援拠点の状況に合わせつつ反映させ、本業務を遂行することとした。

(3) 地域の環境教育等拠点での「ESD 推進」に向けた実践拠点支援

① ESD コーディネーターとの連携による支援

本業務においては、ESD に関して専門性をもつ ESD コーディネーターと連携し、支援拠点の選定、対象となる支援拠点の現状や課題、シーズやコースを把握し、各拠点のもつ強みを生かした最も効果的な支援内容と方法を協議し、支援計画作成し、支援業務をすすめた。

»ESD コーディネーター 大鹿 聖公氏（愛知教育大学教授）

〈依頼理由〉

教育機関との連携を効果的に推進するため、学校教育、特に理科教育で、動物園や水族館など多様な社会教育拠点を教材として教員養成をしている大鹿氏の知見とノウハウをインプットしたかった。また昨年度まで実施した ESD 事業において評価、監修をしていただいたこともあり、環境教育施設、拠点を対象にした本業務においても引き続き、アドバイザー、コーディネーターをお願いした。

ア ESD コーディネーターとの打合せ内容

中部地域 ESD コーディネーターである大鹿氏と、中部 7 県の環境教育、社会教育施設や拠点についての情報を持ち寄り、支援対象拠点候補リストを作成し、初年度として支援業務に適している拠点についての意見を交わした。大鹿氏には、各拠点のプラットフォーム、評価会議のメンバーになっていただき、進捗状況を踏まえて助言、提案をいただいた。計 6 回の打合せを行ったが、評価会議前の打合せとして第 2 回と第 6 回を位置づけ、この 2 回については、打合せ内容を録音し、結果（逐語録等）を GEOC に送付した。

〈ESD コーディネーターとの打合せ〉計 6 回

第 1 回打合せ 日時：平成 28 年 6 月 9 日(木) 13:30～14:30 場所：EPO 中部

★第 2 回打合せ 日時：平成 28 年 7 月 13 日(水) 12:30～13:30 場所：EPO 中部

※逐語録（電子媒体に収録）からの要約参照（P22）

第 3 回打合せ 日時：平成 28 年 8 月 10 日(水)15:45～16:30 場所：泰阜村役場

第 4 回打合せ 日時：平成 28 年 9 月 13 日(火) 12:15～13:15

場所:あいち環境学習プラザ

第 5 回打合せ 日時：平成 28 年 12 月 27 日(火) 15:30～16:30

場所：愛知教育大学大鹿研究室

★第 6 回打合せ 日時：平成 29 年 1 月 23 日(月) 16:00～17:30 場所 EPO 中部

※逐語録（電子媒体に収録）からの要約参照（P23～25）

●第2回打合せ

日 時：平成 28 年 7 月 13 日(水)12:30～13:30

場 所：EPO 中部

出席者：大鹿聖公氏（ESD コーディネーター/愛知教育大学教授）

新海洋子、高橋美穂（環境省中部環境パートナーシップオフィス） 計 3 名

【ESD コーディネーターコメント】※逐語録（電子媒体に収録）より抜粋要約

〈泰阜ひとねる大学〉

茶谷ゼミがメインで動いているのか。茶谷ゼミの研究テーマが泰阜村での取組になっているのか。茶谷ゼミの研究テーマは何なのか。何のために「泰阜ひとねる大学」と絡んで、何をメインにして関わっているのかがよく見えない。茶谷ゼミの学生は一般就職をする学生である。学生に何を学ばせたいのか、が見えてこない。

「泰阜ひとねる大学」と他大学の取組を差別化するのであれば、長期で取り組むことである。ゼミとして関わっているから深めることができる。ゼミ活動でない場合、ここまで深めることができない。ここでの体験をどこに落とし込むのかを考えながら実施しないとイケない。1 回の体験ではイベントで終わってしまう。

「泰阜ひとねる大学」を組み入れた大学の授業カリキュラムはすごい。茶谷先生のような間をつなぐ人が必要である。ある程度趣旨と意図が分かっている人間が間に立たないと、大学側も受け入れ側も、お互いにとってよいプログラムにはならない。参加する学生に対しても事前に講義をするなどのインプットが必要である。何も無い状態で行ってしまうと、やらされ感満載で、ゴールも見えないまま帰ってくることになる。学生には、「泰阜ひとねる大学」に関わり始めた段階、このゼミに入ろうと思った理由などをインタビューして、学生の変容を把握するとよい。

村の人は何を達成したいのか。若者に提供するプログラムでどう育ってほしいのか、どういうゴールを設定しているのか。

最終的には、村の人の思いと、学生が受けた感想が上手く、マッチしているかを確認しないとイケない。何回も泰阜村に行って何を学べたかを聞くとよい。やりました、だけの報告ではなく、そこにいる人にメッセージを込めないとイケない。

〈揖斐川流域環境学習拠点等連携事業〉

上流の子どもには上流の川のイメージしかなく、下流の子どもには下流の川のイメージしかない。揖斐川流域の違う場所に行くとなつてきているのか、どう影響を与えるかを知る必要がある。揖斐川の特徴をうまくだせるとよい。揖斐川としては一つだが、暮らしている人の場所によって、思いも特色も違う。上流、中流、下流の人々や他の場所について知ることがファーストステップである。今年は上流の子どもは下流のことを知る、下流の子どもは上流のことを知る、中流の子どもはその上と下を知る、といった感じで他の地域を知るプログラムができるとよい。

「泰阜ひとねる大学」は一つの場所で村とまちをつなぐことを支援する。揖斐川流域環境学習拠点等連携事業は「流域」であり、広域にある何ヶ所かの拠点をつなぐ。この特色と違いがすごい。しかし、流域は難しい。それぞれの場所にチームリーダーをつかって、チームリーダー 3 人が上手くコネクションをつくれるかどうかが一番のポイントである。中枢部である程度思いと方向性を共有していないとイケない。それぞれ個別で取り組むことは構わないが、つながるときには同じ方向を向かないと進まないだろう。

●第6回打合せ

日 時：平成 29 年 1 月 23 日(水)16:00~17:30

場 所：EPO 中部

出席者：大鹿聖公氏（ESD コーディネーター/愛知教育大学教授）

新海洋子、高橋美穂（環境省中部環境パートナーシップオフィス） 計 3 名

【ESD コーディネーターコメント】※逐語録（電子媒体に収録）より抜粋要約

〈泰阜ひとねる大学〉

受け入れ側は NPO も村の役所の人達も地元の人達も積極的で、やらされ感はなく自分達で来て欲しい、こういうことをやりたいという意気込みを感じた。そういう意味で受け入れ側はすごくよかった。参加する側は、子ども、学生、一般対象などいくつかのタイプがある。そういう多様なプログラムの用意が出来ているというのがいい。

今回は、ゼミとして単発じゃなくて年間を通して何度も繰り返し訪れるという関わりを見た。学生にとっては 1 回行っただけで変わるものではなく、何回か行くことで気持ちや意識が変わったりする。繰り返し行動することが深い学びや行動変化につながる。送り出す側にとっては、何度も学生を連れていくという意味でストレスになる部分もある。そこはやれる大学とやれる場所がある。

名短大の文化祭に行って OG がたくさん来ていた。卒業しても何らか気になってつながっているという部分がすごく見えた。つながりが出来ている。泰阜村に行った学生が、知らない人達と溶け込むことに第一のハードルがあった、と聞いているが、泰阜村で過ごす中でその壁を崩していった。次は、それ以外の人たちにどうつなげていくかである。そういった情報を持っていない学生にどう広めていくかである。12 月に名古屋短期大学の学生に愛知教育大学に来てもらったのだが、村のことを知らない学生に発表するのはハードルが高かった。ふりかえりの際に、名古屋短期大学の学生はそれなりの満足感や充実感をもっていた。知らない学生に伝えることの難しさを感じたことと同時に、どうしたら伝わるのかを課題として認識していた。

プログラムはすごく魅力的である。今の生活がいかに恵まれているかを学生が実感するために、モノがないところに行って、不便と思うのではなく、その中で幸せな生活がどういうものかを村の人達と話し合うことが一番大事である。村の人とのコミュニケーションや体験、学生自身が手足を動かす、口を動かす、身体を動かすことが重要になる。ただ、たくさんの学生が参加できないことがネックとなる。交通アクセスと受け入れ先が十分に確保されないと難しい。少人数の学生が繰り返し訪れることが条件になる。

学習指導要領が変わる。これまでは学校で何を学ぶか、覚えることが学校での学びだったが、今後は、何ができるようにするのか、どのように学ぶかが重視される。学んだことが生活や社会にどう生かされるのかなど人間性の育みをゴールにする。小学校から高校までではなくて大学も生涯教育も含めて、全ての世代に、学校だけではなく、異なる価値観や文化、多様な人達と触れ合う学習が必要になる。

「泰阜ひとねる大学」はまさにその場所である。ESD の一番のメインは、人を育てることである。今回のひとねる大学に関しては、人がいて人が人を育てているというまさに ESD の目標に合致している。地域のどこの場所でも受け入れ可能になっていて、人が中心になって人を育てているという意味ですごい。

文明が人を育てるのではなく、人が人を育てる。人がいるからこそ人が育つ。泰阜村の人達は主体的にやっている。主体的に関わりたいと思っている人達がいることで、学生を受け入れることができる。それが企業の研修や教員の研修であっても、対象が変わったとしても、泰阜村の人達は柔軟に対応する。プログラムを変えるのではなく、人に対しての対応を変え、その人達なりの学びにつなげていく。いろんな人を育てていってくれる、そんな可能性を感じている。

泰阜村の人達は自信に満ちあふれている。自分達の村に対して誇りを持っている。ないものはないと正直に言うが、「ないからどうした？ 私達はこうする」というポジティブ思考がこの村の人達の一番の強みだろう。自分達はしたいことをただしているだけであり、「今年もやらなきゃいけないの？」ではなく「今年は何をしようかな？」につながっている。だから毎年できる。そういう意味ではリソースがたくさんあり、「去年はこれを出してみたらこうだった、でもあれを使ってないから今年は使ってみよう」という発想の豊富さが泰阜村ならではの魅力の一つである。

もう少し学生から「こんなことやってみたい」という言葉でてくるようになるとよい。最初はやらされているかもしれないが変わっていく。変わっていったところで自分達に何が出来るか、という主体性が見られるような企画があるとよい。今回は村長にプレゼンテーションをするという活動があったが、もっと主体的に関われるようになるともっといい。名短大の学生は、一般成人としてのリテラシーを身につけることが目的なので泰阜村で過ごして自分達がどんな大人になるかを考える上ではすごくよかった。

大学の教員に必要なのは、指導する側の人間が体験をすることである。引率する人間も一緒にプログラムに入って自分自身も変わる。変われば、学生を連れていきたいと思うようになる。間に立つ人間の思いが一番重要である。大学でいうと教員である。

評価会議については、あえて良かったという話を封印して「今年はこれが出来なくて残念だった」「もうちょっとあれが良かった」という課題や思いを中心にエピソードを包んでもらうといい。継続的につなげていく上でも、今後新しい発展をするためにも、どこが課題だったのか、改善するためにはどうしたらいいのかを話す、お互いカバーしあえる部分が見えてくる。そこを中心に話が出来るといい。

〈揖斐川流域環境学習拠点等連携事業〉

作成した教材についてだが、紙芝居は教育的にはいいツールである。問題は使うかであり、一番の課題である。専門知識があってもなくても絵本は使える。そういった意味で、学校の先生や地元で関わっている人、全然知らない人達などいろいろな人が使えるツールとしていい。ただ、語る人によって伝わる思いが違う場合がある。使う人がどういう意図を持ってどう使うかということにすべてがかかっている。これからどういう場面で使われていくかが楽しみであり、不安な部分でもある。

今回作成した教材のように正解がないのはよいツールである。これからの教育は、正解を学ぶ教育ではなくて、与えられたものから自分達が何をどう判断して、どう考え、どう行動するかができる子どもを育てるという教育である。子ども達が見てどう捉えをするのか、どう疑問をもつのか、どんなことについて興味をもつのかいろいろ違ってよく、子どもが持った興味について先生が答えなくてもよい。教員は知っている人達に聞きに行く、知っている人に授業を実施してもらうなどすればよい。このツールは、そのプロセスをつくることができる。専門家でなくても、家に帰っておじいさん、おばあさんに聞いてもよい。それが出来るという意味ではこの抽象的な内容はよい。映像教材については、1本1本が長くなってよい。ただ年配の方の話が多いため、子どもにとって難しい部分がある。テロップで出来るだけ補えるようにした方がよい。映像で風景を見る、人の話を聞くのは印象に残っているが、大人の話の内容を頭の中で理解できるのが難しい。大事な部分は文字として少し残したほうがよい。資料集については、紙芝居と映像教材を使ってもらえるようにしないといけない。教員にとって専門書を使うのはハードルが高いので、視覚的にイメージができる内容にすることが大事である。この教材が使える教科は社会科である。社会科にプラスで総合学習、そして理科である。内容的には家庭科で使うとよい。

研修については、教材の使い方をきっちり研修してしまうと一方通行になってしまうため、教員が自分の頭で考え自由に話せるような研修をしたほうがよい。

この事業で上流中流下流をつないだ。映像教材の中に、線という話もあったが、つなぐ教材である。それぞれの拠点でそれぞれの場所の学習を実施していた。この教材はそれぞれの場所をつなぎ、どうつながっているかを考えるプログラムの実施

に活用できる。上流のイベントに参加する、中流のイベントに参加する、下流のイベントに参加する、と揖斐川流域全体をイメージ出来るように教材を活用してほしい。そのための起爆剤である。また、この教材を使って、流域として広がっていることを伝える人材を育成することが来年の一番の課題である。

小学校5年生は10月頃に必ず理科で川の学習をする。揖斐川の流域の上流の子ども、中流の子ども、下流の子どもたちが、自分の学校や家の近くの揖斐川の様子はこんなだよと紹介しあう授業ができる。自分の情報を他地域の子どもに提供しながら、他の学校から情報を得て揖斐川についての深い学びができる。子どもも大人も、川は上から下まで基本的に一緒だと思っている。水質については下に行けば行くほど汚れているというイメージはあっても、基本的にはそんなに変わっていないと思っている。その違いを理解するためのツールでもある。

映像教材にはいくつかのエピソードが出てくる。下流は上流を大事にしなければいけない。上流は下流を考えなければいけない。未来の下流のために上流の人達は何をしていかなければいけないのか、下流の人達はこれから揖斐川を守るために何をしていかなければいけないのか、をクローズアップして子ども達に伝えてほしい。

昔の人の川に関する道具の資料がもう少しあるとよい。水屋や水屋の中にこんな船が入っていると、輪中の農作業にはこういうものが必要だ、シジミを獲る人達はこんな道具を使ってシジミを獲っている、など。今の子ども達がどうしてもイメージできないものがある。食べ物でつないでいるが、この川に関わる道具でつなぐという方法もある。どんなものをどう使ってきたかが見えるとよい。

揖斐川流域環境学習拠点等連携事業に関わっているステークホルダーは、NPO や図書館、資料館、学校など拠点が、それぞれ教育主体が異なる人が関わっている。今までみたいに学校教育をベースに多様な主体が連携して取り組むという形ではなく、土台が違ふところに多様な主体が組む形になる。学校の教員はどうしても学校の先生同士で組みたがる。多分NPOもNPO 同士で組みたがる。その壁を破ったという意味ではいいつながりができた。それはそれですごく面白い取組ではある。上手く機能するかはこれからにかかっている。

〈今後の先導的実践拠点支援事業について〉

泰阜村は「村」が拠点であり、人づくりの事業である。揖斐川は「川」が拠点であり、今は教材を作った段階である。その教材を使う人、動かしていく人をどうやっていかが今後の課題となる。各拠点で、その特徴と資源を活用して今後どう展開されるのか、どのような人づくりがされていくのか、楽しみである。

【ESD コーディネーターの役割と評価】

ESD コーディネーターから、支援拠点や関わるステークホルダーの状況を第三者からの視点で客観的に把握し、教育の専門家として、「人を育てる」視点での評価を得た。泰阜村の人にとって、学生にとって、揖斐川の上流、中流、下流に暮らす人々にとって、そこに暮らす子どもたちにとって、と対象者は変わるものの、拠点が存在し、拠点を活用することによる教育、人づくりの変化を明確に捉え、助言いただいた。

「泰阜ひとねる大学」においては、他大学との連携、若い世代間の連携の可能性を見出すことを目的に、名古屋短期大学の学生が愛知教育大学での講座を実施した。愛知教育大学の学生との「泰阜ひとねる大学」についてのコミュニケーションや、アンケートによる評価を得ることができた。

「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」においては、揖斐川流域をつなぐ ESD 教材開発にあたり、教科連携及び総合的な学習の時間での活用方法について助言や、拡大紙芝居、映像教材、資料集の監修を担っていただいた。活用マニュアル作成についての指導を得た。

大鹿氏は大学、学校教育に知見が深いため、拠点と大学、学校教育をつなぐ手法やアイデアを提供いただいた。一過性になりがちな拠点での環境学習を、学習指導要領に位置付けられた教科や総合的な学習の時間との連携のスキームを作り出し、体系化した学びのカリキュラムとして実施できるよう、指示がされた。教材制作においては、学校教育との連携の領域において大鹿氏の専門的見地をインプットした。教員と意見交換の際にも、監修者としてのアドバイスを得ることができた。

支援する側、支援される側、支援される側につながるステークホルダーが参加するプラットフォーム会議や評価会議において、第3者としての視点や意見は、事業改善につながり、次のステップへの後押しにもなり、新しい発想の展開を可能にした。

②支援拠点の選定

ア 支援拠点リストの作成

支援拠点を選出するため各地域のステークホルダーと意見交換、情報収集しリストを作成した。

●実践拠点支援の対象候補		
		ブロック 中部
例を参考として、現時点で想定している伴走支援の対象先及び内容を以下に記入してください。今、考えているもので結構です。◎：実施希望 ○：希望 △：今年度は難しい		
都道府県名	対象となる拠点名(施設等の名称)	伴走支援のイメージ及び当該支援による地域社会へのインパクト効果(期待される波及効果)
富山県	○ 富山市ファミリーパーク	里山にある施設を活用し、地域性を組み入れたより実践的な自然体験プログラムを提供している。里山と動物園、地域と世界、そして人の暮らしをつなげるESDプログラムをつくることで、施設のもつポテンシャルを十分に活かした、多様な学習プログラムを、学校教育のみならず、社会教育、企業の社会貢献プログラム等多様な対象に実践することができる。www.toyama-familypark.jp
	△ イタイイタイ病資料館	施設の持つ資源を活かして、歴史、地域の特性、暮らし、産業のつながりを学び、国内、世界で活用できるESDプログラムを作成する。公害を過去の現象に終わらせるのではなく、未来への学習教材として、世界に、国内に発信する。www.pref.toyama.jp/branches/1291/
石川県	△ 能登半島里山里海自然学校	能登半島の里山里海の保全と再生、農林水産業を基盤とした地域振興策を進めている。廃校となった小学校を再生し自然学校を開設し、自然と向き合う知恵を学ぶ場として展開している。ESDの視点と手法を取り入れたプログラム作りを支援したい。http://www.satoyama-satoumi.com/vision.html
	△ いしかわ動物園	子どもたちの夢を育む学習の場として、「楽しく、遊べ、学べる動物園」を基本コンセプトに学校などの遠足や社会見学を対象としたプログラムを実施している。動物園の資源を活用して、ESD及び学校教育の視点でプログラムを見直し、学校の教科での学習と相乗効果を産むプログラムの作成する。http://www.ishikawazoo.jp/information/gaiyo/index.html
福井県	○ 里山里海湖研究所	福井県では、県内の里山里海湖での環境学習プログラムの展開を行っている。ESDの視点と手法を組み入れたプログラムへの発展を図る。学校と連携したカリキュラムづくり、子どもと大人、企業等を巻き込み、多様な世代や主体をつなぐ学習教材を作成し、里山里海湖をフィールドに、地域の未来を多角的に捉える学習を展開する。satoyama.pref.fukui.lg.jp/
長野県	◎ グリーンウッド自然体験教育センター	森山村で行われている山村留学を実施している。プログラムである。暮らしの中に「学びの原点」があると捉え、他人、地域、自然との関わりの中で、「生きる基本」を育てている。まさにESDプログラムが実践されており、さらに新たなステークホルダーの参加を得てのプログラム作りのチャレンジを支援する。www.greenwood.or.jp
岐阜県	△ トヨタ白川郷自然学校	白川郷の恵まれた自然の中での体験や、脈々と受け継がれる伝統文化を学ぶことができるプログラムを子ども、学校や企業の社員研修や社会貢献活動など幅広い世代を対象に実施している。また、全国の自然学校とも強い連携を持つ。ESDの視点でプログラムを見直し、新たなプログラムづくり、実施と検証を行う。その成果とプロセスを他の自然学校に共有し、広めていく方法を模索する。toyota.eco-inst.jp/
	△ 森林文化アカデミー	「森林と人との共生」を基本理念として、すべての人々が森林と親しく関わりを持ち、森林からの恵みを持続的に享受できる持続可能な社会の構築を目指し、森林や木材に関わるさまざまな分野で活躍する人材の育成を行っている。実施するプログラムにESD視点と手法を導入し、川や海、漁業など新たな自然資源や、関わる人材、地域課題などを取り入れ、持続可能な社会づくりを促進するためのプログラムとしての可能性を見出す。http://www.forest.ac.jp/
岐阜県/三重県	◎ 揖斐川流域環境学習拠点連携 ※上流・中流・下流の環境学習施設、社会教育施設の連携による	岐阜県から三重県に至る揖斐川流域に点在する環境学習施設及び社会学習施設をつなぎ、上流、中流、下流それぞれの持つ環境・経済・社会に関する課題を解決、状況を改善するため流域の観点で持続可能な地域づくりを行うためのプログラム、もしくはプログラム実施のためのツールを作成する。
	△ 藤前活動センター	生きものの生息環境としての干潟の価値と開発、生きものの多様性と人の暮らしなどをテーマに、子どもから大人まで、学校、学校以外の多様なプログラムづくりを行う。http://chubu.env.go.jp/wildlife/fujimae/access/
愛知県	○ 名古屋水族館	名古屋港水族館の持つ資源と機能を十分に活かし、海の環境や海に生息する生きもの現状、海と人々の暮らし、伊勢湾三河湾の海の環境や漁業の状況、地球規模での海環境の課題と日々の暮らしとのつながりをじっくり学ぶ学習教材をつくる。学校と連携したカリキュラムづくり、企業の社会貢献プログラム、親子・ファミリーを対象にした家庭教育他、多様な対象の学習に対応できるプログラムを作成する。www.nagoyaaqua.jp/
	○ 東山動植物園	東山動植物園で実施している環境学習プログラムにESD視点と手法を導入し、さらに、動物園と地域の自然環境、世界の環境と地域の環境を織り交ぜたカリキュラムデザインを支援する。学校で活用できるカリキュラム、親子・ファミリー層を対象にしたカリキュラム、他企業CSR(東山動植物園は企業協賛プログラムもっている)を念頭にプログラム作成を行う。東山動植物園のもつ歴史、資源(ゾウ列車からのスタート)をふんだんに活用したプログラムを多様なステークホルダーと作成する。さらに、東山動植物園の近くにある「里山」の保全活動をしているNPOと連携し、里山と動物園のつながりに気づくプログラムを作成する。http://www.higashiyama.city.nagoya.jp/index_pc.php
	◎ ユニーグループホールディングス株式会社店舗(愛知県以外でもOK)他企業	ユニーが持つ店舗(北陸・長野・東海)においてはすでにESDプログラムが店長及び地域のインタープリターとの協働で実施されている。さらに、持続可能な生産・流通・販売・消費・処理という視点で、学校教育との連携、高校生・大学生とのプログラム連携という視点での新たなプログラム開発を支援したい。生産者や処理業者、異業種企業など企業間連携によるプログラム開発を支援する。地域の児童館や公民館などの店舗を核にしたESDコミュニティづくりを検討する。http://www.uny.co.jp/corporate/torikumi/eco/
三重県	○ 海の博物館	海の博物館はすでに環境学習を実施しているが、さらに博物館の持つ多彩な展示物や館長及び学芸員のもつ知識や経験、ネットワークを活用した三重県内、国内、世界に発信できるESDプログラム作成を支援する。伊勢湾三河湾の海の環境や漁業の状況、生物多様性や持続可能な海洋資源の管理、海女文化(国内、韓国)の伝承などから、海と人々の暮らしを通しての持続可能性に気づき、学ぶ学習プログラムをつくる。近隣の幼稚園、小中学校、高等学校、大学生を対象にした学習プログラムを作成する。博物館の新しい機能を見いだす。http://www.umihaku.com/
	△ 四日市公害と環境未来館	四日市市が辿ってきた公害等の歴史、企業との関係性、市民の参加など「公害」を多角的に捉え、子どもから大人まで多様な世代が「持続可能な地域」に触れるESDプログラムを開発、実践する。四日市公害と環境未来館のもつ膨大な情報と展示を十分の活用した内容となるよう多様なステークホルダーの参加を得て作業をする。学校教育で使われるプログラムについては、学校関係者及び地域の様々な主体と協力プログラムの開発し、実証を行う。次世代との協働を念頭に置き、高校生、大学生とのプログラム作りを検討する。www.city.yokkaichi.mie.jp/yokkaichikougai-kankyoumiraikan/
	△ 三重総合博物館MieMu	総合博物館の特徴を活かし、三重県の自然、歴史・文化の視点で地域や自分達の生活を捉え直す場としてのプログラムを様々な主体と検討し、実証している。生物多様性を専門とする学芸員もいる。三重県総合博物館のものがつ3つの使命そのものがESDと捉えられるので、さらに、多様なステークホルダーの参画を得て、学芸員とともに三重県らしい三重県の持続可能性を学習するプログラムを、学校、一般を対象に開発する。新たな博物館機能を模索する。http://www.bunka.pref.mie.lg.jp/MieMu/
	○ 三重県環境学習情報センター	多様な環境学習プログラム、人材育成事業を展開している。ESDに関して人材の育成事業を実施しているが、実施しているいくつかのプログラム、特に学校への出前授業等についてはESDの視点と手法で見直す作業を行う。www.eco-mie.com/

イ 支援拠点の選定

支援拠点リストから、環境省及び拠点のある地方自治体と協議をし、以下の2ヶ所を選定した。

多様なステークホルダーが関わることによって汎用性の高い「ESD 推進のモデル拠点」を作ることを目指す。1ヶ所は「村と都市部」というコミュニティ、もう1ヶ所は「流域」というコミュニティを支援対象として位置付けた。

≫泰阜ひとねる大学(長野県下伊那郡泰阜村)

〈選定理由〉

長野県泰阜村で30年近く山村留学や子どもを対象としたESD取組を実践しているNPO法人グリーンウッド自然体験教育センターがリーダーシップをとり、村や村民、他NPO等を巻き込み、それぞれのスキルとネットワークを活かして、都市部の大学生を中心とした若者へのESDアプローチをするという内容である。

- ・これまで実施してきたNPOのプログラムと村のプログラムを重ねて体系的なESDカリキュラムを作りたい。
- ・村が受けているインターンシップの学生との継続的な関わりを作りたい、学生のインターンシップを体系化させたい。
- ・子どものキャンプのスタッフとして年間数度訪れている大学生をつなぎたい。
- ・今実施しているプログラムを、体系的に組み合わせ、次世代を対象にした「村がまるごと大学＝泰阜ひとねる大学」をつくりたい。

すでに名古屋短期大学との関係性が育まれている。名古屋短期大学、学生と連携して、「都市部の若者と泰阜村のコラボレーションによるESDコミュニティの形成のモデル」をつくることのできるのではないかと連携を活かし、「村まるごと（都市部含む）」をESD拠点として実施することとした。

≫揖斐川流域環境学習拠点等連携事業(三重県/岐阜県)

〈選定理由〉

揖斐川流域では、環境分野で活動するNPOがいくつもあり、それぞれの地域で地域の特色を生かした環境学習等を展開している。揖斐川の中流部、上流部の連携に力を注いでいるNPO法人泉京・垂井は、上流・中流・下流をつなぐ取組、特に下流部との連携強化、持続可能な地域社会を形成するための、ものの流通、暮らしやなりわいといったテーマでの学習展開を課題としていた。

また、平成28年に開催されたG7伊勢志摩サミット、ジュニアサミット、NPO/NGOによって開催された「市民の伊勢志摩サミット」において伊勢湾及びその流域の環境や持続可能性に関する関心が高まっており、揖斐川河口の桑名市の関心が高かった。

これらのポテンシャルやニーズをもとに、揖斐川流域の環境学習や社会教育施設などが実施している従来の環境教育にESDの視点を取り入れたESDプログラムづくりや、揖斐川上中下流にある拠点が共通に活用できるESD教材づくりを行うこととした。

揖斐川「流域」を拠点と位置づけ、揖斐川流域にある環境学習等施設のネットワーク形成とネットワークによるESD推進モデルづくりを実施することにした。

③支援計画の策定

支援対象拠点の支援方法や計画を検討するために、現状や課題を把握し、ESD コーディネーターと連携し、支援計画案を作成した。環境省から示された支援計画に掲載する項目は、「支援拠点の概要」「支援計画」「現状分析/持続可能な社会形成に係る当該地域における社会経済システムの課題と望ましい姿/支援拠点の課題と地域課題解決のために期待される役割」「取り組む中間支援の内容」「拠点の課題」「支援の内容」「関係者の変化」「ふりかえり」であった。

作成した支援計画案は、プラットフォームメンバーと意見を交わし、また第1回評価会議の際に提示をし、今年度実施すべき具体的な支援内容を検討し、支援計画に反映させた。その後も、プラットフォームとの協議を重ねる中で、支援計画をブラッシュアップさせた。

支援計画については、毎月実施した支援業務を書き加え、GEOC に提出した。

ア 泰阜ひとねる大学

●支援拠点の概要

所在地：長野県下伊那郡泰阜村/都市部の大学

〈支援対象拠点〉

* 泰阜村 <http://vill.yasuoka.nagano.jp/>

長野県下伊那郡の南部に位置し、居住地の標高は天竜川の河畔の320mから分外山山麓の770mと標高差が450mある深い谷が続く村である。人口は1700人程度、高齢化率は39%、山林は86%を占めている。国道も信号もコンビニもない典型的へき地山村。

* NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター

<http://www.greenwood.or.jp/dantai/dantai01.htm>

自然体験教育活動の普及と発展をめざして設立。日本の豊かな自然環境を活用した自然体験教育活動を推進し、青少年の健全育成及び国民の豊かな余暇生活の構築に寄与することを目的としている。特に、次代の担い手である青少年が「心の豊かさ」や「生きる力」を育むことを支援するために、森・川をフィールドにした多彩な自然体験教育プログラムを実施している。

* 名古屋短期大学現代教養学科 1年生・2年生、名古屋短期大学茶谷ゼミ

<http://www.nagoyacollege.ac.jp/>

「信念のある女性の育成」という教育理念のもと、建学の精神である「心豊かで、気品に富み、洗練された近代女性の育成」を目指している。現代教養学科は、多様化する時代の中で、「自分らしく生きていく力」を身につけ、コミュニケーション力を磨く学科であり、働くために必要な知識や資格を身に付け、生涯を通じて自分の力を発揮できる能力を養っている。

●支援計画

〈現状分析〉

* 持続可能な社会形成に係る当該地域における社会経済システムの課題と望ましい姿

高齢化及び人口減少による村の自治力の低下、産業の衰退、労働力や地方創生を担う人材がさらに流失している。併せて、管理する村民が不在のため、放棄農地や放置林など重要な地域資源である自然環境が荒廃している。現状では、ほぼ持続不可能な状況にあり、地域の自立性を確保する社会経済システムが機能を失いつつある。

一方で、森林、農地など人が生きるために必要な自然資源は十分にあり、活用方法によっては地域資源及び地域経済の循環を生み出す可能性もある。

村がもつポテンシャルを明らかにし、いかに活用し、新たなビジネスシーズを生み出すかを検討する人材の育成が急務である。人材育成の対象は、村内の人材の活用だけでは限界があるため、村外の人材、都市部の大学を巻き込んだ若手とし、泰阜村の資源を活用した ESD プログラムづくり、実践から、泰阜村の持続可能な未来の村のありようを見出し、実現を可能にするための実践を行う。

* 支援拠点の課題と地域課題解決のために期待される役割

主に小学生を対象にした体験型教育活動の経験は豊かであり、村民と連携しながらの実施体制ができてはいるが、育まれた村内の若者の多くが村外に出るという状況にある。また、若い人材が減少するため高齢化が進み、村民の地域おこし、地域活性化に向けてのモチベーションが下がっている。

都市部の若者を対象に、自然体験学習及び地域の資源を活用した地域活性を可能にするプログラムを実施することで、都市部の若者が、都市と農村における課題を学び、農村部での人口減少及び高齢化、産業衰退を引き留めるための、地域の資源を活用した方策を、外部の視点から見出すことができる。一方で、都市部の若者と一緒に、村民が活動を実施することで、村民のモチベーションを高めることができ、若者と村民との協働による ESD プログラム（カリキュラム）及び実施体制を形成することができる。役割は、関係者ヒアリング及び必須な人材と組織の巻き込み、外部としての意見交換やアドバイスを行う、都市部での学びと泰阜村における学びを整理し、対象となった学生の変容や、関わる人の声をインタビュー等により把握し、パンフレットの作成を支援する等である。

●取り組む中間支援の内容

〈拠点の課題〉

- ・高齢化が進み、村民の地域おこし、地域活性化に向けてのモチベーションが下がっており、取組の継続性の確保が課題である。
- ・都市部の若者と村民の協働による、地域資源を活用した体験型環境教育プログラム（ESD プログラム）の作成及び実践のためのノウハウの獲得が課題となっている。

イ 揖斐川流域環境学習拠点等連携事業

● 支援拠点の概要

所在地：揖斐川の上流・中流・下流域

〈支援対象拠点〉

揖斐川下流：輪中の郷、桑名市立図書館、はまぐりプラザ

揖斐川中流：輪之内町エコドーム、フェアトレード&地産地消みずのわ

揖斐川上流：生命の水と森の活動センター、徳山会館、揖斐川歴史民俗資料館

[揖斐川下流]

* 輪中の郷（桑名市）<http://www.waju.jp/>

平成 5 年に「輪中」をテーマに長島町の歴史・文化・産業を紹介する複合施設として誕生し、民具を中心に古文書・絵画など一万点近く収蔵している。輪中に関するパネル展示や水屋の移築等で、水とのかかわりを学習できる。

* 桑名市立図書館（桑名市）<http://kcl.kuwana-library.jp/archives.html>

桑名市立中央図書館では、赤須賀漁業協同組合と連携し、先人から受け継がれる自然との向き合い方や環境保全の知恵と工夫、資源管理下の漁などをとりまとめた郷土資料を作成した。

「図書館が伝える地域情報 はまぐり・しじみを育む桑名の漁業」

（桑名市立中央図書館／編集・発行，赤須賀漁業協同組合／監修，2016.3）

地域の情報拠点として、きらりと光るまちの情報をとりまとめ、「図書館の地域資料」として記録して、さまざまな地域情報を発信している。

* はまぐりプラザ（桑名市）<http://www.intsurf.ne.jp/~hamaguri/index.html>

2010年に、桑名市城東公民館と漁業交流センターの複合施設としオープンした。桑名市の漁業の振興と市民の教養の向上及び健康の増幅を図ることを通じて市民の生活文化の発展に寄与することを目的とし、歴史と伝統のある漁師町赤須賀を中心とする地区の特色を生かした利用を図り、社会的使命に貢献し、市民の多様なニーズに応えられる施設を目指す。桑名の漁業についての展示室や、揖斐・長良川河口を一望することができる展望デッキもあり、漁師のまち・赤須賀などの歴史を知ることができる。

[揖斐川中流]

* 輪之内町エコドーム（輪之内町）

<http://town.wanouchi.gifu.jp/living/recycle/ecodome/>

家庭で分別された、生ごみ・ビン・缶・新聞雑誌・その他プラ・トレーなどの資源を持ち込む施設である。環境学習棟も備えている。

※NPO 法人ピープルズコミュニティ(輪之内町エコドーム管理運営受託団体)

<http://www.ip.mirai.ne.jp/~peoples/>

資源循環型社会の形成を図るため、一般家庭から排出される資源化出来る廃棄物のリサイクル事業、環境教育事業、情報通信環境整備事業等を行っている。人が輝き地域が輝く社会の実現に、みんなで少しばかり寄与できればと考えている。

* フェアトレード&地産地消みずのわ（垂井町）

<https://www.facebook.com/mizunowa1004>

NPO 法人泉京・垂井が運営する「地域らしさ」「フェアな貿易」「スローで丁寧な暮らし」を提案する施設である。地域住民と学びあう、講座やワークショップを行っている。

※NPO 法人泉京・垂井（運営） <http://sento-tarui.blogspot.jp/p/blog-page.html>

垂井町に暮らす住民誰もが、垂井町のまちづくりに自ら参画し、行政、事業者・企業などと協働してまちづくりに関する事業を行い、『より幸福度の高いまち・垂井』を実現することを目指している。揖斐川中流域の垂井町を拠点に、垂井町だけでなく揖斐川流域の地域間交流や都市・農村交流に取り組んでいる。

[揖斐川上流]

* 生命の水と森の活動センター（揖斐川町） <http://www.inochinomizutomori.or.jp/>

揖斐川流域全体の貴重な財産である徳山ダム上流域を核とする揖斐川水源地域の豊かな自然環境の保全と水源地域の活性化を図ることを目的とした施設。ダム管理と整合を図りながら保全活動、環境教育、調査研究、拠点施設の管理などを行っている。

* 徳山会館（揖斐川町）

<http://www.shokokai.or.jp/chiiki/21/2140710042/index.htm>

徳山ダム建設に伴って廃村となった旧徳山村の様子を展示し、地域の特産品の販売、郷土料理の提供、宿泊など、揖斐川流域を体感できる施設。

* 揖斐川歴史民俗資料館（揖斐川町）

<http://www.town.ibigawa.lg.jp/0000001300.html>

揖斐川の清流が育んだ歴史や文化が体感できる施設。約 8500 点の収蔵品の中からテーマごとに常設、企画展示をしている。かつて揖斐川町で栄えた舟運による交易の紹介では、上流部から桑名、名古屋まで川幅や流れに応じて 3 種類の大きさの舟に乗り換え、炭や米などを運んだ様子を再現。漁業の道具も並び、川とともに歩んだ先人の足跡を知ることが出来る。旧徳山村戸入地区から移築した江戸時代末期に建てられたかやぶきの民家もある。古代の土器や石器などの出土品、古文書、戦国時代の稲葉一鉄の甲冑（かっちゅう）、昔なつかしい駄菓子屋や酒屋の再現もあり、古代から近代までの揖斐川町の歴史を知ることができる。

●支援計画

〈現状分析〉

* 持続可能な社会形成に係る当該地域における社会経済システムの課題と望ましい姿

三重県、岐阜県にわたる揖斐川流域は、豊かな森林、揖斐川の豊富で清らかな河川、広大で肥沃な平野を背景に自然と良好な関係を築き、その資源の利用や自然からの恵みで営みを維持してきた。かつては、上流部から桑名、名古屋にまで舟運による交易をし、流域での経済が循環していた。

しかし、現在の流域の地域においては、自然環境の荒廃、地域産業の衰退、過疎化、高齢化等の環境・経済・社会に関する課題が深刻化し、地域の持続可能性が脅かされている。この課題を解決、状況を改善するためには、流域地域の連携が必須である。

それぞれの流域地域が抱える課題と、流域地域が持つポテンシャルを共有し、かつての流域の（自然、資源）循環の仕組みを学び、現状の課題を解決すべくその利活用による環境、経済、社会の作りなおし、「流域」の観点（流域地域）でつなぎなおし、持続可能な地域づくりが望まれる。

* 支援拠点の課題と地域課題解決のために期待される役割

揖斐川流域では、環境学習施設や社会教育施設が数多く点在し、それぞれの活動は環境及び文化伝統等に関する学習活動は実施されている。

しかし、「流域」を観点とした上流・中流・下流の拠点間をつなぐ学習活動が十分にされておらず、課題を解決し、望ましい地域をつくるために、流域間での連携を強化し、「流域」地域における課題、ポテンシャルを共有し、地域の環境保全、地域産業創造につながる ESD プログラムを実践するためのツール（絵本・動画・参考資料）を作成することが必要である。

それぞれの拠点で実施されている環境学習、環境活動等を共有し、「流域」の観点で共通の ESD プログラムを実践するためのツール（絵本・動画・参考資料）を作成し、今後プログラムを実践されるであろう地域の NPO・学校の教員等へのデモンストレーション及び意見交換の場を持ち、ESD プログラムの実施者及び参加者の育成を図る。

流域に暮らす住民が、流域を暮らしの持続可能性を実現するコミュニティと捉え、流域単位での持続可能な地域づくり、流域内循環型社会を担う人づくりのための基盤（ネットワーク）形成を行う。

●取り組む中間支援の内容

〈拠点の課題〉

* 上流域から下流域に点在する環境学習・活動拠点、社会教育拠点等連携体制の構築

- ・各地域の環境学習・活動拠点、社会教育拠点等が実施しているプログラムを共有する。
- ・地域の歴史や産業の変遷、現状の地域課題を共有する。
- ・各地域がもつ自然（地域）資源などポテンシャルを把握し、共有する。
- ・「流域」の観点での地域づくりの重要性を共有し、価値ある連携体制の構築を検討する。共通して活用できるツールづくりを通して、交流の場を持ち、連携を支援する。

- * 上流域から下流域に至る拠点で実施する共通の ESD プログラムを実践するためのツールの作成
 - ・「流域」の観点で地域をつくることの重要性を学ぶ ESD プログラムを実施するためのツールを作成する。
 - ・必要に応じて、地域のキーパーソンや外部の専門家の参画を得て、より学習効果のある参加、協働、対話によるプログラムを実施できるツールにする。
 - ・作成するツールは、学習指導要領と関連させ、学校の総合学習及び教科において活用できるようにする。
- * 作成したツールのデモンストレーションと意見交換の場
 - ・作成した ESD プログラムを実践するために、地域の NPO・学校の教員等へのデモンストレーション及び意見交換の場を持つ。
 - ・次年度以降、学校現場でのツールを活用した環境教育を実践し、参加者の学習効果・実施側の評価、検証を行い、改善を行う。

③支援内容

作成した支援計画に基づき、各拠点のニーズや現状を踏まえ、支援方法や内容の改善をしながら業務をすすめた。

ア 泰阜ひとねる大学

〈主な支援内容〉

●都市部の若者を対象にした ESD プログラムの実施 (支援)

小学生を対象にした体験型教育活動の経験は豊かであり、村民と連携した実施体制はできている。都市部の若者を対象に、このノウハウを活用した自然体験学習及び地域の資源を活用した地域活性を可能にするプログラムを実施する。

●都市部の若者による課題解決のための方策の抽出 (支援)

都市部の若者が、都市と農村における課題を学び、農村部での人口減少及び高齢化、産業衰退をくい止めるための、地域の資源を活用した方策を、外部の視点から見出す。

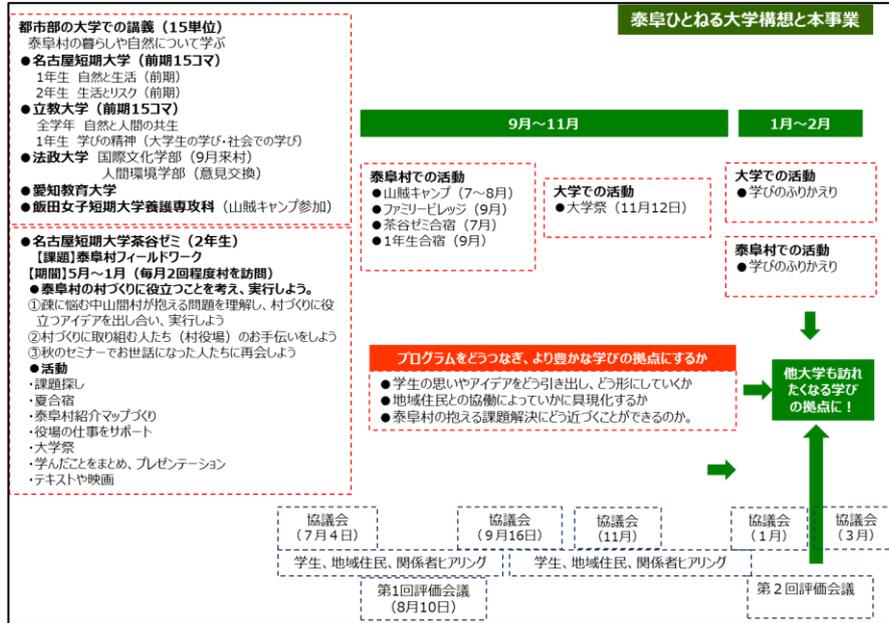
●若者と住民との協働による ESD プログラム・実施体制の形成(支援)

都市部の若者と一緒に村民が活動を実施することで、村民のモチベーションを高め、若者と村民との協働による ESD プログラム及び実施体制を形成する。



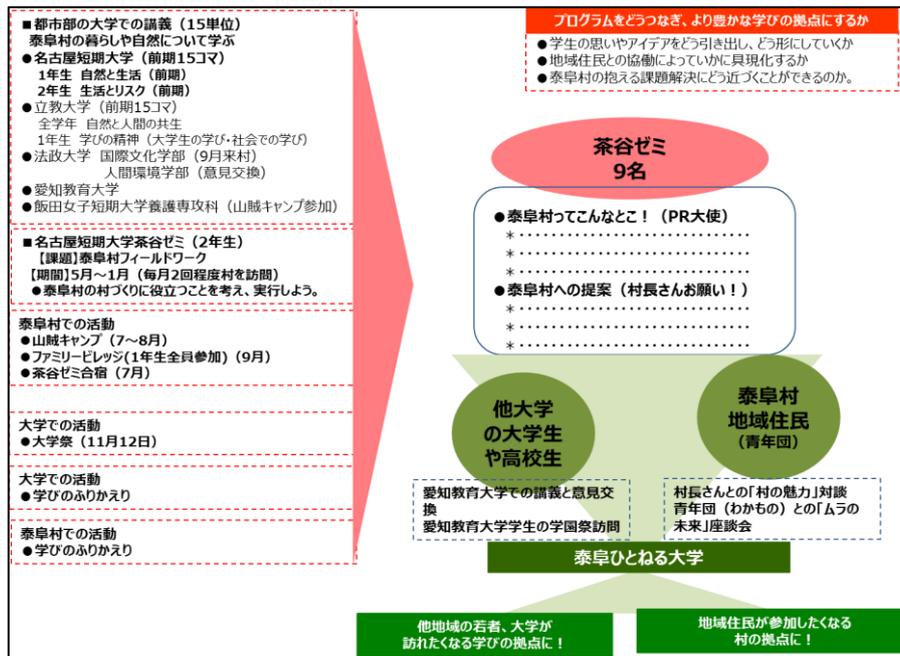
〈事業構成・事業目標の設定〉

名古屋短期大学のカリキュラム他、都市部の大学の講義などを交え、「泰阜ひとねる大学」のカリキュラムモデルを作成、実施することとし、大学生と村の人々の変化を可視化しながら、「泰阜ひとねる大学」のESD 先導的拠点としての価値の抽出・創造を図ることとした。



〈事業内容〉

名古屋短期大学が実施している泰阜村を教材にしたカリキュラムを体系化することにより、他大学の参加の促進、及び泰阜村の地域住民との連携が強化されるための、汎用性のあるESDカリキュラムを作成することとした。



【活動スケジュール 主な支援内容】

日程/場所	内容
6月	都市部大学生を対象にヒアリングを実施することとなり、ヒアリング内容について、村及び大学関係者、拠点代表者と意見交換。
6月9日(木) EPO 中部	ESD コーディネーター、拠点代表者打合せ。 事業における課題を共有し、意見交換。
7月4日(月) 泰阜村役場	第1回プラットフォーム会議実施。 本事業説明及び今後のスケジュールを共有。村民と意見交換。
7月13日(水) EPO 中部	ESD コーディネーター打合せ。 事業内容、進捗状況や課題を共有し、評価会議の論点など協議した。都市部学生を対象にしたヒアリング内容について意見交換。 ●逐語録作成
7月30日(土) 泰阜村内	都市部の大学生の活動視察。 大学生及び担当教授対象にヒアリング実施。
8月10日(水) 泰阜村役場	第1回評価会議実施。 本事業説明及び目的の共有。各ステークホルダーの泰阜村への思い、事業に対する考えを共有・意見交換。各ステークホルダーのニーズ及び状況を把握した。 ●逐語録作成 村民を対象にヒアリング実施。 ●ヒアリング記録作成
9月8日(木) 名古屋短期大学	都市部の大学生、担当教授を対象にヒアリング実施。 泰阜村での学び、思いについてヒアリングで把握した。大学生の学びから村のもつESD 実践の資源を把握した。 ●ヒアリング記録作成
9月13日(火) EPO 中部	ESD コーディネーター打合せ。 第1回評価会議、大学生・担当教授を対象にしたヒアリングを受け、今後の事業の進め方、支援方法について協議した。
9月16日(金) 泰阜村役場	第2回プラットフォーム会議実施。 事業の進捗の共有、大学生・担当教授に実施したヒアリングの報告を行い、泰阜村でフィールド学習をしている学生のニーズと成果から、村での学びのポテンシャルを共有した。今後の事業スケジュールにおける課題を抽出し、提案等を行った。 村内の若者との交流や、都市部の大学生間の学びあいの場の提案を行い、今後の検討となった。 泰阜村をフィールドに実施した学生の2年間の学びの成果を、村内、都市部の大学に伝えるツールの作成を行うことを提案し、村の若者世代と協働で作成することとなった。
10月	ツール（パンフレット）の作成、今後の実施スケジュールについて拠点代表者、泰阜村の担当者と協議し、課題、役割分担等を整理した。 ツール作成に当たり、拠点代表者、泰阜村の担当者と企画内容について協議し、村の資源、都市部でのプログラム内容等を整理し、ツールの見せ方を検討。
11月12日(土) 名古屋短期大学	都市部の大学祭の視察、ファミリービレッジ受入れ家庭（泰阜村民）対象ヒアリング。

	<p>大学祭において、学生の学びをまとめたパネル展示、泰阜村の農産物販売、村のPR ブース出展があり、村役場、フィールドワークの受入れ家庭の方が参加され、活動を視察した。ヒアリングを行い、地域の方の声を抽出した。</p> <p>都市部大学の進捗確認。ESD コーディネーターと進捗状況を共有。事業の課題とこれまでの成果について協議し、今後のスケジュールにおいて、取り入れるべき視点等について意見交換した。</p> <p>拠点の担当者と、事業の継続性について意見交換。</p>
11月15日(火) EPO 中部	<p>拠点代表者打合せ。</p> <p>これまでの活動を踏まえた知見から今後の進め方について意見交換し、ツールでの見せ方、ツール作成の進め方について協議した。</p>
11月18日(金) 泰阜村役場	<p>第3回プラットフォーム会議実施。</p> <p>「泰阜ひとねる大学」を通しての学びの成果、事業スキームを整理し、報告会及びパンフレットでどのように発信していくかについて意見交換。</p> <p>パンフレット作成について、拠点担当者、デザイナーと打合せ。</p> <p>事業のコンセプト、伝えたい内容と見せ方について協議した。</p>
12月	<p>パンフレット制作について、拠点の担当者、デザイナーと打合せを重ね、作業スケジュール、素材収集等を行った。また、制作において事業を可視化する作業の過程で、関係者の本事業の成果・効果に対する意識の高まりを把握した。作成するパンフレットには本事業の外部からの評価を記述し、泰阜村村民への本事業への価値づけ及び、本事業への参画促進を図ることとした。</p>
12月7日(水) ウインクあいち (名古屋)	<p>EPO 中部主催「ESD 学びあいフォーラム」参加。</p> <p>中部のESD実践について学びあうフォーラムにおいて本事業報告の場を提供した。泰阜村の職員、拠点の中心となるNPOの職員が事業報告し、他事例から学び、ESD実践及び関心のある参加者からの外部評価を得た。</p>
12月22日(木) 泰阜村役場	<p>都市部学生の村内報告会。</p> <p>本事業に参加している泰阜村の村民対象ヒアリング。</p> <p>本事業ステークホルダー対象ヒアリング。</p> <p>都市部学生が泰阜村での経験や学びを報告し、泰阜村村長への提案を行った。参加した村民と事業の成果を共有し、村民からの意見やメッセージなどが伝えられ、村民と学生間の学びあいの場となった。</p> <p>本事業を通して学生と関わった村民、ステークホルダーにインタビューを行い、村民側の村への思い、学び及び今後への期待について把握し、その内容をパンフレットに掲載する。</p>
12月27日(火) 愛知教育大学	<p>都市部学生による他大学学生への活動紹介及び意見交換。</p> <p>場を提供し、学生の村での学びと他大学の学生と意見交換する中での気づきと学びを把握し、泰阜ひとねる大学の成果と可能性を明らかにした。その報告をまとめ、パンフレット原稿を作成し村に伝えた。</p> <p>学生同士が学び合うことによる学生の気づき、学び、教員の気づき、学びから今後のプログラム構成の検討を提案する。</p>
1月	<p>パンフレット制作について、拠点の担当者、デザイナーと打合せを重ね、作業スケジュール、素材収集等を行った。</p>
1月23日(月) EPO 中部	<p>ESD コーディネーター会議実施。</p> <p>事業のふりかえり、成果、課題について意見をいただいた。第2回評価会議をどのように進めるか、検討課題について意見交換。</p>

	●逐語録作成
1月27日(金) 泰阜村役場	第4回ブラットホーム会議実施。 事業の報告、進捗状況の共有を行い、次年度も泰阜ひとねる大学推進チームとして継続していくことを確認した。 事業をふりかえり、次年度へ向けての推進チーム体制、展開の可能性について協議。
1月27日(金) 泰阜村役場	第2回評価会議実施。 MSCの手法を活用して、ふりかえりを行い、事業を通してのステークホルダーの変化を共有し、事業スキームを見直した。 ●逐語録作成
2月	エピソード及び第2回評価会議で出された本事業の最も重要な要素を共有したことで、次年度の事業展開についての協議を支援した。 「泰阜ひとねる大学」の意義や成果、効果や価値を可視化したパンフレットを完成させた。村長、学生、村民、拠点メンバーの生の声が掲載されている。第2回評価会議でのふりかえり、パンフレットについて意見交換をした内容を反映させ、内容をブラッシュアップした。今年度事業は、名古屋短期大学の学生をメインとしたが、多様な主体を対象にした汎用性の高いプログラムを提供できること、さらに関わる村民の多様性を表現することができた。 「泰阜ひとねる大学」の村内での認知度を上げるために全戸配布することとした。パンフレットをモデルカリキュラムとして、次の展開に活かせるようにノウハウの蓄積を支援した。

[プラットフォーム会議] (計 4 回) ※自治体を含めたメンバー

〈構成メンバー〉

- ・辻 英之氏 (NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事)
- ・宮島康夫氏 (NPO 法人泰阜グリーンツーリズム研究会 副代表理事)
- ・小黒あかり氏 (地域おこし協力隊)
- ・若林美吹氏 (若者代表：泰阜村福祉課)
- ・横前明氏 (泰阜村副村長)
- ・池田一治氏 (泰阜村村づくり振興室村づくりコーディネーター)
- ・長谷川裕史氏 (泰阜村振興課観光交流係係長)
- ・茶谷淳一氏 (名古屋短期大学現代教養学科学科長/教授)
- ・小倉文香氏 (NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター)
- ・南信州新聞社 (編集局記者)
- ・名古屋短期大学大学生

〈ESD コーディネーター〉

大鹿聖公氏 (愛知教育大学教授)

〈会議内容〉

●第 1 回プラットフォーム会議

日 時：平成 28 年 7 月 4 日(月)13:30~15:30

場 所：泰阜村役場

出席者：10 名 (NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 2 名、NPO 法人泰阜グリーンツーリズム研究会 1 名、泰阜村役場 4 名、EPO 中部 2 名、オブザーバー 1 名)

〈概 要〉

「泰阜ひとねる大学」の事業概要、目的をメンバーで共有した。その上で本事業の事業概要と目標を説明し、泰阜村を実践支援拠点として連携することを共有した。本事業においては、名古屋短期大学現代教養学科の茶谷ゼミの学生を主な対象として講義と村でのフィールドワークなどによる学生の変容、学びの効果、成果を検証し、次年度以降の他地域へ汎用するモデルとして活かしていくこと確認した。同時に、村民、ステークホルダーの変容、学びの成果、効果を検証し、「泰阜ひとねる大学」の価値とポテンシャルを把握する。同時に、泰阜村の地域活性にどう活かされるのか、村民やステークホルダーの変容などもヒアリングなどを通して把握し、可視化することを説明し、承諾を得た。

●第 2 回プラットフォーム会議

日 時：平成 28 年 9 月 16 日(金)13:30~15:30

場 所：泰阜村役場

出席者：7 名 (NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター 2 名、NPO 法人泰阜グリーンツーリズム研究会 1 名、泰阜村役場 2 名、EPO 中部 2 名)

〈概要〉

名古屋短期大学茶谷ゼミでの講義、村でのフィールドワークなどについての進捗状況を共有した。また、9月下旬に同短大現代教養学科の全学生を対象に泰阜村で実施するファミリービレッジ、11月中旬の同短大の大学祭での泰阜村の出展、及び12月下旬に村で行う報告会についての企画及び課題について協議した。本事業では、「泰阜ひとねる大学」の学びや魅力を関わった人々の生声から社会化するパンフレットを作成し、泰阜村の住民、都市部の大学に伝えるためのツールとすることとなった。今後の展開として、同短大茶谷ゼミの学生が愛知教育大学の学生に泰阜村について、村での学びを伝え、交流する場をもつことを検討した。



●第3回プラットフォーム会議

日時：平成28年11月18日(金)13:30~15:30

場所：泰阜村役場

出席者：9名（NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター2名、NPO法人泰阜グリーンツーリズム研究会1名、泰阜村役場2名、地方事務所2名、EPO中部2名）

〈概要〉

名古屋短期大学現代教養学科茶谷ゼミでの講義、村でのフィールドワークなどについての進捗状況を共有した。また、この間の泰阜村でのファミリービレッジ、同短大の大学祭での学生のパネル発表、泰阜村の出展の報告し、共有した。また、見出した課題に対して次年度以降どう取り組むかについて協議した。12月下旬に村民を対象に実施する報告会に向け、この間の学びや学生の変容などをふりかえり企画内容を検討した。その他、パンフレットの作成作業など今後のスケジュールを確認した。

●第4回プラットフォーム会議

日時：平成29年1月27日(金)13:30~14:30

場所：泰阜村役場

出席者：11名（NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター2名、NPO法人泰阜グリーンツーリズム研究会1名、泰阜村役場4名、ESDコーディネーター1名、EPO中部3名）



〈概要〉

名古屋短期大学茶谷ゼミでの進捗状況を共有した。また、この間「泰阜ひとねる大学」として実施してきた、EPO中部主催ESD学びあいフォーラムでの事例発表、泰阜村での報告会、同短大生の愛知教育大学での講義の報告、共有を行った。今年度の「泰阜ひとねる大学」をふりかえり、環境省事業との連携の有無にかかわらず次年度も継続して、実施していくことを確認した。次年度の実施体制、内容について今年度の成果、課題や都市部の大学との連携状況を踏まえて協議を行った。

[評価会議] (計 2 回)

〈構成メンバー〉

- ・辻 英之氏 (NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター代表理事)
- ・宮島康夫氏 (NPO 法人泰阜グリーンツーリズム研究会 副代表理事)
- ・小黒あかり氏 (地域おこし協力隊)
- ・若林美吹氏 (若者代表: 泰阜村福祉課)
- ・横前明氏 (泰阜村副村長)
- ・池田一治氏 (泰阜村村づくり振興室村づくりコーディネーター)
- ・長谷川裕史氏 (泰阜村振興課観光交流係係長)
- ・茶谷淳一氏 (名古屋短期大学現代教養学科学科長/教授)
- ・小倉文香氏 (NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター)

〈ESD コーディネーター〉

大鹿聖公氏 (愛知教育大学教授)

〈会議内容〉

●第 1 回評価会議

日 時: 平成 28 年 8 月 10 日(水)13:30~15:30

場 所: 泰阜村役場

出席者: 15 名 (評価会議メンバー 8 名、ESD コーディネーター 1 名、地方事務所 2 名、全国事務局 1 名、EPO 中部 2 名、オブザーバー 1 名)

〈主な内容〉

本業務の目的と、事前に「泰阜ひとねる大学」のリーダーである辻氏と打合せをして作成した支援計画案を提示し、今年度の目標や事業内容を共有した。

評価会議メンバーの「泰阜ひとねる大学」への思いや実現したいことを聞きあう時間をもった。副村長の思いや願い、村の住民としての考え、都市部の大学の教員としての大学生と村とのつながりなどを共有した。ESD コーディネーターより本業務をいかに活用するかの視点でコメントがあり、その後、「泰阜ひとねる大学」をつくりあげるための今後の取組を検討をした。その結果を、支援計画に盛り込むこととした。

〈主な発言〉※逐語録 (電子媒体に収録) より抜粋

- ・学生が非常に成長する。学びを持って帰ってくる学生の姿を見てこれはいいとそこから始まっていった。
- ・泰阜村には小さな地域だが、高等教育というか、学生を育てる力、機能がある。
- ・地域の人学んだ、育った。学生がこの泰阜村を育ててくれるのではないか。そういった両方の意味を込めて「ひとねる」である。

- ・それぞればらばらで行われていることを 1 つの絵にして、一緒に寄合所帯でやるということだけではなく、その関連性、つながり、物語を「学び」をキーワードにしてつなげた。
- ・単なるフィールド実習の感じにも受け取れる。それを超えた形の学びの仕組みをつくれないうか。
- ・持続性を高めるための人づくりを、大学と村、NPO、住民も含めて一緒にやれる仕組みがつくれないうか。
- ・人づくりを中心に持続可能な地域をどこの地域でもやろうとしているが、この村ではもしかしたらやれるのではないか。
- ・土地から人が離れていった過去があって、今残された 1700 人の人口で持続可能な村づくりをしようと考えた時に、泰阜村だけでは生き残るといことがかなり厳しい。
- ・学生が泰阜村のよさを見出して、村民がここはいいところなんだと再認識できる。
- ・泰阜村を歩いていると、散歩している若者や大学生があっちにもいる、こっちにもいる。何にもないこの村で何の目的かはよく分からないけれども、そういった学生が歩いている。この風情が村を元気にするとつかりになるかもしれない。
- ・若者が持つ価値観と村民が持つ価値観に違いがあることが大切である。
- ・今の市場経済、社会全体の動きに対して違和感を持つ若者たちがいることが大事である。クエスチョンマークを持つ若者がいることが救いの神であって、そういった若者を増やすことが、これから持続可能な村づくりには必要である。
- ・学生と地域のおじいちゃんおばあちゃんが一緒に汗をかいて、対等な立場で、物事を成し遂げていく、つくり上げていくことが大切である。
- ・こんなに楽しいことがこの田舎にはあるんだ、お金よりもっと大事なことはもしかしたらこういうことかもしれない、と心に感じる、心に響くことこそが大事である。
- ・地域のために役に立ちたいと思える人に育つかの検証をしたい。
- ・学生が「帰りたくない」って言って泣く。卒業がぎりぎりの学生が「帰りたくない、このおじいちゃんのとこに嫁入りする」と言う。そこまで感動する。それぐらいの人を育てる、人の心をあつためていく力がある。
- ・集団で働く時に自分には何ができるのかを考えるようになる。
- ・学生達の思い出の場所になるように、学生が帰ってこられるようなきっかけがあるとよい。
- ・友達関係がとても希薄な学生が、すぐに一足飛びに村の人と文通ができるかという、いくら感動した相手だとしても、おそらく無理である。もっともその前の段階のことをやっていかないとけない。
- ・18 歳まで培ってきた人間関係の中で、他人に対する信頼度は低い。そこを泰阜村で解きほぐしたい。
- ・今までスイッチをひねれば火が得られたものが、炭や薪でご飯をつくることの大変さを学生は感じていた。
- ・夏祭りではテントのたたみからステージの設定まで全部村民がやっていて、その速さ、チームワークのよさが学生には勉強になったようで、何でも人にしてもらっている学生が、自分でやらなくてはいけないという自活の意識が育まれた。
- ・グリーンウッドの 30 年の歴史が人を呼び戻している。ショートタームではなくて、長い目で見ていきたい。
- ・偏差値に左右されない、グリーンウッドが表現をしている生きる力が不透明な時代を生き抜く学生にとって役に立っていく。
- ・何かの学びを得たから自分の時間をもう 1 回泰阜村で使おうとする。その学びの内容や学びの質を検証すべきである。その学びがこの村の力に起因していると思ひ、構想を考えている。
- ・学生が来たいと言っている。学生の中に何か変化が起きたんだろう。
- ・何度も何度も訪れるような仕組みになっていくことが大切である。
- ・学生達がやりたいことを決めて、やりたいこと、目標、場所、時間を決めて実施している。教員は学生が書いた日誌とレポートを読むだけの役割になっている。

- ・後輩に充実した学生生活の一つの手段として紹介したい言っている。周りの人に教えたいと言っている。
- ・何にもないところに来て、みんなでいろんなことをやっていく体験が山賊キャンプ、秋のセミナーである。自分たちの頭で考えて活動することで、何か面白いことに気づいたように感じる。
- ・毎年若者が増えてきつつある。何故かはまだ解明はされていない。
- ・平成 11 年と比べても、明らかに若者の活気が全然違う。夏祭りの時にあんなに輝いている。あつたかい若者たち中心のお祭りになっている。

泰阜ひとねる大学 第 1 回評価会議



●第 2 回評価会議

日 時：平成 29 年 1 月 27 日(金)14:30～16:30

場 所：泰阜村役場第 2 会議室

出席者：14 名（評価会議メンバー 6 名、ESD コーディネーター 1 名、地方事務所 2 名、受託業者 1 名、EPO 中部 3 名、オブザーバー 1 名）

〈主な内容〉

環境省から示された MSC(モスト・シグニフィカント・チェンジ)手法（参加型評価手法）の考え方に基づいて、本事業のふりかえり、成果および課題を共有し、評価を行った。今後の事業展開について検討した。

事前に、評価会議メンバーの 6 名が書いた「本事業を通して、自分や周りの人に起こった重大な変化」のエピソードとそれを重大だと思ふ理由を共有し、それぞれのエピソードに対して各評価メンバーが「最も重要な変化」と思ふことに対してコメントを述べた。

〈主な発言内容〉※逐語録（電子媒体に収録）より抜粋

- ・国や県から言われてやっているのではない。
- ・「学生も村民も学び合う」というそのお互いにメリットがある。

- ・「この村の自然のチカラと生き抜いた人々の歴史が確かに彼女達の身体に流れた」というのは村からの学びである。
- ・学生達は泰阜村の魅力を一生懸命言葉にしようとした一年だった。
- ・「『3年前に来た学生は今何しとるかな?』という積極的な質問が村民の人から出るようになった」という村人の言葉は、学生との関わりを思い出したんだと。報告会がきっかけになったんだと思った。
- ・「そんなこと強く感じる」という辻さん自身の変化、自信に満ちた辻さん自身の変化を感じた。
- ・「昔からのものを直して教えられるようにせないかん」という銀一さんの言葉から村人、先代に火を点けた。
- ・一過性ではない学びが大切だということ、村の人にとっても同じで30年時を必要とした。
- ・「『放っておいた沢を、みんなが来れるようにちょっと整えたんな』と地域の沢の写真を見せてくれた」という村の人の心の変化をもたらした学生が素晴らしい。
- ・「『消費する一方』ではなく『自然と自分の知恵で生み出す』暮らしが残る泰阜村』。都会にはない暮らしが泰阜は出来ることが伝わった。
- ・「自然と自分の知恵で生み出す暮らし」。泰阜村の学びの部分である。
- ・「ありのままに関わりたかった」。人と人との関わりとして捉えている。すごく大事な部分。
- ・自然の中にいると気持ちも自然にかえる。
- ・学生さん達が村へ向き合っている姿勢がすごく真剣に見えた。ありのままに関わろうって思った。
- ・何回も関わっているということ。関係の深さが双方の学びを増幅していく。一回では難しい。
- ・学生さん達が一生懸命やっている姿を見る康夫さんの目がすごく温かい。学生達に伝わった。
- ・「自分が受ける自然の恵みから次世代を担う若い人達に伝えていかなければならない」。まさにESD。
- ・「自分だけで享受することなく」ってまさしくその通りで、この事業の根本の一つでもあると思いますし、その通りだな。
- ・「新宿の高層ビルの中にあつた以前の職場では窓を開けることもできず、現在は森の中の役場で、おいしい空気と木々の温もりを感じながら」っていう。私も似たようなところを最近で感じていて。でも都会での暮らししか知らなくて、ずっと生きてる人もいる。たくさんいるんだ。また伝える機会もない。
- ・「人々が心豊かに暮らしている社会もあることを、村を通じて知ってもらえる。将来都会にいてもここを思い出してくれればいい」。都会から来た人の心がわかる。
- ・「学生達はこれからの人生で幾度となく泰阜村での経験を思い起こすだろう」。幾度が大事。一回泰阜村に来ただけではなく、行ったり来たりを繰り返した中で、この先の人生も何度も思い出してくれればいい。
- ・自らが得た昔の学びと学生を重ねて、また自分が学んでいく。こうやって学び合うのは尽きない流れ。
- ・学生に「どっちがいい」って聞いたときに「簡単には答えられない」といった。簡単には答えられないという言葉に学生さんの心の中に泰阜村が少しでも入りこんだ。
- ・「中山間村の潜在的な教育力に驚きそれを活かす教育を考えることが楽しくなっている」。村の人も学生も教員も学ぶ。誰かがこう教えるとか提供するだけではなく学ぶ。それがひとねる大学だ。
- ・学生に今までなかった価値観を見つけてもらえてよかった。ここで感じてもらえて何よりの学びになると思った。
- ・「心の深いところで中山間村である泰阜にある何かが生徒達にとって必要なものと感じていることが表れているように思う」。この「何か」は学生それぞれ感じたものが違う。それが何かを出さない表現がすごくいい。
- ・都会と中山間村が接触すればお互いにいいところが見える。今は都市と中山間村が離れている。教育という強制力を使うことで縮める。中山間村と接触することでお互いに良いものが出てくる。自分達に欲しいものが見つかる。学生の中にもあつたし、銀ちゃんの中にもあつた。

- お互いの中に見つけ合っ、自分の中でそれをきっかけに展開して変化する。その仕方は多様である。何を発見したかはバラバラである。
- 山賊キャンプに親が教育を使って子どもを参加させる。子どもは自分なりに「ここいな」と楽しみ方も含めて発見する。「来年も行く」という話になるなど参加することが定着する。何だかの強制力、今の時代の中で認められる自由と平等な社会の中で認められる強制力を働かせないと両者が接近しにくい。
- 一過性でないことが大事である。10年、20年後に湧きあがる学びがある。丁寧に積み重ねることで暮らしの営みの中に学びがいかされる。100人が1回のファミリービレッジに来ただけではここまで深まらない。でも、ファミリービレッジがあったからこそ強制力が開かれていく。
- 1年、2年とつながることで村の人達も変わってくる。関わりも増えてくる。継続をしないと村が活かされないし、学生も活かされない。
- 学生が来て村民が学ぶ部分もある。村民が学生から学ぶ部分もある。村に住んでいたら見えない部分もある。お互いに学び合いながら、続けていくことですごい良いものが最終的には出来てくる。
- こういう暮らし方があることを知っていると生きていても幅が出来る。根っこに残るような体験をすることがいい効果をもたらす。
- 出会い、それから接触、継続的な接触。今の時代に許される手法で教育の強制力という言葉を初めて学んだ。泰阜村に行ってみたくなるような講座とその出会い、接触の橋渡しが必要である。そういう教育の一つの橋、いろんな形の橋が出来てくればいい。
- 学生を出す側として、学生が行ってよかったという気持ちになる経験をしてほしいと思う。しかし、出す側の気持ちだけではだめである。最初は不安だったが、初回から学生達は「来てよかった」と言った。受け入れ家庭の村の人は自然体で、こういうことをやってほしい、伝えたいなど手ぐすね引いて待っていてくれる。学生達は最初不安でいくが、村の人の熱意のようなものが伝わるんだと思う。学生達は「なんでここまでしてもらえるんだろう」と感動して泣いてしまう。
- 受け入れる方も楽しみにしていて、「何かやってみよう」という気持ちがあって待っている。学生は不安もあるが、その気持ちが伝わって変わってくる。村の人達の、学生が来たら「こんなことしてみたい」という気持ちが一番大きいと思う。

泰阜ひとねる大学第2回評価会議



〈MSC手法 エピソード（電子媒体に収録）の抜粋と最も重要な変化と思う部分へのコメント〉

辻 英之さんのエピソードより

- 学生たちは、泰阜村の魅力を一生懸命に言葉にしようとした 1 年だった。村民への報告会において堂々と語る学生の顔を見ていると、この村の自然の子カラと、生き抜いてきたひとびとの歴史が、確かに彼女たちの身体に流れたことを感じる。
 - － 学生の姿をよく表しているなあ。
- 「3 年前に来た学生は今、何しとるかな？」という積極的な質問が村民の皆さんから出るようになった。
 - － 報告会をきっかけに昔いた子達との関わりを思い出したんだなって。
- 学生も村民も学び合う村へ、また一歩前進しているように思える。
 - － お互いにメリットがある。
- 国や県から言われてやっているのではない。
 - － 内発的。
- この村に住む人々が自発的に考えてやっているのである。この強烈なまでにやさしいまなざしが、大学生の学びを支える。
 - － 印象的な表現。
- そんなことを強く感じる。
 - － 自信に満ちた、辻さん自身の変化。

宮島康夫さんのエピソードより

- 近親感
- やりがいをいただきました
- 前向きな姿に関わらせていただいたことでいろいろな学びを私もいただきました。
 - － 学生さん達が一生懸命やっている姿を見る康夫さんの目がすごく温かいなと思って、で、それがきっと学生達に伝わったのかなあ。
 - － いつも温かい。
- ありのままに関わりたいと思った
 - － すごくその人と人との関わりとして位置付けてくれている。
 - － 自然の中にいると気持ちも自然にかえる。気持ちも自然体。
 - － 学生さん達が村へ向き合っている姿勢がすごく真剣に見えから、こっちもありのままにかかわろうかなあって思ったのかな。

小黒あかりさんのエピソードより

- 泰阜村の暮らしの中になると「自然と共に、仲間と共に、暮らしていく」という経験をせずに生きてきたかを思い知らされる。
 - － 小黒さん自身の再認識というか再認知かな。
- 泰阜村の方の暮らしの中にいる
 - － 都会からキャンプに来てそれでまたそれから良くてまたここへ来たという人がおったんですけども、やはり泰阜のいい魅力があったという事なんじゃないかなと思うんだけど、そういうところがよく出ています。
- 10 カ月、その暮らし方からは、これからの人間の生き方について日々学ばせていただいている。
 - － 学生さん達と一緒に泰阜に来て生活してみて、小黒さんが大学時代の時に味わって、田舎で感じたことがすべて新鮮だったという同じ経験をしたからこそ言えることなのかな。
- 学生たちはこれからの人生で幾度となく泰阜村での経験を思い起こすだろう。
 - － やっぱ幾度っていう所が大事。一回泰阜村に来ただけではなく、何度も行ったり来たりっていうのを繰り返してくれた中で、この先の人生も何度も思い出してくれればいいな。継続性とそれだけのインパクトある体験。
- 学生たちは、これからの人生の中で幾度となく泰阜村での経験を思い起こすだろう。そして、その記憶は彼女たちに何かしらの力を与えるだろう。同じような経験をしてきた私にとって「1 オンスの経験」が、ハードルを飛び越すための踏み台や道しるべやエネルギーとなってくれたように。
 - － 自らが得た昔の学びと学生を重ねて更にまた自分が学んでいくというような、こうやって学び合うっていうのは、つきない流れなんだなあ。
- 楽しみである。
 - － これからの自分が楽しみって感じてました。

小倉文香さんのエピソードより

- 30 年前は何のことかよくわからなかった。
 - － 学生に対して一過性ではない学びが大切。それは村の人にとっても同じで 30 年の時を必要とするもの。
 - － 自分の中の変化を体験を通して話す言葉が印象的。
- 自分たちの地域で生きていくためにも、昔からのものを勉強し直して教えられるようにせんといかん。
 - － 村の人、先代に火を付けた。
 - － すごく印象的。
 - － 実際色々触れ合う中で色々して下さっているんだけど、銀一さんの言葉が色々それを言葉にしているという所。
- 「消費する一方」ではなく「自然と自分の知恵で生み出す」暮らしが残る泰阜村。
 - － 都会にはない暮らしが泰阜は出来るよっていう所がいいんじゃないかな。
 - － これこそ泰阜村の学び。

●一過性のただ観光ではなく、「学び」として継続的、循環的に地域に行っていけることも本事業で実証されました。

－学生に対して一過性ではない学びが大切だと。

●「放っておった沢を、みんなが来れるようにちょっと整えたんな」と地域の沢の写真を見せてくれました。その自慢気なお顔は、本当に印象的でした。

－地域の人々の心の変化をもたらした学生さん達がすばらしいな。

－小倉さんの心が表れている。非常に客観的に距離を置いていて、だけど最後こういう風に思っ。

目に浮かぶ銀ちゃんの顔が・・・。

池田一治さんのエピソードより

●新宿の高層ビルの中にあつた以前の職場では窓を開けることもできず、現在は森の中の役場で、おいしい空気と木々の温もりを感じながら人間らしい生活を楽しんでいます。

－都会での暮らしでしか知らないでずーっと生きている人もいるんだよなあって、たくさんいるんだよなあって。伝える機会もないのかな。

－この村で人々が心豊かに暮らしている社会もあるということを知ってもらえる、将来都会に手もここを思い出してくれればいいなって、やっぱり都会から来た人の心がわかるかな。

●錯覚に陥る。

－自分が泰阜村に根付いているって事を確認して。

－外部の人だから感じられることだなって。

－泰阜村民になったんですよ。

●自分が受ける自然の恵みから次世代を担う若い人達に伝えていかなければならない。

－まさに ESD だなあ。

－お互いを感じ合う、まなびあう。

－あんまり教えたくないなって、何かどかーって広げるんじゃなくて、関心のある人だけこっそりと広げていければ、そんな感じです。

－自分達が楽しくしていれば、自然と外が見に来るのではないかなと、自分から発する事なく。

●自分だけで享受することなく

－まさしくその通りで、この授業の根本のひとつでもあると思いますし、その通りだなぁと。

茶谷淳一さんのエピソードより

●学生たちは「都会と泰阜村のどちらに住みたい」という問いに、悩み、「カンタンには答えられない」と言う。

－簡単には答えられないという言葉の中に学生さんの心の中に泰阜村が少しでも入りこんだんだと理解しました。

●私たち教員は中山間村の潜在的な教育力に驚き、それを活かす教育を考えることが楽しくなってい

る。

－村の人も学生も教員も学ぶんだと。誰かがこう教えるとか提供するだけじゃなくて学ぶんだと。それがやっぱりひとねる大学だったんだな。

●都会にはない魅力があることを「発見」した。

－学生さんにとって新しい価値観を、学生さんにとって今までなかった価値観を見つけてもらえたという所はすごくやってよかったなというか、ここで感じてもらえて何よりの学びになるんじゃないかな。

●翌日のフィールドワークを控えホテルに入ってさえも、数キロも離れたコンビニへ行こうとするぐらい都会にそまった学生たちである。しかしフィールドワークを終え、バスに乗り込む学生たちは寂しがり、涙を流して村から離れることを悲しむ。中には、「帰りたくない」とまで言い出す。学生たちが口を揃えて「来て良かった」と言う。

－このたった半日の、半日だけの体験でそれほどまでに変化があったんだというのをびっくりしました。

－やはり村の人は大変魅力があってよかったんだなあと感じました。

●心の深いところで中山間村である泰阜にある何かが生徒達にとって必要なものと感じている事が表れているように思う。

－この何かという表現の仕方が何か学生さん達それぞれ感じたものが違うと思うので、それが何っていう風に出さない表現がすごくいいなと思った。

－何かというのとあと心の深いところっていうのがぼやっとしているけど、両方ともぼやっとしてるけれど正しいというかなんかあってる表現が。

－やっぱり何かというと、やっぱり何か、これはわからない言葉にできないので。声はわかんないし伝えないとわかんないし、興味あるやつでしかわかんない。



【エピソードから抽出したもっとも重大な変化を表現するセンテンス】

- * 半日村の家庭で過ごす時、学生達は寂しがり涙を流して村から離れることを悲しむ。
- * 学生は、「都会と泰阜村のどちらに住みたいか」という問いに、「かんたんには答えられない」という。
- * 村での活動について堂々と語る学生の顔に、村の自然の子カラと生き抜いてきた人々の歴史が、確かに彼女達の身体に流れたことを感じた。
- * 「3年前に来た学生は今、何しとるかな？」。
- * 「放っておった沢を、みんなが来れるようにちょっと整えたんな」と写真を見せながら自慢げに話される姿が印象に残った。
- * 自然と共に、仲間と暮らす経験をせずにいかに多くの人が暮らしているのか。
- * 自分だけが享受することなく、次世代を担う若い人達に伝えていかなければならない。
- * これからの人生の中で、学生達が泰阜村での経験を幾度となく思い起こし、ハードルを飛び越えるためのエネルギーになってくれるだろうことを楽しみにしている。
- * 学生の前向きな姿、目標に向かう活力に感動し、「ありのままに関わりたい」と共に活動する中で学び合い、やりがいを感じた。
- * 「消費する一方」ではなく「自然と自分の知恵で生み出す」暮らしこそが泰阜村であると再認識した。

【変化をもたらした理由】

- * 都会と中山間村がとにかく接触すればすぐお互いこいいとこが見えたりする。中山間村が接触するから、お互いによいものが出てくる。自分達に欲しいものがあった。学生達の中にもあったし、銀ちゃんの中にもあったということじゃないかな。お互いの中に見つけ合ってきて、それがまた自分の中でそれをきっかけに展開して。その変化の仕方は多様である。
- * 観光地にするとか外で何か引っ張ってこよとするけれども、そこに無理が生じていて、中山間としては今までのあり方を変えて行かなければならない。それはありのままじゃないし、中山間村に住んでいる人にとって実は苦しいことかもしれない。だから継続性がなくなる。一過性で終わる。
- * 接触の仕方によってはつながりがふくらんでいく。今の世の中で認められる自由と平等な社会の中で認められる強制的な力が自発性に変わっていった。やっぱり何だかの力を今の時代働かせないとそこは両者接近しにくい。
- * 会いそれから接触、継続的な接触、今の時代に許される手法で教育の強制的な力。学生を「じゃあ見てみたいな」という状況にさせる座学等の橋渡し。そういう何か橋が色んな形の橋ができてくれればいいかな。
- * 村民のまなざしが、学生の姿が近親感を生み、ありのままに人と人とがつながることで、学びを増幅させた。

[他支援内容]

●ゼミ合宿の視察

日 時：平成 28 年 7 月 30 日(土)17:30~19:30

場 所：泰阜村総合グラウンド

<主な内容>

名古屋短期大学茶谷ゼミ学生が、泰阜村にて実施する 3 泊 4 日のゼミ合宿に参加し、村民夏祭りの手伝い、合宿中に制作した竹宵の展示作業などを視察した。村民夏祭りで、学生は泰阜村の人と会場設営から、カレーの販売、青年会議所ブース、会場アナウンスなどの手伝い、制作した竹宵の展示作業をし、火を灯して村民に披露した。

夏祭りまでの間、学生と村民はともに汗を流し、作業を行い、泰阜村の課題である里山整備にとりくんできた。学生はその過程のなかで、泰阜村の抱える課題や自分たちに何ができるのかを模索してきた。

茶谷ゼミでは、泰阜村に関わることで学生の自発性による活動展開を重視し、学生自身が課題を見つけ、課題改善のための方法を見出す過程で自分と地域社会、村の人々との結びつきを感じることを目的としている。学生の様子や言葉から、村人の温かさの中に自分の存在と役割を見出していることを把握した。



●ヒアリング

* 宮島康夫氏 (NPO 法人泰阜グリーンツーリズム研究会)

日 時：平成 28 年 8 月 10 日(水)16:30~17:15

場 所：泰阜村役場

<ヒアリング記録（電子媒体に収録）から抜粋>

「泰阜ひとねる大学」を構成している重要な要素としてファミリービレッジがある。ファミリービレッジは、名古屋短期大学の 1 年生が全員泰阜村にきて何らかの体験をするプログラムである。当研究会はその際の民泊体験を担っている。参加する大学生の人数が多く、研究会だけでは受けきれないため村役場も巻き込んで取り組んでいる。

今年はさらに、名古屋短期大学の学生 9 人と茶谷先生が夏合宿を 3 泊 4 日で行い、我が家に民泊した。3 日目の夏祭りが終わってから、大学生、茶谷先生、役場の池田さん、小黒さん、辻さんと囲炉裏で集まり、泰阜村での体験について感想など話した。充実した意見交換ができ、勇気づけられた。

泰阜村に中学生や大学生が来てくれることは、非常にいいことだと思っている。是非来てほしい。若い力が入ると、村自体ももっと明るくなる。そうすれば、もっと若い人が帰ってくるのではないか。

「泰阜ひとねる大学」にはとても期待しているし、これまでグリーンウッドがしてきたことが活かされて、泰阜村の資源をうまく使った、まちの大学生の学びの場になるといい。この活動については地元紙にも村

役場が発行する広報にも載っている。どこまで村の人が知っているかは分からない。もっと知ってほしいし、村の人と泰阜ひとねる大学の話したい。

今年で中学生の民泊受入が 8 年目になった。10 年目には、来てくれた中学生が遊びに来てくれたらと思っている。そして、そんな子ども達が訪ねてきてくれる村にしたい。やがて何人かここに住む人達が必ずでてくると思うし、要素があると思っている。

* 名古屋短期大学茶谷ゼミ学生/担当教員ヒアリング

日 時：平成 28 年 9 月 8 日(木)14:30~16:20

場 所：名古屋短期大学

対 象：学生 9 名/教員 1 名

<概要>

茶谷ゼミの学生 9 名に 1 年生から 2 年生の 2 年間で泰阜村と関連した講義、山賊キャンプ、ゼミ活動についてどのようなことをしたか、どのようなことを思い、学んだのか、また泰阜村への思いなどについてヒアリングをした。また、「泰阜村の宣伝大使になったら」をテーマに、3 グループに分かれ、泰阜村での学びと思いをプレゼンテーションの場を設けた。学生の学びから、泰阜村の教育力を把握した。



<ヒアリング記録（電子媒体に収録）から抜粋>

- ・講義では、話を聞くだけではなく、みんな一緒になんかやろうってグループワークとか実践をしています。先生の視線がいつも一緒に、ちゃんと聞こうと思った。
- ・山賊キャンプには、正直、単位がほしくて。そして、経費がかからない。子どももそんなに好きじゃないし、全然考えていなくて、そんな状況で言って想像を絶するくらい大変でした。大変だったからこそ、初めて責任を感じたというか、子どもの前に立つことで子どもたちには大人と見られる。今までそういったことがなかったから、子どもとして生きてきたから、ここでしっかりしないといけないなと。
- ・自分でつくっていくことの楽しさとか、大変だからこそ得られる達成感もあって、ご飯も味の美味しさよりも、みんなで作った美味しさ、そういうものを得ることができて、よかった。
- ・ファミリービレッジの家庭で、暮らしは大変だけど、あたりまえのことがあたりまえじゃないという話を聞きました。
- ・コンビニもない、信号もない村みたいなことを最初に教えてもらっていて、それだけ聞いた時は、えーっと。やっぱり写真とかそういう言葉だけでは伝わらない、行ってみて人の温かさとかを感じて、いいところだなって思った。
- ・今、サラダとか食べたいと思ったら、コンビニで 300 円くらい払えば買える。泰阜村だったら m 種から植えて、畑を耕して、それで得られるサラダだからこそ美味しい。泰阜村はバイトしなくても大変さがあるけどおいしいものが食べられる。でも、今はそのためにバイトしないとけない。時間のためにお金を使っている。
- ・みんな仲良しで心があたたかい人がすごく多い。初めて来た私達のこと全然知らないのに、それぞれの家庭で受け入れてくれたり、何か分からないことがあったら、すぐ「大丈夫？」って言って来てくれたり。自

分の住んでいるところにはない、ぬくもりがあるな。

- ・不便なことが多い分、助け合わなければいけなかったり、一人じゃできないこともたくさんある。そういう時にみんなで協力するんじゃないかな。
- ・今から住むとなると、ちょっと難しいかな。合宿が終わった時にみんなで「来年またみんなでこれたらいいな」って話をしてたから、みんなで一緒に行きたいな。
- ・何年後かに同窓会とかで行きたいです。
- ・自分にはおじいちゃん、おばあちゃんがもういないので、「第2のふるさと」。
- ・ふってたまに帰りたくなる場所だなと今感じていて、もう少し経ってから誰かを連れていったら、ここまでではないかもしれないけど少し何か似たような感情は抱いてもらえると思います。
- ・ちょっと行ってみたいなと感じた若い人がふらっと行って、向こうの人と触れ合って、また帰ってきて、またちょっと疲れたから行ってみる。心を休めるっていう場面でいろんな若い人達が行ったらいいんじゃないかな。
- ・体験できないことを体験できるし、そういうところに魅かれる人が絶対いる。でも、泰阜村を知らない人はたくさんいるので、気軽に行ける環境にあれば足を運びやすい。1泊2日でも自分でつくり出すキャンプとかツアーとかがあったら、もっといろいろな人が行くんじゃないかな。

<プレゼンテーション テーマ：泰阜村の宣伝大使になったら>

* 泰阜村ってどんな村？

人とのつながりをたくさん感じられる村

いつも漬物をくれる、つけじいこと林幸穂さん

おいしいヤギのミルクをくれる、ヤギさんこと宮島徳男さん

竹の師匠、銀さんこと林銀一さん

夫婦ラブの宮島さん

泰阜村には、この方々を始め他にも個性豊かな人がいっぱいいます。きっと皆さんも泰阜村に行ったら、人との出会いの楽しさに気づくことができると思います。

最後に泰阜村ってどんな村？

「あったかいんだから～、泰阜村。」

* 泰阜村ってどんな村？

信号もない、コンビニもない、ポケモンもない、

でも、帰りたい場所。何で？

心が安らぐ自然がある

空気も食べ物もおいしい

受入れてくれる人がいる

それが、第二のふるさと、泰阜村

* 泰阜村で得られるもの

コネクション

泰阜村に行って、現地の人と私達とのつながり

それで、経験したことを友達や泰阜村を知らない人達に話して、またそれが広がる「つながり」です。

ユーティリティ

ありがたみです。

当たり前が当たり前じゃないということ。

今私達が普通に食べたり、飲んだり、会いたい時に自分の

会いたい人に会えるっていうのは、

当たり前だけど、当たり前じゃない。

今の世の中、食べたいとか娯楽とか全てお金で自分を満足

させることができるけど、

泰阜村はお金で買えないものに溢れています。



●名古屋短期大学 大学祭

日 程：平成 28 年 11 月 12 日(土)

場 所：名古屋短期大学

<主な内容>

名古屋短期大学の大学祭では、茶谷ゼミの泰阜村での活動の報告と、泰阜村から村民を招いての泰阜村の農産物の販売ブースが設けられていた。茶谷ゼミの活動報告ブースでは、この間の学びのレポートが展示され、映像が流れていた。名古屋短期大学では 1 年生全員が泰阜村に行っていることもあり、他教員からの、その後も関係が続けている茶谷ゼミの活動への評価は高かった。また、物販ブースでは、数年間継続して出展していることもあり、毎年楽しみにしている教員や近所の方が買いに来られ、あっという間に品がなくなっていた。大学をはじめとして、学生、OG、地域を巻き込んだつながりができつつあり、展開の可能性が見いだせた。

学生（OG の学生も含めて）と村民の再会の場となり、その会話や懐かしそうな顔を見て、つながりの深さを感じた。会場で村民と学生にヒアリングした（※作成したパンフレットに掲載）。

<主な発言内容>

- ・学生さんたちが、先々月会った時と変わりなく、元気でいてくれたことが、ほっとしました。必ず顔を出してくれ、お話もできました。
- ・大学祭をずっと楽しみにしていました。
- ・泰阜村のよさを伝えることができ、私達も自信が持てるし、学生とのコミュニケーションの中から、力をもらえるのかな。それが生きがいにつながっています。泰阜の人にも伝えていきます。



●泰阜村への報告会

日 時：平成 28 年 12 月 22 日(木)15:15～17:00

場 所：泰阜村役場 2 階集会室

<主な内容>

大学生が村に通い、村民と一緒に汗をかきながら村について学び、村も元気になる事業「泰阜ひとねる大学」が始まったことを村民に報告した。



また、名古屋短期大学茶谷ゼミ 9 名が、「泰阜村のむらづくりに役立つことを考え、実行しよう」というテーマのもと、2 年間毎月村を訪れ、村の人と共にフィールドワークを行い、気づいたこと、学んだこと、泰阜村の魅力について村長を始め村民に報告した。学生は泰阜村の一番の魅力は「泰阜村の人」であり、「泰阜村の人と共にすることでわかる『何か』だ」と伝えた。そして、これからも村外の学生が村と関わっていけるように、①気軽に訪問できる拠点をつくってほしい、②離れていても、つながれるしくみがほしい、③村への交通アクセスを改善してほしい、と 3 つの提案を行った。

学生と関わった村民からは「学生さんがくることで村が元気になる」、「学生さんに触発されて、自分達もできることをしようと、地区で一人暮らしの高齢の方のお正月の飾りをつくっている」、「放っていた沢を村に来る学生が来られるように整える」といった言葉が伝えられた。

村長からは、「村には本当に来たいと思う人に来てほしい。しかし、学生の感じた『何か』は一過性の関わり方からは見いだせない。継続して関わることを大切にしている『泰阜ひとねる大学』を認識した。村にとって重要な地方創生施策であるが、すぐに結果がでるようなものではない。若者にアプローチする方策が見出しにくい山村にとって、若者に学びを提供する地道な活動が 10 年後、20 年後に花を咲かせることになる。そういう期待がもてて嬉しい」というコメントがあった。

学生も村の人も、村長の言葉に聞き入り、自分には何ができるのかに向き合い、受けとめる報告会となった。

●愛知教育大学

名古屋短期大学茶谷ゼミ学生「1 コマ」実施

日 時：平成 28 年 12 月 27 日(火)13:20～14:50

場 所：第一共通棟 114 号教室

実施者：名古屋短期大学茶谷ゼミ学生 9 名

対 象：愛知教育大学学生 36 名

<概要>

名古屋短期大学茶谷ゼミ学生が愛知教育大学の学生に、泰阜村での活動を通して学んだこと、村の魅力や村への提案についてプレゼンテーションを行い、グループに分かれて意見交換をした。学生同士が交流し伝えあうことにより、双方に視野の広がりや、新たな気づきと学びが生まれた。次世代間の体験の分かち合い、学びあいの場とその効果を、茶谷ゼミ生と共に得た。

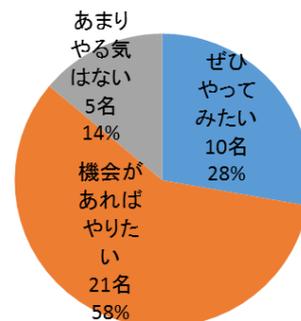


<愛知教育大学学生へのアンケート>

対 象 : 36 名

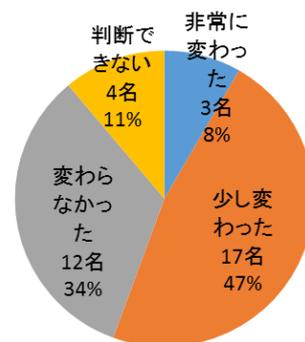
■ 名短大の発表や泰阜村の説明を聞いて、このような活動をやってみたいと思いませんか。

ぜひやってみたい	10 名
機会があればやりたい	21 名
あまりやる気はない	5 名
全くやる気が無い	0 名
無回答	0 名
	36 名



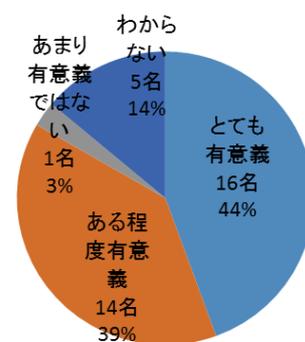
■ 今日の話・発表を聞いて、自分自身の考え方は変わりましたか。

非常に変わった	3 名
少し変わった	17 名
変わらなかった	12 名
判断できない	4 名
無回答	0 名
	36 名



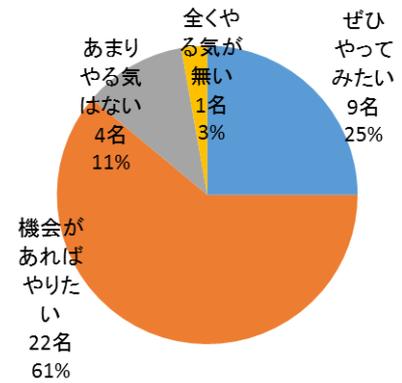
■ 教員養成大学でこのような自然体験活動に関する講義を受けることは意義がありますか。

とても有意義	16 名
ある程度有意義	14 名
あまり有意義ではない	1 名
意義はない	0 名
わからない	5 名
無回答	0 名
	36 名



■ 他大学との連携・協働の研究や学習に参加したいと思いますか。

ぜひやってみたい	9名
機会があればやりたい	22名
あまりやる気はない	4名
全くやる気が無い	1名
無回答	0名
	36名



[コメント]

- ・生の声が聞けて、どれだけ熱い思いをもっているかが伝わってよかった。
- ・今年だけの活動ではなく、次の世代に渡される継続的なものであると聞いて、より深い活動だと思った。
- ・名短大と泰阜村の結びつきの強さに驚いた。なんにもなくても、青年が学ぶ村としてのブランド化はいい考えだと思った。

[成果物]

●作成するパンフレットコンテンツ

泰阜ひとねる大学 シラバス (広報媒体) 案									
<p>【目的】</p> <ul style="list-style-type: none"> ●泰阜ひとねる大学の魅力を伝える ●泰阜村の魅力を伝える ●泰阜村に関わった人々の変化を伝える ●泰阜ひとねる大学の目的を伝える <p>体裁：A4 4つ折り 両面 フルカラー 1000部 配布先：泰阜村民 名古屋短期大学/愛知教育大学/中部7県E SD拠点他 発行：環境省中部地方環境事務所 企画制作：NPO法人グリーンウッド自然体験教育センター 泰阜村 …… 名古屋短期大学 愛知教育大学 環境省中部環境パートナーシップオフィス</p>		<p>表</p> <table border="1"> <tr> <td>タイトル 趣旨 写真</td> <td>学長のメッセージ</td> <td>泰阜村 の紹介</td> <td>大学の紹介 コンセプト しくみ</td> </tr> </table>		タイトル 趣旨 写真	学長のメッセージ	泰阜村 の紹介	大学の紹介 コンセプト しくみ		
タイトル 趣旨 写真	学長のメッセージ	泰阜村 の紹介	大学の紹介 コンセプト しくみ						
<p>【構成】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 泰阜ひとねる大学って(構想図及び学長のメッセージ) 2 泰阜ひとねる大学ではこんな授業をしています 【泰阜キャンパス】 <ul style="list-style-type: none"> ●山賊キャンプ (7~8月) ●ファミリーレジャージ(1年生全員参加) (9月) ●茶谷ゼミ合宿 (7月) 【まちキャンパス】 <ul style="list-style-type: none"> 都市部の大学での講義 (15単位) 泰阜村の暮らしや自然について学ぶ (例) 名古屋短期大学 (前期15コマ) 1年生 自然と生活 (前期) 2年生 生活とリスク (前期) 3. 学生の声 4. 泰阜ひとねる大学をつづけている人 		<p>表</p> <table border="1"> <tr> <td>学生の声と写真</td> <td>カリキュラムの紹介</td> <td>村の人の声 写真</td> </tr> <tr> <td></td> <td> 専門家の評価 茶谷先生 大鹿先生 </td> <td></td> </tr> </table>		学生の声と写真	カリキュラムの紹介	村の人の声 写真		専門家の評価 茶谷先生 大鹿先生	
学生の声と写真	カリキュラムの紹介	村の人の声 写真							
	専門家の評価 茶谷先生 大鹿先生								

●パンフレット

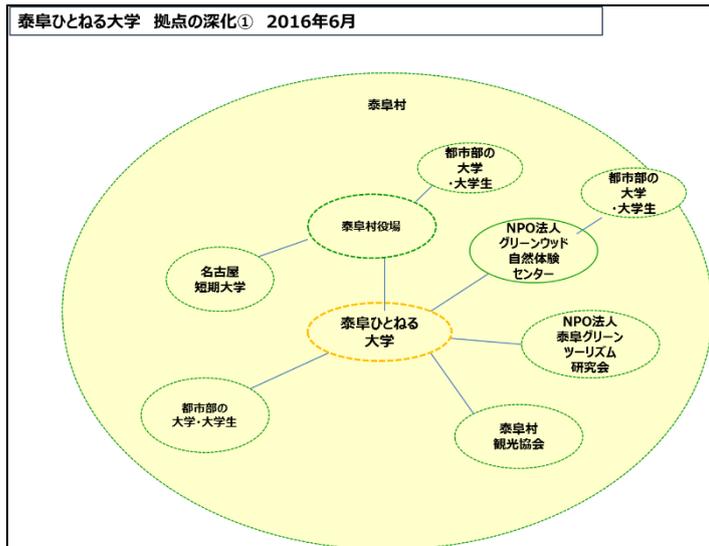


【支援による成果】

＜ステークホルダーの変化＞

事業開始前、関係者のヒアリングを行った際のステークホルダーの関係性は以下のようなだった。

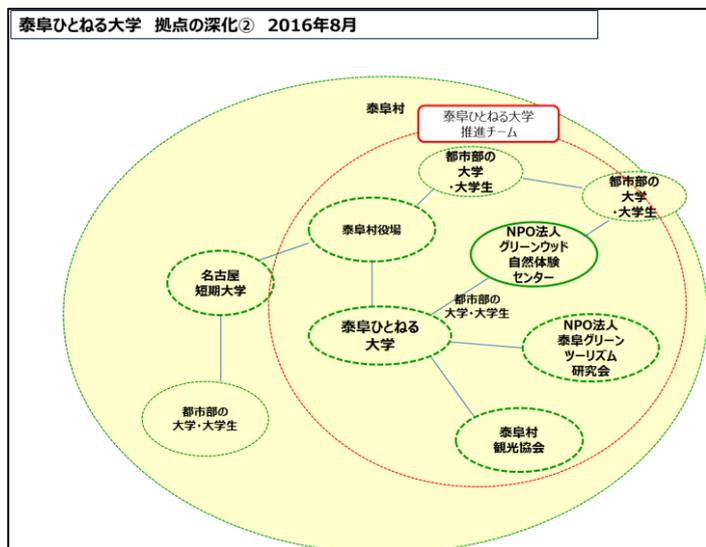
- ・ 泰阜村は学生インターン受け入れを行っている。
- ・ NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センターは、大学のボランティアを受け入れて活動を展開したり、都市部の大学での講師をしている。
- ・ NPO 法人泰阜グリーンツーリズム研究会は、中学生の修学旅行などグリーンツーリズムの受け入れと推進を進めている。
- ・ 泰阜村観光協会は、修学旅行など泰阜村の観光、観光教育の推進をしている。
- ・ 名古屋短期大学は毎年ファミリービレッジ（1年生全員が泰阜村での体験を実施）の受け入れを泰阜村に依頼している。



これらをつなぎ付けた「泰阜ひとねる大学」構想を検討している。

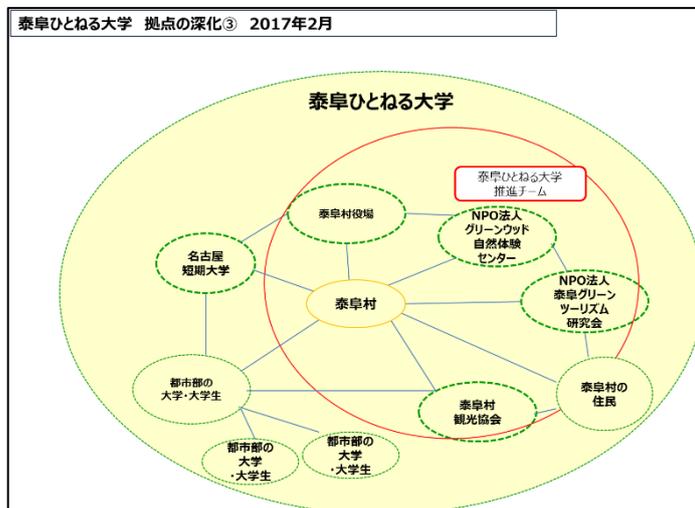
泰阜ひとねる大学につながりそうな体制がある。

事業開始後、泰阜村、NPO 法人グリーンウッド自然体験教育センター、NPO 法人泰阜グリーンツーリズム研究会、泰阜村観光協会が「泰阜ひとねる大学推進チーム」を結成。この会議体が本事業の主体となり、各主体の情報を共有しながら、今年度の取組を検討、実施することとなった。また今年度は「名古屋短期大学茶谷ゼミ」とのモデルカリキュラムづくりと実施をメイン事業とするため、プラットフォーム会議（評価会議）は、この会議体と名古屋短期大学茶谷淳一氏で構成した。

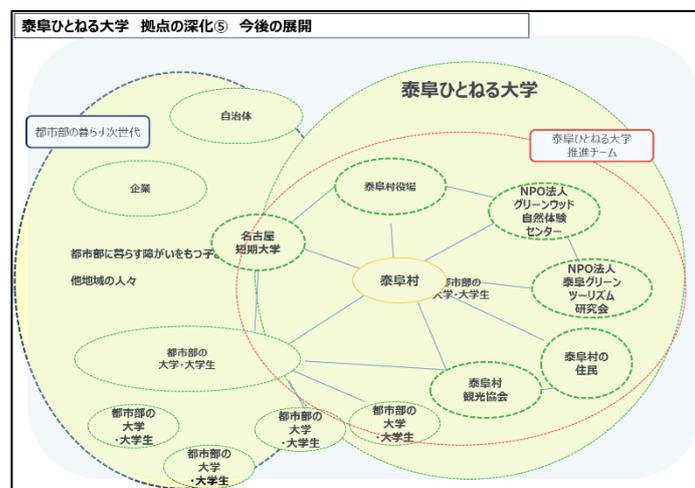


事業終了時には、「泰阜ひとねる大学推進チーム」が今年度事業の成果評価を行い、継続事業として次年度の検討を行った。村長が学長となったことで、村全体で、村とNPOの協働体制に進めていくこととなった。パンフレットやパネルを作成したことで、村内、村外、都市部の大学への本事業の普及が可能となった。

また、第2回評価会議でのMSC手法による評価、ふりかえりを行うことで、より関係者の強みが活かされ、本事業のキーワードである「一過性でない学び」「村のもつ教育力」「接触を可能にするしくみ、橋渡し役」をいかに活かした事業へと拡大及び進化するかを協議することができた。



今後の展開は、村まるごと「泰阜ひとねる大学」となり、「泰阜ひとねる大学推進チーム」に積極的参画をした大学を巻き込みながら、主体が拡大し、泰阜ひとねる大学に今後継続的に参加する都市部の大学へのアプローチ、他企業や自治体の受け入れの検討も行う。



<事業の変遷と成果>

ステークホルダーが集まり、地域課題、それぞれの持つ強みや資源を共有するプラットフォーム会議及び評価会議を実施した。拠点代表者と事業の進め方や今年度の目標について随時打合せ、地域のステークホルダーへの事業説明・協力依頼、地域事情や地域の資源等についてのヒアリングにより把握し、事業の継続的な展開を見据えて地域の巻き込みを図り、進めた。第1回の評価会議を踏まえて、本年度の事業においての実施内容を検討し、泰阜村での学びを都市部の大学、泰阜村の双方から可視化し、伝えるパンフレットを作成することにした。大学生の合宿やゼミナール、大学祭に参加し、原稿の作成や関係者打合せ、掲載データの収集や、学生及び村の人のインタビュー等を行い、作成を支援した。また、

村内報告会として、都市部の学生が村長を筆頭に村民に村での学びを報告し、村への提案を行う場、及び、愛知教育大学にて泰阜村での学びを同世代の学生にプレゼンテーションし、経験交流する場づくりの支援を行った。

個別ばらばらで行っていた学習内容を本事業によって体系化したことで、対象者の気づきや変化が明確になり、本事業のもつ学習効果が明確となった。関係者の生の声を丁寧にヒアリングし、その体験に基づくコメントを表現したパンフレットを作成したことで、共感者が増えた。

また、第三者である ESD コーディネーターや EPO が企画構成、コンテンツ作成を行ったことで、対象者の変化の本質を見出すことができ、言語化することができた。MSC 手法によるエピソードを活用したふりかえりが効果的に働き、関係者の共感度と本事業に対するモチベーションが高まり、今後の展開に向けてのノウハウの蓄積、成果を活かしたい今後の取組の検討が行われるようになった。

パンフレットを作成することで、本事業を可視化することができ、村民、他大学等への説明ツールとすること、さらに村内住民の本事業への参加者を増やしたいという意見が出された。

第三者である EPO が学生や村民にヒアリングすることで、本事業への思いや自身の変化を引き出し、言語化することができた。とまた、ヒアリングや会議の記録、ふりかえりを丁寧に行い、言語化することにより、事業についての思いや考え、方向性を確認できた。そのことによって、拠点の体制が強化された。

本事業にて、都市部の学生と共に活動した村民が地域の資源を再認識し、自分達ができる地域での活動を主体的に始めるようになった。村民が、人材育成の当事者であると感じ、本事業の一員であるという意識が育まれた。次年度以降も継続して都市部の若者を受入れたいという意欲が高まった。同時に、都市と農村部が育ち合う関係性を構築する可能性を見出すことができた。

名古屋短期大学での実績と成果を踏まえ、都市部の大学との連携を主軸に、対象者のニーズや状況に柔軟に対応できるプログラム編成を試みることで次への展開に向けて動き始めている。

- 各ステークホルダーの持つポテンシャルを持ち寄り、事業全体を体系化し、可視化した。
- 学生、村民へのヒアリングを実施し、本事業の可能性と蓄積されている成果を可視化した。
- 学生へのヒアリングを実施したにより、学生の学びを可視化した。
- パンフレットを作成することで、各ステークホルダーの思いを集結したツールができた。
- 愛知教育大学での講義を受け持つことができた。他大学との連携の可能性を検討した。
- 関係者の「変化」を表現するエピソードを作成し共有することで、実施体制が強化された。

<今後の課題>

今後の課題として、第三者の視点から下記の点をどう提案し続け、モデルプログラムをいかに地域化するかがあげられる。

- コミュニティ拠点（村そのものが ESD 教材、ESD 拠点）のモデルをいかに汎用化するか。
- 似たような取組をしている、町村、大学にいかにアプローチをするか。
- 大学以外の若い世代の参加（企業、自治体）をどう可能にするか。
- 「泰阜ひとねる大学」のフォローアップ(追跡調査)の指標設定と手法。

イ 揖斐川流域環境学習拠点等連携事業

〈主な支援内容〉

● 共通の ESD プログラムの作成(支援)

揖斐川流域では、環境学習施設や社会教育施設が数多く点在し、環境及び文化伝統等に関する学習活動が実施されている。

上流・中流・下流の拠点の学習活動をつなぎ、流域間での連携を強化し、「流域」地域における課題や資源を共有し、地域の環境保全、地域産業創造につながる ESD プログラムを作成することが求められる。

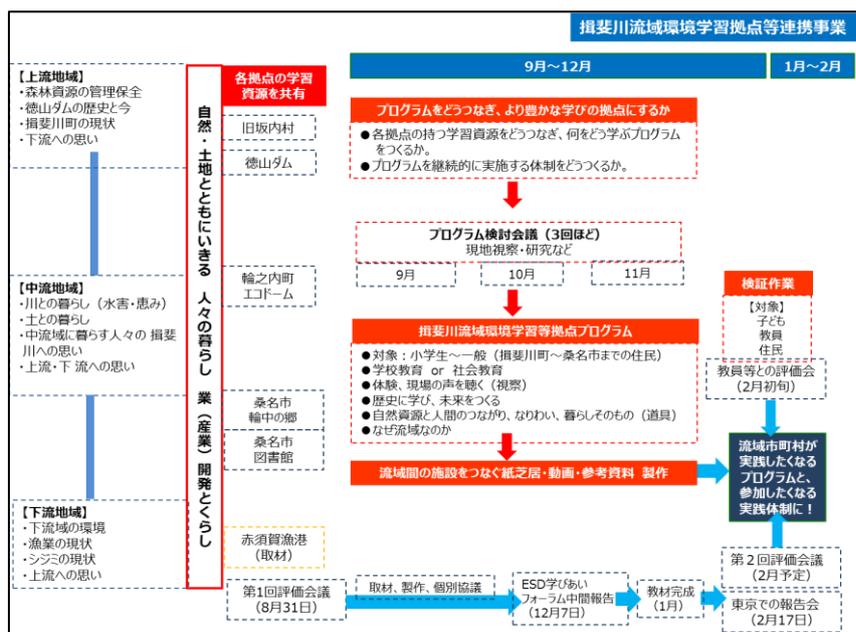
● 流域単位での人づくりのためのネットワーク形成(支援)

流域に暮らす住民が、流域を暮らしの持続可能性を実現するコミュニティと捉え、流域単位での持続可能な地域づくり、流域内循環型社会を担う人づくりのための基盤（ネットワーク）形成を行う。



〈事業構成・事業目標の設定〉

上流、中流、下流のそれぞれの特色と課題を教材に活かすこととした。学校教育及び社会教育、各拠点で活用できるものとし、流域をつなぐことで、持続可能な地域づくりのヒントが見出せるような内容とすることとした。また、作成した教材を教員等の意見や評価を得るために、この間 EPO 中部と関係性を育んだ、揖斐川流域の小中、高等学校の教員を迎えての評価会をすることとした。



【支援スケジュールと主な内容】

日程/場所	内 容
7月6日(水) 岐阜市内	第1回プラットフォーム会議実施。 企画の中心となる関係者が集まり、事業内容、目的を共有し、上流中流下流のポテンシャルを共有し、学習拠点をどうつなぐかを検討した。
7月13日(水) EPO 中部	ESD コーディネーター打合せ実施。 事業内容、進捗状況や課題を共有し、評価会議の論点など協議した。 ●逐語録作成
7月19日(火) 桑名市	桑名市図書館館長ヒアリング。 桑名市立中央図書館が揖斐川、桑名市の漁業などについて実施していること、もつ資源などをヒアリングにより把握した。
7月22日(金) 桑名市	桑名市輪中の郷ヒアリング。桑名市図書館館長打合せ。 輪中の郷で実施する教育プログラムや資源についてヒアリング及び館内視察により把握した。
7月23日(土) 赤須賀漁港	赤須賀漁港、桑名市地元小学校、上流地域の小学校との交流事業視察。
7月26日(火) 輪之内町、揖斐川町	第2回プラットフォーム会議実施。 事業を展開するにあたり、連携したい中流・上流の環境学習施設および社会教育施設にヒアリングを行い、実施する教育プログラムや事業内容、地域の歴史や川との暮らしについて、現在の課題や提供できる資源などについてヒアリングにより把握した。
7月27日(水) 桑名市	揖斐川下流ヒアリング。
7月28日(木) 桑名市	桑名市打合せ。
8月5日(金) EPO 中部	拠点代表者打合せ。 進捗共有及び上中下流をつなぐ ESD プログラムについて意見交換。対象や教材について案を出し合った。
8月10日(水) 揖斐川町	揖斐川上流イベントにてヒアリング実施。
8月17日(水) 輪之内町	輪之内町ヒアリング。
8月25日(木) EPO 中部	拠点代表者打合せ。 進捗共有及び意見交換。
8月31日(水) 輪之内町	第1回評価会議実施。 本事業の内容及び目的の共有、各ステークホルダーの揖斐川流域への思い、事業に対する考えを共有・意見交換し、それぞれの持つ資源、ポテンシャルを共有した。本事業への意見、提案だしを行い、上流から下流までを軸（コンセプト）をもってつなぎ、ESD 教材（ツール）を作成する方向性を共有した。さらに、関係する学校等と連携し、デモンストレーション実施の可能性について意見を交わした。 ●逐語録作成

9月13日(火) EPO 中部	ESD コーディネーターと打合せ。 評価会議を受け、今後の事業の展開、進め方について、またそれぞれの持つ資源をどのように連携させていくか、そのためのツールについて意見交換を行った。
9月	上記ヒアリングを通して、それぞれ実施している環境学習プログラムを把握し、どうつなぐかの検討を始めた。
9月30日(金) EPO 中部	ツール作成のための打合せ（絵本作家）。
10月	ツールの作成に関して、拠点代表者と企画内容の調整、ツールの形態について検討した。動画製作者及び絵本作家との調整、打合せ、構成作成など実施。今後ツールを活用したプログラム実施をする方を対象としたデモンストレーション、及び意見交換の場の企画を検討した。一部教員に評価検証会への依頼を行った。
10月11日(火) 揖斐川町	揖斐川町、生命の水と森の活動センターに事業参加依頼及びヒアリング。 拠点代表者と絵本及び動画製作についての打合せ。
10月19日(水) 桑名市	桑名赤須賀漁業協同組合及び桑名市にヒアリングを実施。 ツールの作成における協力を依頼した。
11月	支援対象拠点に事業の進捗状況、ツールの企画内容（案）の共有し、不足している視点、素材などについての意見交換を行った。 ESD コーディネーターに、ESD 教材（ツール）の学校での活用にあたり学習指導要領とのつながりについて意見交換し、助言をいただいた。 支援対象拠点などの意見交換を踏まえ、拠点代表者、映像製作者、絵本作家と随時打合せを行った。 絵本の作成については、活用の仕方を検討し、大版の紙芝居を作成することとなり、構図と内容をまとめ絵本作家とイラストの制作を進めた。 動画については、絵本と関連させ、情報を補完するツールとして制作することとし、映像のシナリオ、撮影場所、出演者の調整し、撮影を進めることとなった。 多様な主体を対象とした環境学習のツールとして活用するため、資料集の作成を進めた。 作成するツールを活用した学習の学校での展開を検討するため、教員が集まり意見交換の場についての企画内容、参加者の選定、調整を行った。
11月4日(金) 垂井町	拠点代表者、ステークホルダーと ESD 教材（ツール）について打合せ。 拠点で、拠点間でつながりのある学びのために、どのようにツールが活用できるか、必要な素材、データ等について協議した。また、ツールについての意見交換の場の持ち方について協議した。
11月24日(木) 桑名市	揖斐川下流域のステークホルダー（桑名市、桑名市立中央図書館、輪中の郷）とツール作成についての打合せ。 国土交通省木曽川下流河川事務所、赤須賀漁業協同組合ヒアリング。 事業の説明及び、ツールの作成においての協力を依頼した。
11月29日(火) 揖斐川町	揖斐川上流部で動画撮影。 旧徳山村の村民、旧坂内村の村民にインタビューを行った。 ●インタビュー記録作成
12月	事業及び ESD 教材（ツール）の作成状況についてステークホルダーに報告・共有し、今後の展開において必要なステークホルダー、ツール作成・活用においての必要な素材、視点について情報共有、意見交換を行った。

	ESD コーディネーターより学習指導要領とツールの関連についてなど指導を得た。
12月6日(火) 桑名市	揖斐川下流部で動画撮影。 赤須賀漁業協同組合、漁業者、地元のシジミを扱う店舗の方にインタビュー実施。 ●インタビュー記録作成
12月7日(水) ウインクあいち(名古屋)	EPO 中部主催「ESD 学びあいフォーラム」参加 中部の ESD 実践について学びあう EPO 中部主催「ESD 学びあいフォーラム」にて本事業の報告を行った。参加者に意見をいただき、検討した。
12月12日(月) 輪之内町	揖斐川中流で動画撮影。 輪之内町の町民に、水害について、昔の暮らしについて、農業等についてのインタビュー実施。 ●インタビュー記録作成
12月15日(木) 揖斐川町	揖斐川町役場ヒアリング。 事業の説明及びツール作成における協力を依頼した。
12月20日(火) 岐阜市	国土交通省木曽川上流河川事務所ヒアリング。 事業の説明及び、ツールの作成における協力を依頼した。
12月27日(火) 垂井町	第3回プラットフォーム会議実施。 関係するステークホルダーに ESD 教材の説明、作成状況の報告をした中で、いただいたご提案、ご意見を踏まえて、今後の活用機会、活用方法を検討した。 ESD 教材をブラッシュアップする作業を行った。
1月5日(木) 揖斐川町	揖斐川町長説明。ESD 教材について、作成状況や活用方法について説明し、不足している視点や揖斐川町のもつリソースについて情報提供やアドバイスいただいた。また、揖斐川流域における環境学習は今年度をベースに、次年度以降も継続し、更に展開して実施することを説明し、協力を得た。
1月10日(火) 桑名市	揖斐川下流のステークホルダー（桑名市図書館、赤須賀漁協、赤須賀漁港の海産物販売店）打合せ。 ESD 教材の作成状況の報告、活用方法について意見交換を行った。図書館等の社会教育施設で ESD ツールを活用した読み聞かせ、環境教育も視野に入れ、読み聞かせを行う団体にも事業内容と目的、ツールの説明を行い、連携体制を構築した。学校教員との意見交換会で読み聞かせを行う。
1月11日(水)	動画のナレーション原稿の作成支援を行った。
1月13日(金) 揖斐川町	揖斐川歴史民俗資料館インタビュー実施。
1月16日(月) EPO 中部	拠点代表者打合せ。 動画作成の打合せ、ナレーションの最終確認、収録を行った。
1月23日(月) EPO 中部	ESD コーディネーター打合せ実施。 事業の振り返り、成果・課題について意見いただいた。第2回評価会議の進め方や検討課題について意見交換した。また、ツールの制作状況を共有、意見交換し、学校教員との意見交換会の進め方について打合せをした。 ●逐語録作成
1月30日(月) 輪之内町	第4回プラットフォーム会議実施。教材お披露目会及び意見交換実施。 ツールについて、学校教員との意見交換会実施。制作した ESD 教材（紙芝居、動画、資料集、活用マニュアル）を説明し、活用方法や活用する上で改善すべき点等について学校教員、支援拠点が集まり、意見交換を行った。教員から

	<p>は学校教育での学習内容と活用方法について、また、社会教育施設でもある支援拠点においてのツールの活用方法について共有した。いただいた意見を踏まえて、拠点代表者と ESD コーディネーターとツールの修正点について打合せを行った。</p> <p>作成した ESD プログラム実践に活用するツール（絵本及び動画）に対するアンケートを行い、その効果を検証した。</p> <p>プログラム実施主体及び拠点間での評価検証を行い、改善を検討する。</p> <p>●議事録作成</p>
2月	映像教材、参考資料集の制作支援を行った。
2月13日(月) EPO 中部	<p>第2回評価会議実施。</p> <p>MSC手法による評価を行うため、5名の方にエピソードを作成していただき、共有及びコメントを交わし、本事業に対する共感度を高めた。事業を通しての変化を共有した。</p> <p>●逐語録作成</p>



[プラットフォーム会議] (計 4 回) ※自治体を含めたメンバー

<構成メンバー>

- ・鈴木 明氏 (桑名市立中央図書館長)
- ・小林清成氏 (桑名市輪中の郷館長)
- ・安田裕美子氏 (NPO 法人ピープルズコミュニティ理事長)
- ・田中正敏氏 (坂内観光協会会長、旧坂内村元村長)
- ・輪之内町住民課環境衛生係 主事 橋村成路氏
- ・揖斐川町企画部 水源地域ビジョン推進事務所主事 中川正志氏
- ・神田浩史氏 (NPO 法人泉京・垂井副代表理事)
- ・嵯峨創平氏 (岐阜県立森林文化アカデミー教授)
- ・野村典博氏 (NPO 法人森と水辺の技術研究会理事長)
- ・河合良太氏 (NPO 法人泉京・垂井事務局長)

<ESD コーディネーター>

大鹿聖公氏 (愛知教育大学教授)

※プラットフォーム会議メンバー以外に、事業の必要性に応じて以下の方に情報提供等協力をいただいた。

- ・城東小学校 (桑名市)
- ・中村治彦氏 (揖斐町徳山会館館長)
- ・国土交通省木曽川上流河川事務所 (岐阜市)
- ・国土交通省木曽川下流河川事務所 (桑名市)
- ・揖斐川歴史民俗資料館 (揖斐川町)

<会議内容>

●第 1 回プラットフォーム会議

日 時 : 平成 28 年 7 月 6 日(水)19:00~20:30

場 所 : じゅうろくプラザ

出席者 : 6 名 (NPO 法人泉京・垂井 2 名、岐阜県立森林文化アカデミー 1 名、NPO 法人森と水辺の技術研究会 1 名、EPO 中部 2 名)

<概 要>

本事業の核となる主体メンバーと本事業の目標、内容を共有し、「揖斐川流域」を対象にして本事業を実施するに至った経緯を共有した。岐阜県、三重県という県域を越える揖斐川流域を拠点とするため、本年度参加いただく市町や環境学習拠点、活動団体について意見交換をした。また、活動団体や市町の行政に対してのアプローチ方法、役割の分担について協議をした。流域におけるプログラム作成、実施のポテンシャルを共有し、把握した。

●第2回プラットフォーム会議(関係者打合せ)

日 程 : 平成 28 年 7 月 26 日(火)

* 安田裕美子氏 (NPO 法人ピープルズコミュニティ/輪之内町エコドーム)

時 間 : 10:00~11:00

場 所 : 輪之内町エコドーム

出席者 : 5 名

(NPO 法人ピープルズコミュニティ 1 名、NPO 法人泉京・垂井 2 名、EPO 中部 2 名)

* 田中正敏氏 (坂内観光協会)

時 間 : 13:00~14:00

場 所 : 田中氏自宅 (坂内村)

出席者 : 5 名 (坂内観光協会 1 名、NPO 法人泉京・垂井 2 名、EPO 中部 2 名)

* 中村治彦氏 (徳山会館/旧徳山村住民)

時 間 : 15:00~16:15

場 所 : 徳山会館

出席者 : 5 名 (徳山会館 1 名、NPO 法人泉京・垂井 2 名、EPO 中部 2 名)

〈概 要〉

揖斐川の上流、中流の核となる拠点の担当者にヒアリングをし、本事業の目標と内容の説明、上流、中流域の環境学習等の状況についての情報共有をした。各拠点のある地域の歴史や川との暮らし (自然環境、災害、生業等)、施設で実施している環境学習等プログラムや地域への思いを把握し、今後の ESD 教材づくりの参考とした。

●第3回プラットフォーム会議

日 時 : 平成 28 年 12 月 27 日(火)9:00~10:45

場 所 : NPO 法人泉京・垂井「みずのわ」

出席者 : 5 名 (NPO 法人泉京・垂井 2 名、岐阜県立森林文化アカデミー 1 名、EPO 中部 2 名)

〈概 要〉

ESD 教材 (拡大紙芝居、動画、資料集及びツール活用マニュアル) づくりの進捗状況と、この間、教材製作を行うにあたり、各ステークホルダーからの提案や意見、特に市町の対応について共有をした。また、次年度以降、幼児から大人まで、学校教育から生涯学習において幅広い対象に上・中・下流域が連携した ESD 環境教育プログラムの実施を見据え、活用するツールの修正点の確認、意見交換を行い、以降の作業内容、スケジュールを確認した。

●第4回プラットフォーム会議 ※ESD 教材説明及び意見交換会を兼ねて実施

日時：平成29年1月30日(月)14:00~16:00

場所：輪之内町エコドーム

出席者：25名

(学校教育関係者7名、評価会議メンバー9名、動画インタビュー協力者2名、絵本読み聞かせ1名、ESDコーディネーター1名、オブザーバー1名、地方事務所1名、EPO3名)

〈概要〉

今年度の本事業の核となる、揖斐川流域のステークホルダーの連携、協働による作成したESD教材(拡大紙芝居、動画、資料集及び活用マニュアル)が大凡完成した。学校教育現場で作成した教材を活用した授業を展開するために、主に揖斐川流域にある小中学校、高校の教員との意見交換会を行った。発達段階に合わせて、また教科や総合学習との連携を鑑み、どのような活用ができるかについての提案、アドバイス、改善点についての意見を得た。また、評価会議メンバーと教員が意見を交わすことで、お互いのスキル、ノウハウを共有し、実践に向けてのイメージを具体化した。また、会議により得た改善などの意見を踏まえ、学校教育現場で使いやすく、学習の質を高めるためにツールをブラッシュアップした。

プラットフォーム会議



[評価会議] (計2回)

〈構成メンバー〉

- ・鈴木 明氏 (桑名市立中央図書館長)
- ・小林清成氏 (桑名市輪中の郷館長)
- ・安田裕美子氏 (NPO 法人ピープルズコミュニティ理事長)
- ・田中正敏氏 (坂内観光協会会長、旧坂内村元村長)
- ・輪之内町住民課環境衛生係 主事 橋村成路氏
- ・揖斐川町企画部 水源地域ビジョン推進事務所主事 中川正志氏
- ・神田浩史氏 (NPO 法人泉京・垂井副代表理事)
- ・嵯峨創平氏 (岐阜県立森林文化アカデミー教授)
- ・野村典博氏 (NPO 法人森と水辺の技術研究会理事長)
- ・河合良太氏 (NPO 法人泉京・垂井事務局長)

〈ESD コーディネーター〉

大鹿聖公氏 (愛知教育大学教授)

〈会議内容〉

●第1回 評価会議

日 時 : 平成 28 年 8 月 31 日(水)14:00~16:30

場 所 : 輪之内町エコドーム

出席者 : 14 名 (評価会議メンバー8 名、ESD コーディネーター1 名、地方事務所 2 名、EPO 中部 3 名)

〈主な内容〉

本業務の目的の説明と、斐川流域で環境活動団体等のネットワーク化を進めている、NPO 法人泉京・垂井と事前打合せをし作成をした支援計画案についての意見交換をした。EPO 中部は評価会議の前に、本事業の上流、中流、下流のステークホルダーに説明をしているが、全員の初顔合わせの会であったため、それぞれの地域の特色や施設や活動の紹介、揖斐川に対する思い、本事業への期待について共有をした。

上流、中流、下流それぞれの地域で揖斐川に関する活動が展開しており、「つなぐこと」の価値と重要性について協議した。つなぎかたについては多様ではあるが、共通に活用できるツールがあるとよいといった意見があった。協議した内容を支援計画に盛り込むこととした。

〈主な発言内容〉※逐語録 (電子媒体に収録) より抜粋

- ・やはり低地ということで水、洪水とかそういったものに非常に敏感な地域である。
- ・今までは下流域の、自分達の周りにしか関心がなかった。やはりもう少し上流域に関心を持ってもらえれば交流も深まるという思いで日々いる。なかなか住民との接点も直接的にはないから、そういう思いは持っているけど今のところは具体的には動けていない。
- ・昭和 40 年代後半ぐらいまでは年間 3 千トンのハマグリが獲れていた。ところが、年々地盤沈下や港湾整備等で環境が

激変して、干潟だったところが干潟ではなくなった。

- ・小学校に数年勤務しまして、木曾川の上流の白川町との交流をずっとしていた。ESD のプログラムはずっとやってはきているが、揖斐川水系で何か可能性を見出せるか。今回参加した。
- ・「森は海の恋人」なんてこともよく言われるが、恋人の姿が遠いという感じがする。薪炭林が放置されていて、水瓶としてダムも揖斐川町にはあるが、上流と海とどうやって気持ちをつなぐとか、実際の交流をするかは山村部の悩みである。
- ・揖斐川という川は 120Km というコンパクトな川でありながら、上流域の深い山、山村と、中流域は非常に豊かな農村、そして工業の集積地があって、下流域には豊かな漁業があることを知るに至って、流域を意識した活動としては分かりやすい、やりやすい。ひいては、それが地域社会を豊かにする大事なポイントになる。そこにグローバルな観点を入れることによって、海外とのつながり、そして国際協力の分野ともつなげて考えられる。
- ・生まれも育ちも輪之内町。揖斐川はいつも氾濫して、台風等がくると、伊勢湾台風はたくさんの堤防が決壊した。今は揖斐川から離れたところに安住の地を求めて移転した。水は本当に魔物だとも感じる。
- ・上流の水が増水して、氾濫して土を持ってきてくれる。今ある土が覆土される。肥沃な土で土質が変わっていい野菜が穫れる。母の家は河川敷に畑があり、それで生計を立てていた。牧田川と揖斐川の河川敷の間の畑で、この地域の人達は百姓で生計を立てていた。その川、水のお蔭でまた肥沃な土地に恵まれて、野菜の収穫につながったということも母から聞いていた。
- ・輪之内町に他の自治体が視察に来られるが、こういった団体が表に立って活動していることがとてもいい。行政目線でやるには限界がある。住民の受け入れ方が全然違う。そういった人達を行政は積極的に支えていかないといけないし、できることは何でもやっていきたい。
- ・川の学習をするときに、今の子どもは、自分の住んでいる場所の川しかイメージができない。下流の子どもであると上流、中流がわからない。逆に上流の子どもだったら下流がわからない。その辺を何とかしたいと、学生が河川環境を理解する教材やカリキュラムをつくっている。川は1つではない、同じではないことを理解するような教材である。学校現場では川に連れていくことが難しく、その辺りをひと踏ん張りしないと行けない。こういう地域の拠点が、学校の代わりに、実際の場所に触れる体験をするなど関わって実践することはよいことだと思っている。
- ・地域の、自分の住んでいる、自分の学校がある場所の川の上流と下流というレイヤーと、今、過去、未来というレイヤーをどうつないでいくか。違うレイヤーを被せてどうつなぐか。子ども達が興味を持ったところを深く下げていく。

第1回評価会議



●第2回評価会議

日 時：平成 29 年 2 月 13 日(月)10:00~12:30

場 所：環境省中部環境パートナーシップオフィス

出席者：13 名（評価会議メンバー7 名、ESD コーディネーター1 名、地方事務所 1 名、受託業者 1 名、EPO 中部 3 名）

〈主な内容〉

環境省から示された MSC(モスト・シグニフィカント・チェンジ)手法（参加型評価手法）の考え方に基づいて、本事業のふりかえり、成果及び課題を共有し、評価を行った。今後の事業展開について検討した。

事前に、評価会議メンバーの 5 名が書いた「本事業を通して、自分や周りの人に起こった重大な変化」のエピソードとそれを重大だと思う理由を共有し、それぞれのエピソードに対して各評価メンバーが「最も重要な変化」と思うことに対してコメントを述べた。

〈主な発言内容〉※逐語録（電子媒体に収録）より抜粋

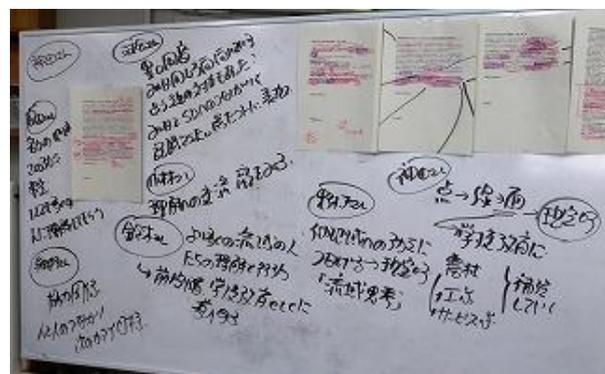
- ・住んでいる周辺のところのことしか基本的に気をつけないが、この場合は上流部の方が下流部のことを気にかけてそれに気づいて、行動しようとしている。
- ・河口の漁協からの声が聴こえる、というところが、この事業にとって大事な部分である。具体性を持って最上流の田中さんが下流の方の姿が見えたという。改めてこういったことを提唱されたと感じている。
- ・実際に聞こえた声で自分がこういう風に発信していく。名付けたいという発言もですが、国が重要な課題と位置付けなければいけないという発言に、自分だけで背負わないようないい提案をされている。すごくいいことである。
- ・森林は山、川の母親というこの響きがとても良い。これをやっぱり伝えていくのが大事である。
- ・「下流域の水産資源、川の環境を守るために、上流域の間伐の重要性、間伐が重要である」ことを地元の方が意識され始めているというのが大きな変化。
- ・実際の下流の動画や声を聞くことで改めてそういう責任が再認識された。課題として木を使うなど「国中の課題としなければならぬ」と改めて課題を教えて、解決策の必要性を改めて実感した。
- ・水害や川の話、昔の話は数えきれないほど苦労話はある。でもそういった経験をした人はもう少ない。そういった苦労話は母から聞いている。そんなことがあったんだと子どもたちには伝えていきたい。
- ・「上流や下流の流域に住む人々のために何ができるか」、「それを考えるためにはまず地元のことを知ってもらうことが必要である」とのコメントがある。全てのことが集約されている。地元のことを知る必要があることが情報共有であり、いろんな地域の交流も含めて集約されている。
- ・中流域で肥沃な土地であることを改めて認識した。今まで上流や下流のことは考えない生活だった。少し考えるようになった。地元のことを知る必要があると実感している。意識付けがされた。
- ・中流域に住む方が、「上流下流の住む方のために何ができるか考えていきたい」と。地元に住んでいる方が地元の川とともに、生きる生活の文化の特長に気づいてそれを伝えていこうとしていることが大きな変化である。地元の方であっても、なかなかその生活文化の由来とか歴史を知っている方は実は少ない。昔を知ることによって、そのことを未来に伝える、新しい川との共存方法や、流域全体での共存方法の新しい姿が見つかる
- ・地域の人の話を改めて詳細に聞いたことで、地元への視座を大切に、そこから流域全体へと目を向ける大切さを示唆

されている。教材活用への強い思いが記されている。

- ・伝えていかなくてはならない重要な要素、資源は特別なものではなくて、流域に住む一人ひとりのエピソードが重要である。単なる思い話ではないことに気づいた。
- ・身近な人達の活動とか経験は知っていたが、流域をつなぐ活動や、持続可能な社会、安全な社会を作ることに必要な経験であることを改めて認識した。「ESDの運動をいかに広げ」「ESDの指導者、実践家、継承者を如何に増やすかについて思い悩む日々でもある」「一朝一夕にはできないが不断の努力で地道に積み上げるしかない」という言葉から、難しさを共有できる。
- ・この事業を通して、こういう風に「悩む」ことがなかったら、こういうことを考えることもなかったと思う。まずは知ることができた。悩むことができることがやっぱり良かった。前に一歩進める。
- ・簡単に口では学校との連携と言ってもどうやって実施していくかをこれから模索しながら地道に積み上げていかなくてはならないと強く感じた。
- ・何回もお話を聞いているが、動画を撮りに行ったり、話を聞きに行ったりする中で、新しい言葉、新しいことを改めていろいろ教えさせてもらった。何気ない会話の中でこの事業に関わる話をし、改めて自分自身の流域のフィット感が強くなった。
- ・輪之内のお米や野菜をいただくこと体内がどんどん揖斐川流域で構成された。それが大きな変化。
- ・「あきらめ感」とから「当たり前」になる経過に、揖斐川流域をもってくることができる。揖斐川流域は素材が少ないが、いくつか提案があるので、来年度活かしたい。
- ・「今回、揖斐川というフィールドで、流域内で活動している人や資源をつなげ」という部分は非常に大きな成果である。それを共有できる問題とか、流域の特長や生活の課題等を共有できる教材ができたことが大きな成果。
- ・自らの活動分野を軸にどのように活用していくのか、可能であれば私は何を訴えていくのかということを引きちんと課題を持ちながら整理していく。今後どんどん活用しながら検証改善する。
- ・一つの成果を踏まえて、次のステップ、新しいものを開発していくというのは非常に重要なことである。
- ・自分自身が地元のことをほとんどよく知らない。そこから取り組んでいきたい。この事業を通して、上流も中流も下流もいろんな課題を抱えているが、そこに住み着いてきたわけはなんだろうということ。それぞれ地元になんらかの魅力があるからそこに住み着いてきた。いろんなことをみんなで話し合っクリアしながら協力しあってクリアして現在に至っていることを伝えていかなくてはならない。嫌だったら逃げていけばいい。もっと住みやすいところに。あえて住み着いてきたのはなんだろうということ。を、やっぱり考えていく必要もある。
- ・「流域の繋がりを体現できるコンテンツ」は非常に重要である。長良川流域のどの学校に行っても、郡上の割り箸一本で授業をしている。これで全ての整理ができる。簡単に整理できる一つの飛び道具があると、実際に伝えることができる。それを考えること自体がこれを検証していくことになる。
- ・「異口同音」という言葉がキーワード。みなさんそれぞれの思いがあって、言葉で表して、それが実は同じ方向を向いていると改めて皆さんが意識した。異口同音なので同じ方向を向いているが、少し違う意見だと今までは対立が生まれてきた。こうやって改めて事業を整理することで、持続可能な社会、流域の繋がりは大切だねと改めて認識できた。ただそれは、言葉を一緒にすればいいというわけではなくて、異口同音のままそれぞれの表現でこれからも進めていくことが重要である。
- ・顔を見る関係が非常に重要である。物事がより深くなっていくことを、関係を構築していくことで、さらなる地域間の交流が深まっていく、理解や交流が深まっていく一番いい方法である。
- ・「地域単位で地域社会を考える」、「流域思考の人々が点在しているのを、そこを繋ぐ」がキーワードである。学校教育や社会教育の場で今日より成果物を活用し、前段階まで進めることができた。改めて、今年度の成果として確認をしたい。

- ・「協力関係が生まれた」というのが一番大事である。教材はあくまで成果物の一つであって、一番大切なのは人々の繋がりにある。次の課題や目標が見つかってきていることが大きい。
- ・点を線にといいところには達した。この次にこれを面にしていくために、今後社会教育、校教育の中で取り組まれるようになるのがカギである。
- ・最終的には下流域に住んでいる方が上流域に学習に訪れる。上流域の方が下流域に学習に訪れる。そのような交流ができるといい。
- ・上流部にはお邪魔したことがあるが、中流部の市町は今まで通過地点でしかなく、立ち寄ったことが全くなかった。今回、エコドームで会議をしてこんな施設があったんだ、こういう作物をつくっているんだ、あるいは輪中の堤防が陸地の中にあるんだ、など知ることができて、見ることができて非常によかった。中流部を含めて上流部まで回ってみたいという気持ちになった。
- ・自分の語る言葉や自分の経験したことがエピソードとして共有できて広がっていき大きなものになると信じている。今日のやり方はいいと思う。
- ・今時の子どもたちは考えることが少ない。一つのことに向かって考えることがあまりない。事業を通して、この話し合いはとても貴重な体験で、今後もの人考えているのかわからないといったときにこういう方法は使えと、大事なことだと感じた。来年度、この紙芝居を題材に町内からの結構視察もあるのでそういった方たちにできることからしていければいいと思う。

第2回評価会議



〈MSC手法 エピソード（電子媒体に収録）の抜粋と最も重要な変化と思う部分へのコメント〉

田中正敏さんのエピソードから

- シジミ、ハマグリが獲れなくなった・・・河口の漁協からの声が聞こえる
 - － 住んでいる周辺のことは考えるが、遠いところの変化にも気づき、行動しようとしている。
 - － 課題の再認識、生態系の循環の再認識をしている。
 - － 意識が変われば行動は変わる。
- 源流に住む者の責任が問われているようで苦しい
 - － 上流に住む人から良く聞くこと。負を背負わせてはいけないと思う。
- 川は海の恋人と言われている。ならば、川の親は・・・、森林は川の母親である
 - － 下流域の水産資源を守るための上流域での間伐の重要性。これを地元住民が意識しはじめている。
 - － 下流域の住民の声に耳を傾けられていること。また、平成 27 年に全国育樹祭が揖斐川町で開催され、間伐の重要性が周知されたことも大きいのではないか。
- そのサイクルを好転させるために山に手を入れる。これが「魚付林」であろう。
 - － 「河口の漁協からの声」が具体性をもって田中さんに伝わったと思われる。
- 森林は、樹齢 30 令位に達したら、伐って使う
 - － 課題の再認識、生態系の循環の再認識をしている。
- 国中の重要な課題としなければならない
 - － 改めて流域の現状を把握し、具体的な行動の必要性を実感した。

安田裕美子さんのエピソードから

- 中学校を渡し船で通ったことを思い出しました。
 - － 単なる思い出話ではない。
 - － 昔を未来に伝える。
- 上流の恩恵を受け、肥沃な土地に感謝しながら、美味しいお米や野菜を育てています。取り組んでいるパワフルな彼女が友達であることがとても誇りに思えました。
 - － お話を改めて聞くことで、ご自身のご経験を思い出されたり、ご友人を誇りに思われた。お知り合いの方のお話や活動が、実は流域をつないでいること、持続可能な社会をつくれること、安全な社会を作ることなどに気付いた。
- 壮大な揖斐川の中流域に住む私たちが、上流や下流の流域に住む人々のために、何ができるか考えていきたいと思います。それにはまず、地元のことを知ってもらう必要があると思いました。
 - － 地元のことを他の地域に人々に知ってもらうという言葉にすべてが集約されていると思う。
 - － 地域の人たちの話を改めて詳細に聞かれたことで、地元への視座を大切にし、そこから流域全体へと目を向ける大切さを示唆されている。また、教材活用への強い思いへと至られた点は大きい。
- － 流域 SD

- 川と共に生活してきた事実、肥沃な土地、上、下流のために何ができるか。地元のことを知る必要。
- 地元の方が地元的生活文化の特徴に気づき、伝えようとしていること。地元の方でも地元的生活文化の由来、歴史を知る人は少ない。昔を知り、未来に伝えることで、新しい川の共存方法が見つかるのではないか。
- 一緒に生きていくという感覚。

鈴木明さんのエピソードから

- ESD の実践家や継承者を増やすことの必要性を学んだ
 - 多忙でライフスタイルの変化した現代の人たちの目を忘れてしまいがちな ESD に向ける重要性を認識されたのではないか。
- ESD の運動を如何に広げ、ESD の指導者、実践家、継承者を如何に増やすかについて、思い悩む日々でもある。
 - この取組を通じてこのことについて考えることができたことはすごい。
 - ESD の人材育成は地道な努力が必要であることを認識され、自ら実践されている。人材育成はすぐには行えない。始めることは簡単だが、続けることが難しい。それを正しく認識して方法を模索してみえるため。
 - まずは知る事ができた。悩むことができることがやっぱり良かったと思う。前に一歩進めると思う。
- 郷土を愛し、郷土の良さを実感し、それを未来に活かす
- 一朝一夕にはできないが不断の努力で地道に積み上げるしかない。
 - 強い意志を感じられる表現となっている。これまでの取組から、さらに、前へ進めたいという確固たる思いが表出された。
 - 「継続していく」ということは、非常に難しいことということに共感できる。
- 地に足の着いた取り組みとして進めなければと思う日々である。
- 若い人たちをターゲットにした学校との連携を模索したい
 - 環境学習拠点の重要な図書館であっても効果的（効率的）な方法はない！地道に、学校との連携。
 - 「共感共有」という言葉、そういったことを、強く感じられる文だなと。学校現場の人たちとどのように連携・共有していけるのかということのも課題。

野村典博さんのエピソードから

- 「あきらめ感」があったのは否めない
 - －あきらめ感→現時点、現在地→ 当たり前
- 揖斐川というフィールドで、流域内で活動している人材や資源をつなげ、共有できる教材としてとりまとめができたことは、流域内での環境教育の教材の整備という視点だけでなく、かかわった各々がその教材を通して共有できたことが大きな成果であったと考えている。
 - －私自身新たに学ぶところが多かった。動画作成の時に、何気ない会話の中にも ESD、流域のつながりを実感できるものが多かった。揖斐川流域に自分のフィット感が上がった。フィット感＝自分の流域 ごはん→輪之内野菜→体ごと。
 - －揖斐川流域の人材、資源をつなげ、教材としたことで流域の特徴、生活文化、課題を共有できたことは大きい。
 - －一定の成果をふまえ、さらに新しい物（ツール）を開発していく必要があると思う
- 学校現場において、実際の教材の活用や、拠点の関わりの検証やブラッシュアップの作業
- 伝え手において、自らの活動分野を軸に、どのように活用していくのか、どこに課題があるのか等々、今後活用しながらの検証、改善を行わなければ。
- このような取組や流域での視点、自らの暮らしや役割等々が「当たり前」になること
- 杉材で作った割り箸」のような、流域の繋がりを体現できるコンテンツやツールの開発や発掘を考えていきたい
 - －一定の成果をふまえ、さらに新しい物（ツール）を開発していく必要があると思う
 - －最後の流域のつながりを体験できるコンテンツやツールの開発、発掘にはぜひ取り組んでいきたい。
 - －揖斐川流域の素材の少なさから、今後の活用への提言の数々
 - －間伐材のネコ砂、木育(東京のネットワーク)など木をうまく使う取り組み

神田浩史さんのエピソードから

- 流域単位で地域社会を考える。いわゆる「流域思考」の人々が点在し、そこを繋ぐことが本事業で大切な鍵である、との思いで、本事業を進めてきた。
 - －点在する流域思考の人々をつなぎ、面識・交流が生まれることになり、一つの成果が生まれ（協力関係）、次の課題、目標が見つかってきていること。その理由は人々のつながりにより、様々な意見が交わされることが重要だと思うため。
 - －流域を繋ぐことが鍵である→地域への実際の暮らしにつながる動きと連携→より現実提案として。
Keywordとしての流域思考。現実的「流域思考」
- 直接の出会いや映像を介しての出会いにより、流域の核になる人たち同士の面識・交流が生まれた。
 - －「顔の見える関係」は重要。そういった関係を構築しさらなる地域間の理解や交流を深めていくことが重要。

●より多くの流域の人たちが流域のつながりの重要性について理解し、具体的な行動へと移していけることを、異口同音に唱えられている。

－異口同音だけど思いは同じ。異口同音だから、もしかしたら対立があったかもしれないが。

●流域を軸とした学びの充実に向けて協力関係が構築できてきた。

●下流域の漁業者の動きだけでなく、中上流でも新規就農や地域資源を活かしての起業・移住への動きが進んできている。今後は、こういった流域環境を強化する動きとの連携を講じられるよう、本事業の成果を有効活用していきたい。

－この事業を通して、少しずつ揖斐川流域で動きがあったこと

－「未来に何を残すか」の視点を具現化する動き、新たな商業、流域環境をどう生かすかの動きは重要。

【エピソードから抽出したもっとも重大な変化を表現するセンテンス】

* 河口の漁協からの声が聞こえるこの頃。

* 源流に住む者の責任が問われているようで苦しい。

* 中流域に住む方が、上流下流の住む方のために何ができるか考えていきたいと。地元の住んでいる方が地元の川とともに、生きる生活の文化の特徴に気づいて伝えていこうとしている。

* 自身の経験を思い出したりとか、友人を誇りに思ったりとか、身近な人達の活動とか経験はもともとご存知だと思うが、それが実は流域をつなぐ活動だったりとか、持続可能な社会とか安全な社会を作ることにとっても必要な経験だったり活動だったりすることに改めて認識された。

* 下流域の水産資源、川の間伐の重要性、間伐が重要であるということを知り、地元の方が意識され始めている。

* 中流部の市町には今まで立ち寄ったことが全くありませんでした。今回、エコドームで会議をさせてもらって、こんなものがあったのか、こういう作物をつくっているんだ、あるいは輪中の堤防が見れて非常によかった。上流もそうだ。改めて、中流部を含めて上流部まで回ってみたいなど。

【変化をもたらした理由】

* 漠然と上流から見ての下流、中下流から見ての上流と言われ続けてきたものが、具体的に下流にはこういった漁業者の方々が居る。中流にはこういった上下流に思いを馳せる農業者の方が居る。そして、上流には流域の未来を見据えるの方々が居る。直接の出会いや、映像を介しての出会いにより、流域の核になる人たち同士の面識・交流が生まれた。

* 改めて課題を再認識されているというところ。下流でシジミやハマグリが取れなくなった、源流に住む者の責任であるが問われているとか、でやっぱり魚付き林を大事にしなくちゃいけないとか。森林から始まる生態系についてきっちり認識をもう一回された。

* 「協力関係が生まれた」というのが一番大事。教材はあくまでの成果物の一つであって、一番大切なのは人々のつながりである。

* 何気ない会話のなかにこの事業にかかわるような話をさせてもらって、改めて自分の自分自身の流域の

フィット感が強くなったかな。輪之内のお米や野菜だったりして、まさに体内がどんどん揖斐川流域で構成されている。

* 共有できる問題とか、流域の特徴や生活の課題等を共有できる教材ができたということが大きな成果。



[成果物]

第1回評価会議にて、揖斐川流域（上流、中流、下流）をつなぐために、共通して活用できるものがあるといいという話になった。その後、主にプラットフォームメンバーのヒアリングを行い、各拠点（施設）でどのような環境学習プログラムが行われているかを把握し、共通の教材の製作を決定した。

今年度は共通教材を作成する過程において、上流、中流、下流の拠点や人材をつなぐ、関係性を構築すること、次年度より活用できる教材を作成することを成果とすることとした。

また、教材を作成するにあたり、以下を留意点として作成した。

- ①持続可能な開発のための教育(ESD)の概念と手法を取り入れること
- ②あらゆる世代が活用できること（発達段階に応じたものにする）
- ③学校教育及び社会教育（生涯学習）の現場で活用できるもの
- ④各拠点で実施しているプログラムの連携できるもの
- ⑤教員やNPOなど活用する側の意見を反映させること

【作成した ESD 教材】

〈タイトル〉

揖斐川流域に学ぶ～持続可能な地域のつくりかた～

揖斐川流域環境学習拠点等連携事業（揖斐川 ESD 教材）

〈コンセプト〉

揖斐川・揖斐川流域の風土と人々の暮らしから持続可能な地域を作るためのヒントを見つける。

- ・揖斐川にいきたくなる
- ・揖斐川の風景や暮らしている人々に会いたくなる
- ・揖斐川のなりわいに触れてみたくなる

〈活用方法〉

揖斐川を題材にした授業づくりや、イベント、体験学習の場で活用できるものとする。教材の種類は3種あり、発達段階に合わせて、組み合わせて使用する。活用方法については、「活用マニュアル集」にて説明している。

〈教材の種類〉

- ・拡大紙芝居「いびがわ あれあれ？ものがたり」
- ・映像教材「揖斐川流域の風土と暮らし」
- ・資料集「もっと知りたい！揖斐川・揖斐川流域のこと」
- ・活用マニュアル集「揖斐川 ESD 教材の使い方」

〈監修〉

愛知教育大学 教授 大鹿聖公氏（ESD コーディネーター）

〈教材紹介〉

◆拡大紙芝居「いびがわ あれあれ？ものがたり」

対象：幼児から大人まで

ねらい：揖斐川で起きていること、起きたことに気づく

仕様：9P

所要時間：10分程度

内容：主人公のしじみが、揖斐川の下流から中・上流にでかけ、揖斐川でなにが起きているのか、「あれあれ？」をキーワードに旅をする。

- ①河口でワリの養殖現場に出会う。（川の恵みに出会う）
- ②輪中に出会う。（川と暮らす人々の知恵と工夫に出会う）
- ③水屋に出会う。お米や野菜に出会う。（肥沃な土壌に出会う）
- ④サカナヤトリ、ミズに出会う。（肥沃な土壌、川の豊かさに出会う）
ごみに出会う。（川をきれいにする取組に出会う）
- ⑤工場や家、畑、たんぼ、頭首工に出会う。（水によって豊かになった人間の暮らしに出会う）
- ⑥上流の森に出会う、冠山（揖斐川の源流）に出会う。（森と川のつながりに出会う）
- ⑧徳山ダムに出会う。（ダムと人間の暮らしのつながりに出会う）
- ⑥揖斐川上中下流域に出会う。（揖斐川流域で起きていることに出会う）
- ⑨揖斐川流域の自然の恵みをいただく。

◆映像教材「揖斐川流域の風土と暮らし」

対象：小学4年生以上

ねらい：揖斐川流域に暮らす人々の生の声から、持続可能な未来のヒントを学ぶ。

所要時間：全編約27分

*映像1 揖斐川上流の風土と暮らし～森とダム～（約8分）

上流の森：針葉樹と広葉樹の混合林が特徴である揖斐川町の森。かつてはその利用や恩恵のために植樹がされていたが今は使いみちがなく荒廃している。森林の状況や森林資源の利用について学ぶ。

徳山ダム：日本一大きなダム。治水、利水、エネルギー利用など人々の暮らしへの恩恵はあるが、一方で、建設のために湖底に沈んだ一つの村や構造物によって漁業への影響もある。両方の視点をもったダムの利用を考える。

*映像2 揖斐川中流の風土と暮らし～水害、たんぼ、畑～（約7分）

輪中：水害を防ぐための昔の人々の知恵と工夫に学ぶ。

輪之内の暮らし：水屋をもつ地域の人に昔の水害や、水屋の使い方を学ぶ。水と近い場所の暮らしぶりを学ぶ。肥沃な土で育まれある農作物、その暮らしについて学ぶ。

*映像3 揖斐川下流の風土と暮らし～漁師としじみ～（約7分）

赤須賀漁業協同組合：資源管理、上流域での植樹、子どもたちへの環境教育など漁業を持続的に
 行うための考え方を学ぶ。

川の恵みを販売するお店：地元の恵みを販売するお店のこだわりや愛着を学ぶ。

*映像4 揖斐川と暮らす～流域というつながり～（約5分）

上流・中流・下流をかつてつないだ「舟運」：かつて暮らしに欠かせない産物を川伝いに運んでいた船に
 よる輸送「舟運」。人々の営みをつなぐ一本の線としての揖斐川を学ぶ。

流域に暮らす：人々の生命を育む揖斐川の恵みを知る。

◆資料集「もっと知りたい！揖斐川・揖斐川流域のこと」

対象：小学校高学年以上

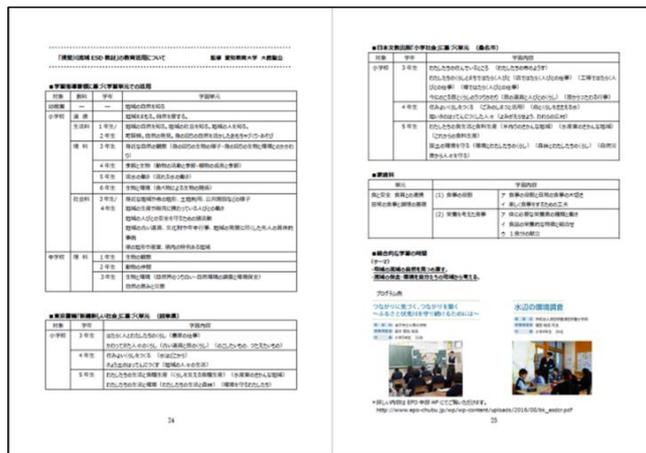
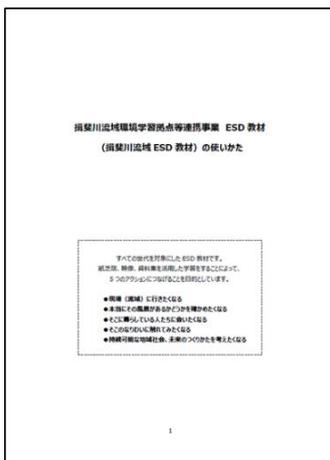
ねらい：拡大紙芝居、映像教材での学びを深める

仕様：A4 サイズ 14P

内容：揖斐川（流域）の特色、データ、流域市町の状況、世界の状況等の情報を掲載している。

◆活用マニュアル集「揖斐川流域 ESD 教材の使いかた」

拡大紙芝居、映像教材、資料集の使い方、教科や総合学習での活用方法、ESD 教材としての位置づけ等を掲載しています。



映像教材
揖斐川流域の風土と暮らし

【対象】小学4年生以上
 【ねらい】揖斐川流域に暮らす人々の声から、持続可能な未来のヒントを学びます。
 【時間】全編約27分



映像① 揖斐川上流の風土と暮らし ～森とダム～ (約8分)

〈上流の森と暮らし〉

針葉樹と広葉樹の混合林が特徴である揖斐川町の森。森林の状況や森林資源の利用について学ぶ。

〈徳山ダム〉

日本一大きなダム。治水、利水、エネルギー利用など人々の暮らしにたくさんの恩恵をもたらした。しかし、建設のために湖底に沈んだ村、構造物によって漁業への影響もある。多角的な視点でダムの利用を考える。



映像② 揖斐川中流の風土と暮らし ～水害、田んぼ、畑～ (約7分)

〈輪中〉

水害を防ぐための昔の人々の知恵と工夫に学ぶ。

〈輪中之内の暮らし〉

水屋をもつ地域の人に昔の水害や、水屋の使い方を学ぶ。水と近い場所の暮らしぶりを学ぶ。肥沃な土で育まれる農作物、その暮らしについて学ぶ。



映像③ 揖斐川下流の風土と暮らし ～漁師としじみ～ (約7分)

〈赤須賀漁業協同組合〉

資源管理、上流域での植樹、子どもたちへの環境教育など漁業を持続的にするための考え方を学ぶ。漁師さんからのメッセージ。

〈川の恵みを販売するお店〉

地元の恵みを販売するお店のこだわりや愛着を学ぶ。



映像④ 揖斐川と暮らし ～流域というつながり～ (約5分)

〈上流・中流・下流をかつてつないだ「舟運」〉

かつて暮らしに欠かせない産物を川伝いに運んでいた船による輸送、「舟運」。人々の営みをつなぐ一本の線としての揖斐川を学ぶ。

素直な人に出会えるよ!

〈流域に暮らし〉

人々の生命を育む揖斐川の恵みを知る。



揖斐川流域の風景とインタビューで語る現地の方々の言葉から、流域に対する想いや願い、それぞれの地域の状況を詳細に、かつ正確に伝えるものとなっています。正確な情報や現地の人びとの思いなどを伝えることが主となっているため、受け手によって理解が異なるのではなく、誰に

も同じ情報が同じように伝わるのが大事です。流域の方々の言葉には、いろいろな想いや願いが込められています。映像からその一部でも感じていただきたいと思います。

【監修】大曲聖公(愛知教育大学教授)

資料集

もっと知りたい! 揖斐川・揖斐川流域のこと

【対象】小学校高学年以上
 【ねらい】紙芝居、映像教材を活用した学びを深める。
 【仕様】A4サイズ/14ページ
 【内容】揖斐川(流域)の特色、関するデータ、流域市町の状況、世界の状況などの情報を掲載しています。

※活用マニュアル「ESD教材の使い方」を作りました。参考にしてください。http://www.epo-chubu.jp



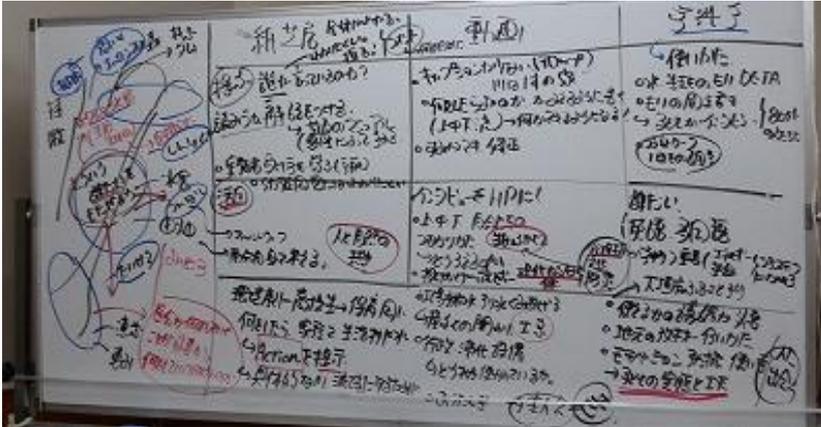
【ESD 教材説明及び意見交換会】

日 時：平成 29 年 1 月 30 日(月)14:00~16:00

場 所：輪之内エコドーム

〈概要〉

下記のゲスト及び評価会議メンバーに教材の説明をし、どのように活用できるかの意見交換会を行った。



〈ゲスト〉 敬称略

分野	氏名	所属
小学校	西村 健	桑名市立城東小学校校長
小学校	堀田一浩	養老町立広幡小学校校長
中学校	小西伴尚	学校法人梅村学園三重中学校
中学校	寺本 豊	学校法人津田学園津田学園中学校
高等学校	坂田広峰	三重県立桑名高等学校 教頭
高等学校	野畑伸芳	岐阜県立池田高等学校 校長
大学/社会教育	古澤礼太	中部大学/中部 ESD 拠点協議会事務局長
絵本よみきかせ	大東満希子	放課後子供教室コーディネーター（桑名市）

〈評価会議メンバー〉 敬称略

分野	氏名	所属
1	実施拠点 鈴木 明	桑名市立中央図書館長
2	実施拠点 小林清成	桑名市輪中の郷館長
3	実施拠点 安田裕美子	NPO 法人ピースコミュニティ理事長/輪之内町エコドーム
4	実施拠点 田中正敏	坂内観光協会会長、旧坂内村元村長
5	実施拠点 中村治彦	旧徳山村元住民/徳山会館館長
6	実施拠点 岩崎政彦	生命の水と森の活動センター センター長
7	自治体 橋村成路	輪之内町住民課環境衛生係 主事
8	自治体 細野朋洋	揖斐川町企画部 水源地域ビジョン推進事務所
9	有識者 神田浩史	NPO 法人泉京・垂井副代表理事
10	有識者 野村典博	NPO 法人森と水辺の技術研究会理事長
11	有識者 嵯峨創平	岐阜県立森林文化アカデミー教授
12	地域事務局 河合良太	NPO 法人泉京・垂井事務局長

〈意見交換において出された主な意見の内容〉

* 拡大紙芝居

- ・ 高校の家庭科で保育実習を実施している。高校生が保育園に訪問して子どもたちと触れ合っており、その中で環境問題に取り組んでいる。環境劇を保育園児にしており、その際には紙芝居は利用できる。

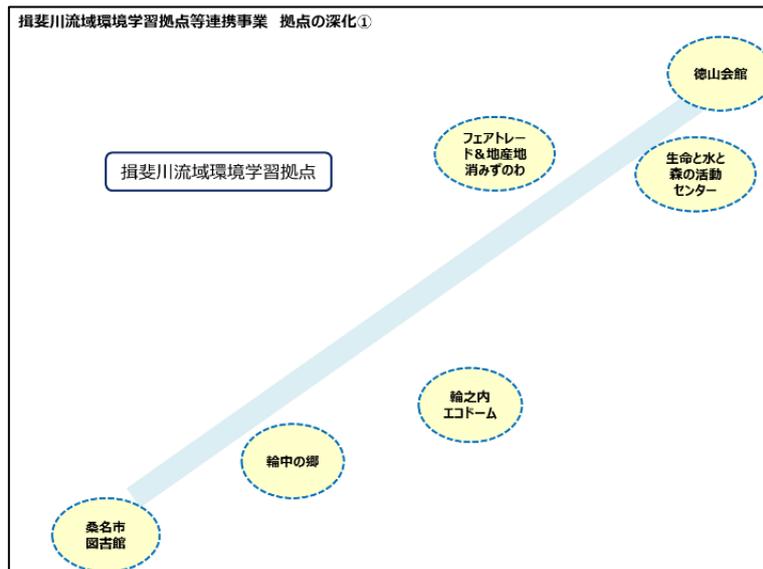
* 映像教材

- ・ 高校で課題研究の研究テーマに活用できる可能性がある。英語や多国籍バージョンの展開を考えたい。
- ・ 総合的な学習の時間にふるさとの歴史と自然を知るために、生徒に見せる。環境学習の必要性がよくわかると思う。
- ・ 下流の漁港の方の話は分かりやすかった。上流の話は分かりにくかったが、思いや多様なエッセンスがあった。実際の世の中にはそういうエッセンスがたくさんある。中学校では、子どもたちがうまく抽出して、次に調べようとする時に活用できる。
- ・ 映像の使い方としては、最後の画像を出さずに、「自分たちならどうするか」を考える教材としたらいい。
- ・ 中学校では、キャリア教育の観点でいろんな人に会わせている。生徒に動画に出演した人々に会わせたい。笑顔や自信がみなぎっている動画を見ると、会いに行きたいと感じる。人をたくさん出し、各々の気持ちを出せるようなものがいい。

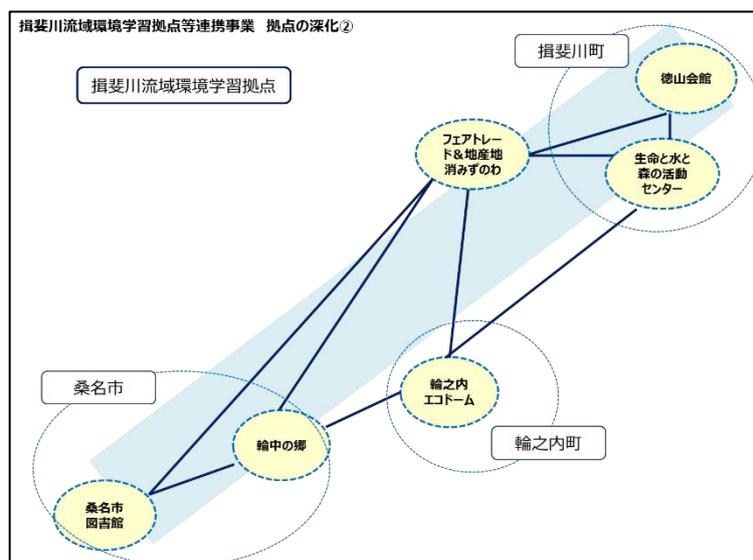
【支援による成果】

<ステークホルダーの変化>

事業当初、第1回プラットフォーム会議を実施した際は、揖斐川流域における環境学習拠点6ヶ所を想定し、6ヶ所のステークホルダー及び各拠点のある自治体、揖斐川流域で活動しているNPOを主体として会議体をつくることとした。この時点では、6ヶ所の拠点においては面識がない状況であった。

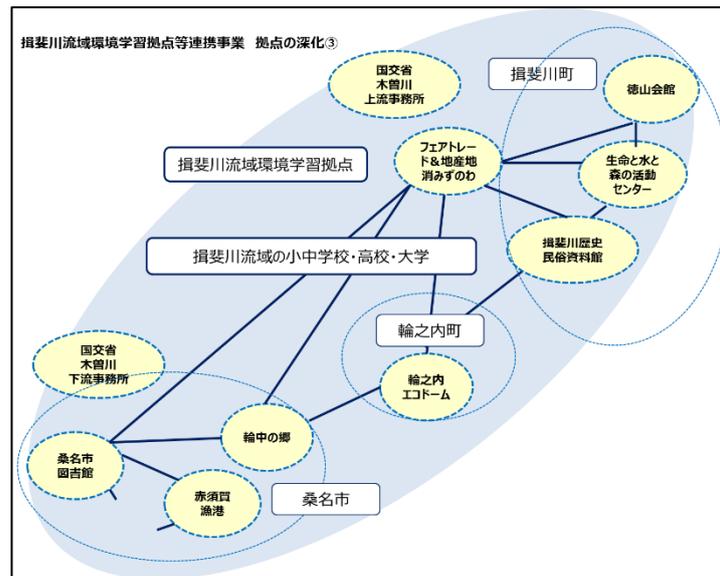


第1回評価会議で全員が顔を合わせ、それぞれの活動紹介及び揖斐川に対する思い、本事業でなにをすべきかを持ち寄った。第1回評価会議を終え、「共通のツール（教材）」を作成することとなり、NPO 法人泉京・垂井とEPO 中部が核となり、教材作成のためのヒアリングを行った。

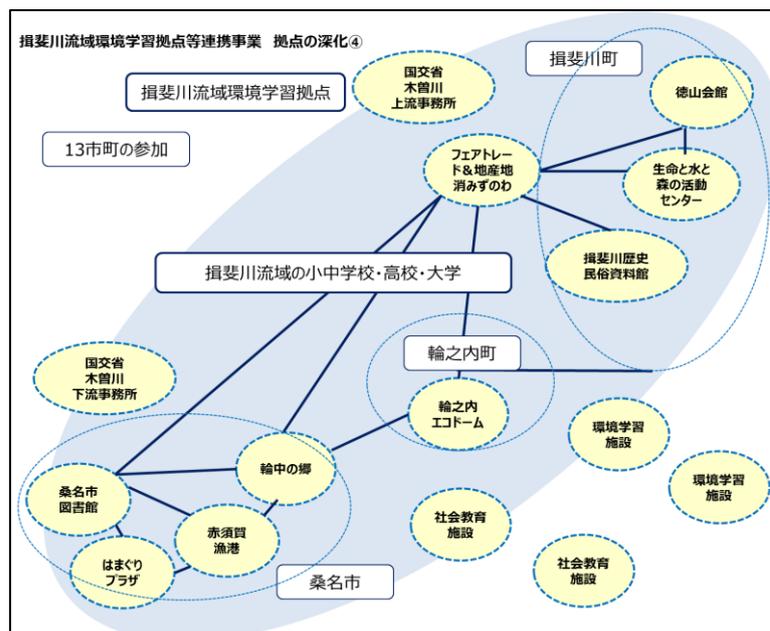


教材作成の過程において、自治体との関係性と、上流域内、中流域内、下流域内での関係性が強くなり、さらに国交省から資料提供等協力を得ることができ、関係性の幅が広がっていった。ある程度教材ができた時点で、流域に近い学校関係者などの教材の活用方法に関する意見交換を行ったため、評価会議メンバー、拠点関係者、映像教材出演者、学校教育関係者などさらに関係者の幅が広がった。

第2回評価会議では、作成した教材を共有、確認しつつ、MSC手法での振り返りを行い、各拠点のステークホルダー、評価会議メンバーの今後の展開への思いや役割を意見交換し、教材の改善をしつつ、次年度以降のいかに教材を活用し、各流域に暮らす人々、子どもたちの出会いの場、学びの場をつくるかを検討することができた。



今後の展開として、今年度説明することができなかった流域の市町や学校教育現場への働きかけに注力することが確認された。また、関係性ができた国土交通省との連携の可能性を検討することとした。



＜事業の変遷と成果＞

「揖斐川流域学習拠点等連携事業」については EPO 中部として、岐阜県と三重県の県境を越え、「流域」を拠点に、環境学習等拠点をつなぐことによる新たな学習手法の展開という点で非常にアグレッシブな事業であった。

当初のポテンシャルは、先に記述した通り、

- 上流部においては環境 NPO 等のネットワークがある
- 上流部においては活用できる環境学習拠点が 2 ケ所ある
- 中流部は、町と NPO の協働による 3R 及び環境学習を進めている拠点がある
- 下流部は、河口部の漁業の様子を伝えている教材とキーマンがいる
- 水害や輪中等を伝えている拠点がある

であった。想定した 6 ケ所の拠点間には連携はほとんどなく、ほぼゼロからのスタートであった。

まずは、揖斐川関連のキーマンとなる NPO 等のスタッフと打合せをして、揖斐川のポテンシャル、活用できる素材を確認した。本事業は拠点のある行政の参画が必須という条件があるため、揖斐川流域は 15 市町あるが、今年度は、可能性の高い 3 市町（揖斐川町、輪之内町、桑名市）で実施することとした。

下流域の桑名市は、揖斐川下流の漁協であり、ハマグリ、シジミの資源管理や環境学習、植樹などの活動をしている「赤須賀漁業協同組合」、赤須賀漁業協同組合と環境学習の教材を発行した「桑名市図書館」、揖斐川の水害の歴史を把握している「輪中の郷」に参加の依頼をした。

中流域に関しては、輪之内エコドームの運営管理をしている NPO 法人ピープルズコミュニティと輪之内町に参加を依頼した。中流のテーマは、肥沃な土地による農産物の生産と水害をテーマにした。

上流域に関しては、森林学習を展開している「生命の森の水の活動センター」、日本一のダムである徳山ダムの建設の歴史を伝えている「徳山会館」、揖斐川町に依頼をした。

拡大紙芝居、映像教材の作成にあたっては、国道交通省木曽川上流事務所、下流事務所に資料提供等の協力を得た。

映像教材作成にあたっては、各拠点に加えて、揖斐川歴史民俗資料館、輪之内町の住民の方、ハマグリ・シジミなど揖斐川の産物を販売しているお店の方に協力を得て、インタビュー映像を撮影した。

さらに参考資料を作成するにあたり、揖斐川流域の NPO、企業、自治体の協力を得た。

ESD コーディネーターの大鹿氏には、監修をしていただき、教材と学校教育の関連づけ、ESD との関連付けにおいてアドバイスをいただいた。

そしてある程度できた時点で、教育関係者の評価をえるための会議を実施した。

このようにほとんど関係性のなかったステークホルダーが、「揖斐川で共通ツール（教材）を作る」という一つの目標のもとで、関係性を育み、各地域の課題や、何を学ぶべきか、何を伝えるべきかを明らかにし

た。それは、「上流・中流・下流の風土と暮らしをつなぐこと」「過去、今、未来の生業とくらしをつなぐこと、この2つを重ねて、持続可能な未来のありかたを考える学習を展開することである。

今年度は3つの教材とマニュアルの作成の作業に重きをおいたため、教材づくりが目的に捉えられがちだが、まったくそうではない。「揖斐川に関わるステークホルダーの関係性を作るための教材づくり」であり、作成した教材を次年度以降、新たにステークホルダーを巻き込み、実施し、検証し、改善し、人づくりにどう貢献するかを検証する作業を始める。そのための準備期間であった。

学校教育関係者との教材についての意見交換会では、参加教員から「高校の家庭科の授業で、高校生が保育園に訪問して子どもたちと触れ合い、環境学習に取り組んでいる。環境劇を保育園児にしている。その際には紙芝居は利用できる」と具体的な活用案が出され、「動画のテロップが少ないのではないかな。聞き逃してはいけない言葉がたくさんあるため、重要な言葉はテロップにしたほうがいい」と学校教育現場で活用する際に必要な提案が出された。教員より「うちの学校ではこう使っていきたい」という具体的な案がいくつも出された。学校での展開方法、活用されるために何が必要かを教員の意見や提案を聞き、改善した。このように、現場の声を聞きながら、実施をして改善してより良いものにしていく作業の継続を評価会議メンバー、拠点担当者は認識した。

第2回評価会議で、MSC手法を取り入れ、ステークホルダーの変化をエピソードに表現し共有した際に、「河口の漁協の声が聞こえる」「直接の出会いや映像を介しての出会いにより、流域の核となる人たち同士の面識・交流が生まれた」等の連携の重要性を語るコメントがあった。それぞれの拠点でどう関わるか、上・中・下流が連携した学習を自分の拠点ではこうしたい、との意見が出された。「流域内で共有できる問題、流域の特徴や生活の課題等を共有できる教材ができたこと、関わったそれぞれが教材を通して共有できたことが大きな成果」との声があり、今後の方向性について拠点メンバー間で共有し、それぞれの拠点でツールを活用した環境学習の展開について、上・中・下流で連携したESD/環境学習の展開についても検討を始めた。

ツールづくりを通して、関わった各拠点が「流域」の観点での持続可能な地域づくりを理解し、より主体的に取り組んでいこうとする意欲が高まった。紙芝居、映像教材、参考資料と3つの教材を作成したことによって多様な世代を対象にしたツールを作成することができ、揖斐川流域の多様な主体に対するESD取組が可能になった。連携を深め、拡大し活用することとした。

流域の各拠点が出会い、情報や資源、スキルなどを共有したことにより、各拠点及び関係者の揖斐川流域でのESD取組の活性化へのモチベーションが高まり、多様な住民を対象としたESDプログラムづくり・実施、流域間でのESDプログラム実施の可能性が見出された。また、流域間で相互補完する体制、ネットワークが構築され、効果的な実践と実施の素地ができた。

このプロセスにおいて、以下の点を重要項目とし、チェックしながら進めた。

- * 揖斐川流域での事業を実施したい団体等のニーズを把握する。
- * 揖斐川流域、上流・中流・下流の関係者をつなぐ。
- * それぞれのもつポテンシャルを抽出し、共有し、何をすべきか、何を伝えるか、何ができるかを会議で協議し、ヒアリングで把握する。

- * 流域の拠点が共通に活用できる、今あるプログラムと関連づけて実施できる教材を作成する。
- * 教材作成の過程で新たな関係者を巻き込み、次年度につなげる。
- * 拠点のある自治体、国土交通省との連携、次年度以降の自治体や企業との連携を念頭にし、進める。
- * 流域にある小中学校、高等学校との連携の強化ができるような場、教材をつくる。愛知教育大学の監修を得る。
- * 教材をつくり拠点間をつなぐことで、それぞれが持つ課題を共通認識し協働して取り組む体制をつくる。
- * 多様な主体が連携することで可能にできることに取り組む（県域を超える、学校関係者を巻き込む、行政の参加を得る）
- * 学校教育での活用のために学習指導要領を踏まえた教材開発をする。
- * ESD の構成概念と ESD が育みたい力と態度を取り入れた教材を作成する。
- * 作成段階で、教員を交えた評価会を実施する。

<今後の課題>

今後の取り組むべき課題は以下である。

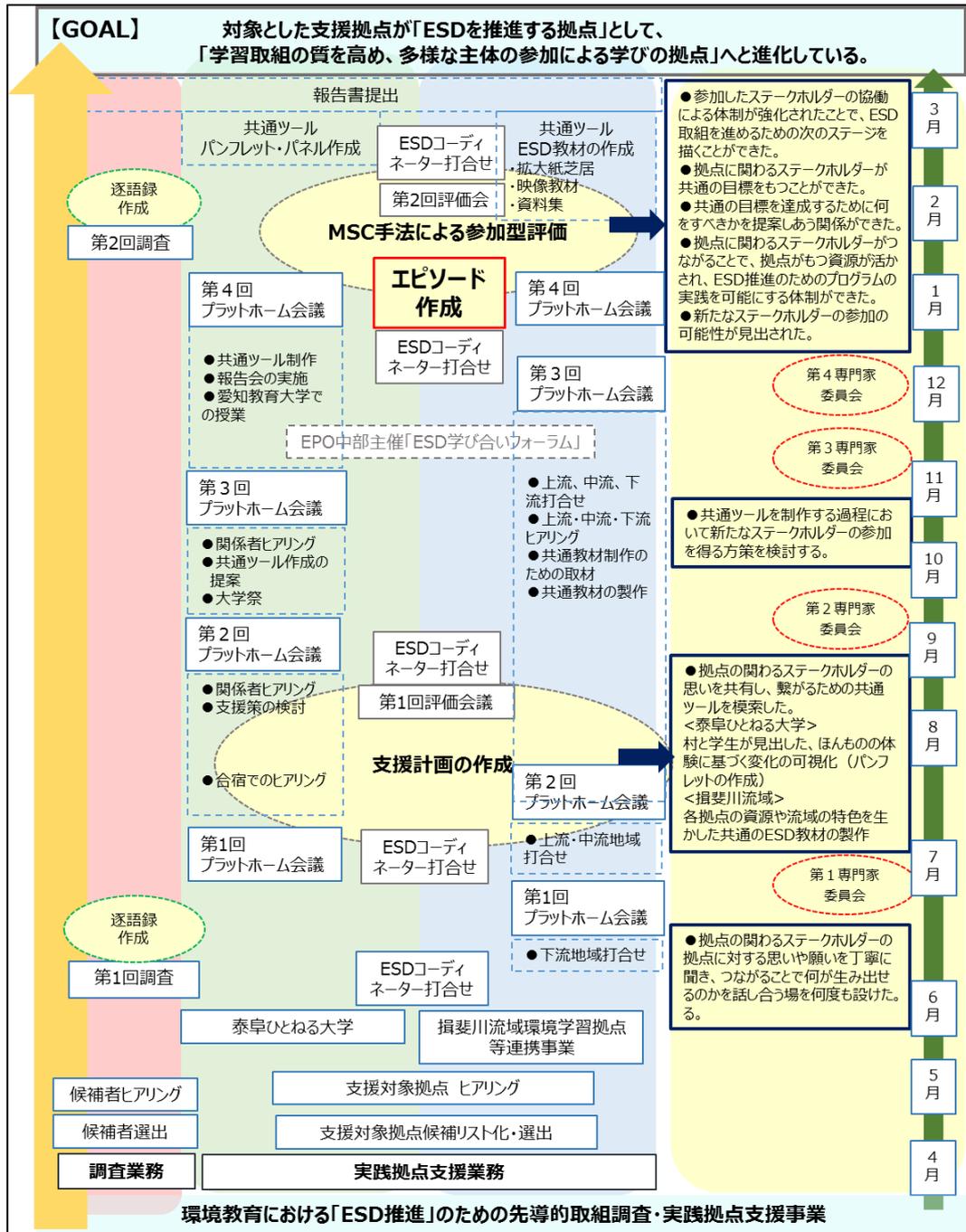
- * 学校現場での教材の活用
- * 多様な学習の場で、多様な世代を対象にした教材の活用
- * 教材を活用した学習を展開できる人材の創出と育成
- * 拠点連携による強みを生かした取り組みの展開
- * 揖斐川流域の12市町（揖斐川流域15市町のうち揖斐川町、輪之内町、桑名市除く）の参画促進（教育委員会含む）
- * 揖斐川流域の企業における教材の活用促進
- * 国土交通省等との連携事業の展開
- * 教材及び教材活用の授業（学習）の質の向上のための評価会（改善検討の場）の実施
- * 本事業の成果の汎用性を高め、他地域への展開の検討

今後も評価会議メンバーとの継続的な会議を行い、教材の活用及び拠点連携による学習の機会をつくりだす事業を展開する方策について検討する必要性が確認された。

4. 総括

(1) 本事業全体と各業務の構成

本事業は下図のように、「調査業務の実施」「専門家委員会への出席」「ESD コーディネーターの参加」「実践拠点業務の実施」の4つの業務項目の相乗効果によって事業目的を達成する構成となっている。



①業務全体の成果

業務項目「調査業務の実施」「専門家委員会への出席」「ESD コーディネーターの参加」「実践拠点業務の実施」の4つに分かれているが、目標である「ESD 推進拠点として学習の質を高め、多様な主体の参加による学びの場に進化したか」を実現するために、下記表のとおり、それぞれの業務から成果と要素（11項目）を抽出し、これを指標として活用する形で業務を遂行した。

<業務項目と抽出した成果と要素>

業務項目	主な目的・内容	主な抽出した要素と成果
調査業務の実施	各地域で ESD に取り組んでいる主体の地域 ESD に取り組むことでの成果、効果、課題を抽出する。	<ul style="list-style-type: none"> ● ESD 取組によって教員は変化する。 ● ESD 取組によって授業内容や手法が変化する。 ● ESD の授業を受けた子どもは変化する。 ● ESD 取組を実践すると学校と地域の関わりが変化する。 ● ESD と環境教育の違いは明確である。 ● ESD 取組を進めるにはコーディネーターが必要である。
専門家委員会への出席	<ul style="list-style-type: none"> ①評価手法の学習 ②企業の参画 ③伝え方、伝わり方の手法の学習 	<ul style="list-style-type: none"> ● MSC 手法による評価の実施。 ● 企業の参加を促すための情報とノウハウ ● ESD 取組の内容及び成果を伝えるためのノウハウ、手法（キャッチコピーとプレゼンテーション）
ESD コーディネーターの参画	第三者としてのつなぎ役、専門性の投入 ☆逐語録の作成	<ul style="list-style-type: none"> ● 実践拠点支援業務のプロセスにおける助言、アドバイス ● コーディネーターのコメントの質、内容の変化が把握できる。
		
実践拠点支援業務	ESD 推進拠点として学習の質を高め、多様な主体の参加による学びの場に進化	

主な抽出した成果や要素は以下の 11 項目だが、実践拠点支援業務を実施する際の指標として取り入れ、3つの業務との関連性を考えながら、業務を進めた。それぞれの項目において、2ヶ所の拠点で実施した内容は以下である。

- ESD 取組によって教員は変化する。
- ESD 取組によって授業内容や手法が変化する。
- ESD の授業を受けた子どもは変化する。
- ESD 取組を実践すると学校と地域との関わりが変化する。

<泰阜ひとねる大学>

泰阜ひとねる大学の「名古屋短期大学」モデルカリキュラムにおいても上記の 4 点については検証された。

名古屋短期大学の教員の変化、既存のプログラムを体系化し一過性ではない学びにすること、学生の変化、地元の村民の変化は先に記述してきた通り見られた。

<揖斐川流域環境学習拠点等連携事業>

作成した ESD 教材を活用した実践はまだ学校教育等でできていないが、教材を作成するにあたり、ESD の概念や培いたい力を整理しながら作成した。授業手法は「答えを提示しない」参加型授業とし、地域の参加を必須とした実践をし、効果を検証していく。

- ESD と環境教育の違いは明確である。

<泰阜ひとねる大学>

泰阜ひとねる大学のカリキュラムでは、「自然体験」をベースにはしているが、環境教育にとどまることなく、人々の営みや地域社会のありかた、人間関係の作りかた、コミュニティの作りかたといった視点を村が培ってきた人々の営みと歴史から「自分がどう生きるか」「生き抜く力」を学びとる内容となっている。持続可能な社会の作り手としての人づくりを実施している。

<揖斐川流域環境学習拠点等連携事業>

揖斐川の風土と人々の暮らしを教材にしており、揖斐川の水質の向上や揖斐川流域の水辺環境のみを題材にしているのではなく、その視点も含めて揖斐川各地域での特色を学習しながら流域の未来のありよう、持続性をどう確保するかを学習内容とした。

- ESD 取組を進めるにはコーディネーターが必要である。

<泰阜ひとねる大学>

村内、村と大学をつなぐ、調整する機能を要したため、NPO や大学教員がつなぐ役割、調整の役割をした。第三者としては、ESD コーディネーター（大鹿教授）や EPO が調整や新たな主体とのつなぎ役を担い、既存のプログラムに新たな視点や取組を投入し、調整した（愛知教育大学での講義実施、村長への原稿依頼等）。

<揖斐川流域環境学習拠点等連携事業>

NPO（泉京・垂井）と EPO がコーディネーターを担った。当初 ESD コーディネーターから、上流、中流、

下流それぞれリーダーシップをとれる主体、コーディネーターが必要だという指摘があったが、ESD を十分に理解し調整できる主体がこの 2 者だったため、上流と中流、中流と下流の 2 つに分け担当し各流域内の調整、全体の調整をした。自治体についてはすべて EPO が担った。

●MSC 手法による評価の実施

泰阜ひとねる大学、揖斐川流域環境学習拠点等連携事業と 2 ケ所とも第 2 回評価会議にて MSC 手法によるふりかえりと評価を実施した。各拠点で各ステークホルダーが「もっとも重要な変化と思うエピソードと、その理由」を書いて全員で共有をし、その中から、「もっとも重要な変化とその理由を一つ選ぶ」という手法であったが、各 2 ケ所の拠点ともステークホルダーの重要な変化を一つに選ぶことができないという意見があり、全員で全員のエピソードにコメントをし、全体をまとめて一つのエピソードとして提出をした。

この手法に対して、各拠点のステークホルダーの評価が非常に高く、変化をもたらした理由を明確にすることで、事業に最も必要なことがわかり、またそれを全員で共有し認識する過程を得たことでより協働力が高まり、全体のモチベーションがかなり高くなった中で今後の取組の検討をし始めていた。実施体制が強化された。

●企業の参加を促すための情報とノウハウ

泰阜ひとねる大学については、企業の参加についての検討には至らなかったが、今後企業の若手社員や新入社員の研修など受け入れを検討する際に、企業側の情報やニーズとして伝えたいと考えている。

揖斐川流域環境学習拠点等連携事業においては、資料集を作成する際に、揖斐川流域で環境取組等をしている企業 2 社の情報を提供することができた。企業が実施している活動との連携なども検討課題である。企業には作成した資料集を送付し、ヒアリングに出向く旨を伝えている。

●ESD 取組の内容及び成果を伝えるためのノウハウ、手法（キャッチコピーとプレゼンテーション）

泰阜ひとねる大学については、パンフレットとパネルの作成において、揖斐川流域環境学習拠点等連携事業においては、ESD 教材等（拡大紙芝居、映像教材、資料集、紹介チラシ）を作成する段階で、キャッチコピーやデザインをデザイナー等と熟考した。

●実践拠点支援業務のプロセスにおける ESD コーディネーターの助言、アドバイス

計 6 回の打合せ、各拠点の評価会議の際、泰阜ひとねる大学パンフレット、揖斐川流域環境学習拠点等連携事業の ESD 教材作成においてはかなりコミットをいただき、助言、アドバイスのもと業務を進めた。

●コーディネーターのコメントの質、内容の変化が把握

2 ケ所の拠点とも ESD コーディネーターのアドバイス、助言、課題に対するコメントの変化が見られる。第 1 回評価会議で指摘された内容が、第 2 回には指摘が反映されていた旨や、次の段階を目指すうえでのコメントに変わっている。

この 11 項目を指標としたことで、実践拠点支援業務において、「多様な主体の参加による学びの場の『進化』」という目標達成に向けた意識付けが行われ、ESD 推進拠点としての学習の質を高めるとともに、多様な主体による ESD 推進拠点としての位置づけを担保することができた。

②拠点支援業務の成果

拠点支援業務は、「評価会議（2 回）の開催」「プラットフォーム会議の開催」「自治体の参加」「アンケートやヒアリングの実施」の 4 つの業務が必須となっている。業務を実施し見出した 10 項目の成果を下記にまとめた。

業務項目	主な目的・内容	主な成果
評価会議の開催 2 回)	1 回目…支援計画の作成 2 回目…評価 ☆ESD コーディネーターの参加必須 ☆逐語録の作成	<ul style="list-style-type: none"> ●各ステークホルダー、各拠点のもつポテンシャルが明らかになった。 ●実施する計画の内容が具現化した。 ●実施した事業の成果を可視化した ●次に実施すべき活動等を見出した。 ●実施主体の組織体制が強化された
プラットフォーム会議の開催	関わるステークホルダーと必要に応じて会議を実施	<ul style="list-style-type: none"> ●各ステークホルダーの認識の齟齬がなくなった。 ●共通のゴールがより明確になり具現化した。 ●各ステークホルダーの役割が明確になった。
自治体の参加	支援拠点のある自治体が評価会議に参加。	<ul style="list-style-type: none"> ●各拠点が ESD 推進拠点として事業展開する際に、自治体の事業として展開できる。 <p><泰阜ひとねる大学> 泰阜村（村長が学長）</p> <p><揖斐川流域環境学習拠点等連携事業> 揖斐川町、輪之内町、桑名市立図書館、輪中の郷</p>
アンケートやヒアリングの実施	第三者的な関わりの人の評価を得る	<ul style="list-style-type: none"> ●拠点の利用者（受益者）の評価を得ることができた。 <p><泰阜ひとねる大学> 愛知教育大学生を対象にしたアンケート</p> <p><揖斐川流域環境学習拠点等連携事業> ESD 教材お披露め会・意見交換会に参加した教員等の意見抽出</p>
		
実践拠点支援業務	ESD 推進拠点として学習の質を高め、多様な主体の参加による学びの場に 進化したか	

<各拠点の特徴>

以下が、今年度実施（作成した）ESD プログラム及び拠点の特徴である。

	項目	泰阜ひとねる大学	揖斐川流域環境学習拠点等連携事業
支援 拠点 の特 徴	対象	泰阜村民と都市部の若者	揖斐川流域のあらゆる世代
	型	成熟型コミュニティ（泰阜村というコミュニティがもつ資源を生かした ESD プログラムづくりと実施）	広域発展型コミュニティ（流域コミュニティ/「流域」の価値を明らかにし、流域連携による ESD プログラムの作成、実施）
	拠点	泰阜村 1ヶ所	数ヶ所の連携（上流・中流・下流にある拠点の連携による揖斐川流域）
	フィールド	泰阜村	流域全体
	実施者	泰阜村民、泰阜ひとねる大学推進チーム	流域内環境学習拠点、学校、社会教育施設の職員他、活動するすべての人
	カリキュラム	対象によってカリキュラムが変わる	流域として共通の教材を活用（実施者、対象者によって使い方は変わる）

<各拠点の目標達成>

本事業の目標である、「ESD 推進拠点として学習の質を高め、多様な主体の参加による学びの場に進化したか」について、下記の 2 つの指標で評価し、下表のとおり整理したところ、2ヶ所とも目標の達成を果たしていると判断できる結果を得ることができた。

- ESD 推進拠点として学習の質を高めたか
- 多様な主体の参加による学びの場に進化したか

		泰阜ひとねる大学	揖斐川流域環境学習拠点等連携事業
目標 の 達 成	ESD 推進拠点として学習の質を高めたか	既存のプログラムを体系化して継続可能な名古屋短期大学のモデルカリキュラムを作成、実施した。参加した学生、教員、村の人の変化を促した。第 2 回の評価会議のコメントからも「まさに ESD である」と記述されている。	各拠点をつなぐ ESD 教材を作成するし、各拠点が持っている学習プログラムの質を高める教材を作成した。今年度は教員を主な対象にした模擬実施を実施したが、今後は児童生徒、多様な主体を対象にした学習を実施し、実施しながら学習の質を高めていく。
	多様な主体の参加による学びの場に進化したか	名古屋短期大学の学生をモデルとして実施することによって学びの質を高めることができた。愛知教育大学の学生、村長や村人など多様な主体の参加も得て、学びの場が進化した。	ESD 教材を作成することにより、揖斐川流域の多様な主体の参加による学びの場を作ることができた。今後この教材を活用して、多様な主体の参加による学び場づくりを展開する。

(2) まとめ ～今後の提案

今年度実施した2つの拠点は、当初のコミュニティのありかたや、構想した拠点像、関わるステークホルダーの数や多様性が異なる事業体として選定をした。支援業務によって、2つの違うシナリオによるモデル拠点が生み出された。この成果によって、環境学習拠点のESD化の汎用性が高まると考えたからである。

泰阜ひとねる大学は、一つの村、ある意味では狭い「コミュニティ」を拠点に、村内に核となる推進チームを置きステークホルダーや事業の拡大、事業の成熟化を目指すパターンである。

揖斐川流域環境学習拠点等連携事業は、もともと核がない散在しているコミュニティに共通課題を共有することでネットワーク化と、共通に活用するESD教材による連携体制づくり、流域内に散在している拠点を緩やかにネットワーク化し流域としての活動体制を強めながら、多様な対象に多様に教材活動プログラムを展開するパターンである。

今年度取り組み、見出した2つのパターン活かし汎用性を高めて、中部管内の多様な環境学習拠点等のESD化を進めることが求められる。各拠点の状況やステークホルダーを把握し、どのような拠点をつくりだすか、そのために何をするのかなど目標等が定める、ステークホルダーとの協議の場をつくり、具体的な計画づくりや地域のニーズやポテンシャルの共有をすることによって「拠点のESD化」のためのシナリオを作成することができる。各拠点、オリジナルの事業構想ができてくる。それが今回の業務における「支援計画」である。

本事業では、「調査業務の実施」「専門家委員会への参加」「ESDコーディネーターの参加」「支援業務の実施」で構成される大枠のスキームがあり、それぞれの業務の目的と機能が果たされたことにより、有用に活かされた。併せて、実践拠点支援業務の「評価会議やプラットフォーム会議の開催」「自治体の参加」「利用者のアンケートなどの実施」も、拠点のESD化、学びの質向上のプロセスにおいて十分に機能した。

大枠のスキームや業務コンテンツが有用に機能したことにより、拠点のESD化につながった。特に、2回の評価会議の内容は、ステークホルダーの連携強化、協働の関係性構築に効果的であった。

また、各拠点が共通のツールとして作成した、泰阜ひとねる大学の「名古屋短期大学のモデルカリキュラム」、揖斐川流域環境学習拠点等連携事業、「上流・中流・下流をつなぐESD教材」が、拠点のESD化を強く牽引した。作成することによって、ステークホルダーの意思が共有され、関係性が豊かになったからである。また、ステークホルダーの関係性の強さや豊かさによって、拠点の機能や実施するプログラムの質が変わってくる。

拠点のESD化には、

- ①拠点が実施するプログラム等のESD化
- ②拠点を運営する協働による実施体制のESD化

③拠点の ESD 化に対する評価と可視化

が必須となる。本事業のスキーム、支援業務のコンテンツがその一助を担っている。

今年度の成果は、違うパターンの拠点で実施したことによって、「～すれば～なる」というマニュアル的な発想ではなく、上記 3 点をルールとして、多様な拠点、ステークホルダーと共にその汎用性を試しながら、拠点の ESD 化を可能にすることができた。

5. おわりに

ESD 化した 2ヶ所の拠点の事業は継続する。
それぞれのもつ課題を改善しながら、次のステージに移る。

泰阜ひとねる大学は、
今年つくりあげたモデルカリキュラムの汎用性を高めるために、他大学の学生や企業の社員研修等への柔軟な対応をすすめていく。
その際の重要キーワードは、「接触」「継続性」である。

揖斐川流域環境学習拠点等連携事業は、
学校や拠点での ESD 取組の実践をする。
流域における 12 自治体の参加を促進する。
上流、中流、下流の交流による学習の場づくりを進める。
重要な要素は、「上流・中流・下流のレイヤーをつなぐ」「過去、現在、未来のレイヤーをつなぐ」、「2 つの違ったレイヤーを重ねる」である。

ESD 推進拠点として進化した 2 つの拠点が、より多くのステークホルダーを巻き込み、拠点利用者が増大し、ESD への理解や行動が促進されるよう、今年度の成果、成果物が活かされるよう、今後の改善、展開に期待し、支援をし続ける。

電子媒体収録資料

〈資料① 先進事例の調査事業〉

- ・先導的取組調査(第1回)逐語録
- ・先導的取組調査(第2回)逐語録

〈資料② 拠点支援事業「泰阜ひとねる大学」〉

- ・支援計画・ふりかえりシート
- ・第1回評価会議(長野/泰阜村)逐語録
- ・第2回評価会議(長野/泰阜村)逐語録
- ・名古屋短期大学茶谷ゼミ学生ヒアリング記録
- ・地元関係者ヒアリング記録
- ・愛知教育大学大学生アンケート
- ・「本事業を通して、自分や周りの人に起こった重大な変化」エピソード集

〈資料③ 拠点支援事業「揖斐川流域環境学習拠点等連携事業」〉

- ・支援計画・ふりかえりシート
- ・第1回評価会議(三重・岐阜/揖斐川流域)逐語録
- ・第2回評価会議(三重・岐阜/揖斐川流域)逐語録
- ・ESD教材説明及び意見交換会(第4回プラットフォーム会議)議事録
- ・「本事業を通して、自分や周りの人に起こった重大な変化」エピソード集

〈資料④ ESDコーディネーターとの連携〉

- ・第2回打合せ逐語録
- ・第6回打合せ逐語録

〈資料⑤ 成果物〉

- ・泰阜ひとねる大学パンフレット
- ・揖斐川流域環境学習拠点等連携事業 ESD教材(紙芝居、映像教材、資料集、活用マニュアル)

リサイクル適性の表示：印刷用の紙にリサイクルできます。

この印刷物は、グリーン購入法に基づく基本方針における「印刷」に係る判断の基準に従い、印刷用の紙へのリサイクルに適した材料〔Aランク〕のみを用いて作製しています。

